
Tales of Life

黒羽拓夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of Life

【NZコード】

NZ188V

【作者名】

黒羽拓夢

【あらすじ】

主人公とそれを取り巻く様々な個性を持つたキャラクターたちによる涙あり、笑いありの長い長い三年間の学園生活の物語。この作品はフィクションです。実在する人物、企業、団体、事件とは一切関係ありません。【次話：12/31投稿しました】【校正：1/24EP1迄完了】(詳しくは活動報告)【

【謝辞：閲覧有り難う御座います】

Scene 1 ハジマリ（前書き）

始まりはそう偶然で

終わりはそう必然で

恋は人を盲目にさせるから

見えてるものを見落とした

Scene 1 ハジマリ

自分の記憶を探つて思い出して欲しい。
よくこんなシチュエーションを見たりしないだろつか？

小説やアニメの冒頭で走つている主人公を

俺は結構見る。

何故つて言われば、その答えは非常に簡単だ。
小説やアニメが好きだら。それ以外の答えは知らないね。
ついでに言えば、ゲームも大好きだ。RPGとか泣きゲー、グロ
ゲーとか。

さて、話を戻そう。

何故俺がそんな事を考えているかと言えば、今俺は走つているか
らだ。

今までなら「また走つているよ！」くらいで見ていた俺を殴りた
いね。だって当の本人は、こんなにも焦つているのだから。
正に当事者になつて初めて分かるつて奴だ。
でだ。何故、走つているのか？

理由は簡単だ。焦つているからだ。

何故、焦つているか？

理由は簡単だ。遅刻しそうだからだ。

よくある設定だろ？

だが、ここは現実の世界。二次元とは違う。作り物のバーチャル
な世界じゃない。

呪文を唱えても、死んだ人間が生き返るはずもないし、エルフと
か言う耳の長い人種も、白い羽を背中に生やした天使も、この現実
世界には存在するわけがない。もちろん黒い羽を背中に生やした悪
魔も。

だから、パンを加えた少女にぶつかったりなどしない。

それに、詳しくは知らないが、俺がやつたゲームだけで言うのならば、二次元で少女にぶつかつたりするのは入学の時だろ大体？そして、同じクラスになつて再会。……そんな感じだろ？

だが、今日は三月十二日。

東京なら桜が見れる頃だらうか？ 流石にまだ見れないか（笑）でも俺には関係ない。

何故ならここは北海道。まだ桜は開花しないし、雪も残つてゐる。まあ、桜など見たくもないのだが。

察しのいい奴は三月の時点で分かつたと思うが、今日は入学試験の結果発表なのである。入学試験の結果発表なのである。

大事な事なので一回言いました。

え？ 三月とか普通に考えれば遅いから分からぬ？

……あ、急がないと！

数分後。

なんとか学園の門の前まで辿り着いた俺を、ムスツとして立つていた涼葉が俺に近付いて話しかけてきた。

「アンタ、何分アタシを待たせる気？」

「ゴメン。いや、ホントにゴメン。……ちょっと用事があつてさ」

俺は手を合わせて謝る。用事があつたとはいえ、遅れて來たのは悪い事だから。

涼葉の方も、俺の用事が何か察したのか、それ以上追及してはこなかつた。

「まあ、いいわ」

そう言つと涼葉は学園の方へ身体を向けた。同時に涼葉の黒髪のポニーテールが奇麗に空を舞う。

「さ、早く見に行きましょ」

「合格してるかな？」

俺の不安げな言葉に涼葉は自信満々に答える。

「アタシが合格してるのは当然の事よ。落ちるなんてありえないわ」

「凄い自信だな。俺は不安だよ」

「当然ね。寧ろ、問題はアンタよ。アンタが落ちてたりしたら意味ないんだからね！」

怒られてしまった。

確かにもし落ちてたりすれば、今までの勉強が水の泡だ。申し訳ないが、こればっかりは恨みっこなしの実力勝負。俺のために何処かの生徒さんには桜を散らしてもらおう。

俺が入学するために。

涼葉が入学するために。

「待つてよ、涼葉」

俺は涼葉の後を追つて学園の門を潜る。すでに、数え切れない程の受験生が自分の番号を確認している。手をあげて喜んでいる奴、友達と抱き合っている奴、膝を折り泣いている奴、まるで生氣を吸い取られたかのように茫然としている奴もいた。

「七六五……七六五……」

俺は自分の番号を必死に探すが、身長が百七十程度しかない俺では、人混みが邪魔をして下の方に書いてある番号が読めない。

「五七三……五七三……。見えないわね」

そりやあ、俺でさえ見えないのに、百六十弱の身長しかない涼葉に見えるわけがない。

「突撃するわよ！」

「ええ！？」

そう言つと、俺の制止も聞かず、涼葉は人混みを掻き分け、どんどん前へと進んでいく。

「マジかよ……」

昔はこんな性格じゃなかつたのに……。

まあ、単に猫被つてただけかもしれないが。
仕方ないのかな……。あれ、じゃね……。

「すいません……」

俺も周りの受験生に平謝りしながら、涼葉についていく。

「五七三……あつたわ！」

涼葉が自分の番号を見付けて万歳して喜んでいる。
やはり内心は不安だったのだろう。

「さて、七六五は……」

「七五一……七五三……七五九……」

ヤバい。冷や汗が止まらない。
ドキドキする……。

「…………」

「七六一……七六四……」

雫が滴り落ちるのが分かる。

「…………」

「七六五……七六五一……」

「…………あつた」

俺は無意識に言葉を発していく。

「え！？ ホント！」

涼葉が俺に聞いてくるので、俺は自信を持つて返してやる。

「ああ、あつたよ」

「やつたあ！…………当然よね！」

涼葉も自分のように喜んでくれているようだ。

正直、凄く嬉しい。

何故なら、俺の彼女である涼葉と同じ学園に通えるのだから。

ずっと一人で頑張つて、目指してきた……。

色々な困難を乗り越えて、今俺たちは幸せの切符を手にしたんだ。

合格と言つ名の数字が入つた切符を。
偏差値七十七の名門私立校の

「」の葉鍵学園に！

Scene 1 ハジマリ（後書き）

目が醒めた時には
全てを失っていた
あの日祈った願いも
あの日交わした誓いも

Chapter 1 再会（前書き）

命の砂時計が落ちるよ

止まらずに 戻らずに

夢でありたいと願つた

夢物語を呟いた

四月七日。

今日俺は葉鍵学園の門を潜つた。

何故かって？ それは愚問な質問だ。

俺がここに居る理由……。それは至極簡単なものだ。

俺はこの学園に愛かつたのだ。

ここで三年間を過ごし、そして夢を叶える。

その為に葉鍵学園に入ったのだから。

今、体育館です。立たされてます。正直辛いです。現実でも画面の中でも、校長の話は長い。とにかく長い。これでもかと言つほど長い。

俺は絶対、話は短い校長の方が人気であると思つね。こんな感じで「校長です。じゃ、解散」的な方が良くな？……流石に短すぎるか？

周りを見ると、新入生二百十人の殆どは明らかに「早く終われ」って思つている顔をしている。もちろん、俺もな。

まあ、名門私立校なだけあって、座つたり談笑してる奴はいないみたいだが。そもそも、そんな奴はこの学園を受けようとも思わないだろうがな。

「え～。そうですね～。では、諺を一つ……

「はあ……」

俺はため息をついた。

俺は別に太つていい訳ではないが、流石に同じ体勢で一時間以上立たされるのは辛い。

上級生は座つてゐるのに。これは最悪だ！ イジメだ！
白髪爺が与えてくる拷問は、まだまだ続きそうだ。

俺、思うんだけど、いつその事、これを罰にしたら不良生徒は絶対減るって！

昔と違つて体罰とかダメだからね。非常に素晴らしい体罰になると思つよ、うん。

時間の無駄遣いベスト三の中には必ず入るであろう校長先生の長話は、まだまだまだ続く。

俺が苦行を終え、漸く椅子に座ることが出来たのは、せりに一時間後の事だった。

「一年A組の担任を務めることになった“佐倉智夜”だ」

担任の智夜先生は、俺と同じでブラウン色の髪の毛だった。
まあ、分かりやすく言うのなら、茶色？でもブラウンって書いてあつたから少しは違うのかな？

ブラウン＝茶色だから単にかっこよく書いてあるだけか？ 英語にするとかっこよく感じるし。

ぶつちやけ、髪を染めてはいるけど、詳しくは知らないたりするんだよね。

それにしても、担任の智夜先生は若く見える。二十半ばって感じだ。

男の俺から見てもイケメンに入る身体と顔をしている。

身長は百八十位か？ ぶつちやけ、羨ましい。俺もそのくらい欲しいものだぜ。

「実は今年から先生となつたんだ。つまり、君たちは初めての生徒と言つわけだ。初めてで分からないうことも沢山あるけど頑張つて行きたいと思う」

先生になつて一年目で担任になれるの？ と俺は少し考えたが、確かに年寄りが担任よりはいいのかもしれない。話も合つだらうしね。

会つてすぐだから分らないが、見た目だけで判断するなら、優

しそうだし。

それに、ここは葉鍵学園。東京大学の偏差値が約七十弱位なのに、
ココの偏差値は七十七。

簡単に言えば、東京大学より頭のいい奴が通っている。
まあ、東京大学は文字通り大学で、葉鍵学園は高校なので一概に
は言えないが。

でも、この学園の生徒が東京大学へ受験した場合、九割九分九厘
以上は合格するから強ち間違いではないけど。

そんな所で担任を持たされたのだから、担任の智夜先生はきっと
凄い人なのだろう。大学院主席で卒業とか？

「一年A組、四十一名。責任を持つて全員卒業させて見せる。三年
間、宜しくな！」

校長先生とは違い、話は数分で終わった。

そして、教室を出て学園の敷地内にある寮の案内が行われた。
どうやら、ギャルゲーと同じで寮は男女別々のようだ。……当た
り前？

一階が食堂で、二階が一年生、三階が一年生、四階が二年生とな
つている。

因みに一人部屋の上にエレベーター付きだ。どうやら、年を重ね
る事に階段の上り下りの苦は受けないでみそうだ。
でも、普通寮の部屋って、卒業までずっと同じ場所なんじゃない
だろうか。別にいいけどね。

決して、移動が面倒とかじゃないんだからな。勘違いするなよ。
そうそう、後、ギャルゲーでは行けるが、現実などでは中々行け
ない屋上への出入りは自由だ。

と、言つことで、早速屋上に居ます。

あ、分かつてるとと思うけど寮の屋上にね。

学園の屋上も出入り自由みたいだが、今行く必要はない。って言うか、わざわざメンディ。

「いい空氣だ……」

俺は空氣を吸う。

朝から体育館に教室に、人口密度の高い場所だらけだったので、息が詰まってしまった。

それに、知り合いが一人も居ないのはやっぱり心細い……。

「……」

俺はそんな気持ちを払拭させる為、屋上からの景色を眺める。学園は街から少し高台にあるので、屋上からは街を一望できる。太陽が沈もうとして醸し出すオレンジ色の夕日が、街を鮮やかに包む。

「綺麗……」

不意に声が聞こえた。

左からだつた。俺は左へ顔を向ける。

寮は対になつてるので、声の正体は女子寮の屋上に居る彼女から発せられた声だつた。

その彼女は、俺と同じようにオレンジ色に染まる街を眺めている。遠目にしか分からぬが、とても可愛いという事が分かる。

俺は詳しくないから分からぬが、どつかの雑誌の表紙を飾つてゐるアイドルと言われてもまず疑わないね。

その時、彼女がこちらに気付いたのか、驚いてゐる。

対になつてゐるとはいへ、やはり少なからず離れてゐるので詳しい事は分からぬが、同じクラスに居た彼女に面影が似ていたので同級生だと思う。

なぜ驚いてゐるかは分からぬが、同じクラスならば仲良くしてた方がいいと思い、俺は話しかける事にした。

「よつ！ お前つて確かA組の奴だよな？」

俺が話しかけても彼女は驚きの顔を隠さない。

「……」「……」

しばらく無言が続いた後、彼女が漸く重い口を開いてくれた。

「……恭ちゃん……だよね？」

彼女が俺の名前を呼んだ。

確かに俺の名前は“緑川恭介”だ。

だが、おかしい。

俺は名前を彼女に名前を名乗ったか？

否！ 決して名乗つてなどいない。

ならば何故彼女は俺の名前を知っているのか？

下駄箱は男女で場所が違うから違う。

体育館で俺の名前を知る事など出来るはずもない。

教室の机には名前が書いてはあつたが、四十二人も居るのに俺の名前など覚えているとは思えない。

当然、寮でも知る事など出来る訳がない。

だとしたら考えられるのは、昔会つた事があるといふことだけだ。

「恭ちゃん……だよね……？」

彼女が自信なさげな声で俺の名前を呼ぶ。良くな見えないが、不安そうな顔をしている。

「そうだけど……」

「やつぱり！」

さつきまでとは一変。彼女は嬉しそうな顔をする。声も明らかにトーンが上がつている。

「ゴメン。昔、どこかで会つたけ？」

俺は素直に覚えてない事を告白し、聞く事にした。嘘で知つているフリをするより、いいと思つたからだ。

「そう……仕方ないね。うん、恭ちゃんは悪くないよ。悪いのは私だから」

すると、彼女は一瞬暗い顔をしたがすぐに笑顔を浮かべて俺は悪くないと庇ってくれる。

悪いって、何の事だろう？ セツト、ただ単に覚えていない事を庇ってくれているだけかな。

「私だよ。『植田桜花』だよ。小学校の時、一緒に遊んだでしょ？」

そう言われて、俺は小学校の頃の記憶を漁る。すると、小学校低学年の時、桜花と遊んだ記憶が出てくる。でも、小学校の高学年の時には桜花はもう居なかつた。どうしてだつける？

「途中で転校しちゃから、覚えてなくとも仕方ないね」

「そうか、転校したから高学年の時は遊んだ記憶がないのか。」

桜花の言葉で理由が分かつた俺は覚えていた事を告げてやる事にした。

「覚えているよ。ちやんと」

「ホントー？」

桜花が再び、明るいトーンに変わる。

「ああ。さつきまでは忘れてたけどな」

「いいの。思い出してくれただけでも嬉しい……」

桜花は仄かに顔を赤くしてるように見えた。

「……」

恥ずかしいのか、顔を下に向けてしまつた。

「桜花。でも、嬉しいよ。知り合いで居なくて心細かつたんだ。これからよろしくな！」

俺は素直に心の内を桜花にぶつける。

「…………うん。こちらこそよろしくね、恭ちゃん！」

俺の問いかけに、桜花は俺が知る中で今日一番の笑顔を見せてくれた。

Chapter 1 再会（後書き）

僕の小説の脚本 シナリオ は
HAPPY ENDの皮を被つた
BAD ENDしかなくて
でも それでもいいんだ

Chapter 2 将棋は導く（前書き）

手に入れた一冊の本を

適当に捲らないで

だつて 再び読むことは

ないのだから

俺は今、寮と校舎を繋ぐ渡り廊下で桜花を待つている。

「……早かつたかな」

昨日、屋上で会った後、明日一緒に朝食を食べようと約束していたのだ。

だが、その約束の時間まではまだ十五分近くもある。

「……まあ、待たせるよりはマシだよな……」

俺は携帯を開き、桜花が来るまで待つ事にした。

「ごめんね……待つた？」

桜花が来たのは五分後の事だった。

良かつた……定刻通りに来ていたら、十分も待たせる所だったぜ。

「いや、全然。だから、気にしないでいいよ」

「恭ちゃん……やっぱり優しいね」

桜花が笑う。ぶっちゃけ、かなり可愛い。

昨日はあんまり詳しく述べなかつたが、今日は田の前に居るのでその可愛さがより一層分かる。

身長は百五十五よりやや高いって感じで、紫色の髪に赤いリボンをつけている。

服装は……もちろん制服だが、とても似合つていて、一次元の世界から飛び出したみたいだ。

「これが日本の技術！ スリー・ディかあ！」

セーラーワンピース+ケープの制服で、全体的に薄い黄色が基調で、それぞれの淵には濃い赤色になつていて、セーラーその中に黄色い線が付いている。

取り外し可能なケープはピンク色で、暑い時は着なくて良いらしい。

その上に濃い赤色のリボンが可愛いをアピールしている。普通に服として着てもオシャレだろう。

まあ、桜花は可愛いので何でも似合つだらうけど。

最近はリボンよりネクタイの方がアイドル人気で大ヒットしているらしいけど、俺は断然リボン派だぜ。

胸はBという所だろう。少ししか膨らんでない所が良い。ドストライクだ。歌でBは中途半端って言われたけど、無い方がいいけど少しは有つた方が……それがいい。

なんて、少し馬鹿な事を考えていると桜花が心配した顔で話しかけてきた。

「大丈夫？ どうかしたの？」

「いや、大丈夫だよ。あまりに桜花が可愛いので見とれてたのさ」嘘ではない。本当の事だ。

R 十八の所を見ていましたが。

「はう……」

桜花は急に顔を赤らめてしまつ。

「さて、そろそろ食堂に行こうか？」

俺はケータイを閉じ、女性ものと違い黒が基調の制服に付いている内ポケットにケータイを仕舞うと、桜花を促す。

「う、うん。そうだね、行こ」

桜花はそう返事をし、俺と一緒に食堂へと向かう。

朝知つたんだが、寮にある食堂は自分で作れつて所なので、基本的に小腹を空いたから夜食でもつて人が利用するらしい。部屋にはキッチンがないからね。

だから、本来は学園側の食堂で朝昼夜の飯を食べることになる。

まあ、そのお陰で桜花と一緒に朝食を食べるんだから良しとするか。

「混んでるね……」

食堂に入るなり、桜花がそう呟く。

「そりだな……。全校生徒が一辺に集まるからな」
食堂の広さは寮の食堂の何倍も広い。同じ大きさなら入りきらな
いだらうから当然だらうけど。

俺と桜花人ごみの中に入り、俺たちは券売機の前へとやつて来る。
混雑しているが、少し遅い為か、案外あつさりと並り着く。

「なになに……」

俺はどんなメニューがあるのか、じつくじと見る。

「色々あるな……。ん~迷うぜ」

「一通りは揃つてゐみたいだね。朝だし、軽く普通にサンドイッチ
でいいんじゃない?」

「焼きおにぎりと悩んだけど、じゃあ、桜花の案を採用かな」
俺はそう言つて、サンドイッチの券を一つ購入した。

「あ! 俺と同じタマゴサンドにしちゃつたけどいい?」

俺は勝手に同じタマゴサンドを選んでしまつた事を詫びる。
つい、いつもの癖が出てしまつた。

「いこよ。……その、恭ちゃんが選んでくれたものなら何でも……」

桜花はモジモジとして顔を下に向けてしまつ。

「じゃあ、受け取つてくるから席を確保しててくれ~?」

「うん。任せて」

そう桜花に告げた後、俺は券を持つてタマゴサンドを貰いに、桜
花は席を確保する為に空いている席を探す。

因みに、ここは食堂は券になつてゐるものは全部無料だ。つまり、
ただで食べることができる。

「お願ひします」

俺はタマゴサンドの券を一枚、白いHプロンを着てゐるおばさん
に渡す。

「はい。ちょっと待つてね」

そう言つて、おばさんは棚から既に完成してゐるタマゴサンドの載
つている皿を、一つ俺に渡す。

「はー。どうぞ」

「ありがとうございます」

俺は礼を言つて、桜花のもとへ向かつ。

「さて、何処にいるかな?」

そう呟き、桜花を探す。

「あ、恭ちゃん。いらっしゃよ」

桜花が手を上にあげて手招きをしてくれる。
ちゃんと、席を確保出来たみたいだな。俺は桜花が確保してくれた席に座る。

「はー。タマゴサン」

俺はテープルを挟んで田の前にいる桜花にタマゴサンでを渡す。

「ありがとう。恭ちゃん」

桜花は笑顔で喜んでくれる。こんな事で喜んでくれるなら毎日だつてしてやるぞ。

「今日から勉強だな。一緒に頑張るつな」

「恭ちゃんなら大丈夫だよ。頭良いし」

「そんなことないよ。だってこここの生徒はみんな天才なんだから」

「……確かに。みんな天才だね。でも恭ちゃんなら乗り越えられる

よ」

俺より上の奴を乗り越えるか……あー…

「さ、早くしなこと時間になるし食べちゃおうぜ」

「うん」

俺たちが朝食を始めた。

「やうなんだー」

「そりなんだよー」

タマゴサンだけでは、食事は直ぐに終わり、俺と桜花は話しどで盛り上がっていた。

その時、隣の席から声が聞こえた。

「くつ……。王手飛車取りだと……。流石、最高峰のコンピュータ

――――――

隣の席の男子生徒は、すでに食事を終えてケータイをガン見している。

王手、飛車……」の二つから導かれる結論。どうやら、ケータイのアプリで将棋をしているようだ。

「将棋？」

俺は隣にいた生徒に話しかけた。

何故なら、俺は将棋が大好きだからだ。

「え！？ ああ、そうだ」

隣にいた生徒は、俺に携帯の画面を見せてくれる。盤を見る限り、既に終局間近まできている。

「これはナムコナのアプリだね」

「ナムコナの将棋アプリが一番強いし使えるからね。しかも無料だし」

ナムコナとは大手の大企業で、テレビゲームや携帯ゲームなんかも手がけている。

この将棋アプリもその一つだ。

最近は携帯電話でも、業務用パソコンには劣るけど、家庭用パソコン程度の力はあるからな。

ホント、日本の技術力には完敗だぜ――

――でも、俺は日本人だから完勝だ――

「これは、もう無理じゃね？」

「そうなんだよね――。飛車取られたら、もう無理なんだよ――」

「何かいい手はないものか……」

「ううん……」

二人して考え込む。

桜花は、将棋が分からないのでボツンとしている。が、仕方ない。今回は許して貰おう。

だつて、将棋に勝てるボードゲームはないから――

結局、いい手は無いという結論が出て、ちゅうつビチャイムもなつたので切り上げる事となつた。

そして、三人で教室に向かうのだが……。

「え？ 君たちもAクラスなのか？」

「ああ。偶然だな」

「なんと、同じA組だつた。なんと云つ偶然か。

「あ、いい忘れてたな。俺は“大野光輝”。よろしくな！」

光輝が、親指を上げてdの形で突き出してくる。

「俺は恭介。緑川恭介だ。これからよろしくな

俺も光輝と同じ親指を上げてdの形にして突き出してやる。

「私は、桜花です。植田桜花。恭ちゃんとは幼馴染みです」

桜花は流石に親指を上げて突き出したりはしなかつたが、笑顔で名前を告げる。

「恭介に桜花ちゃんだね。じゅあらじゅありしくな！」

「ああ。これから仲良くしようぜー！」

「もちろんー！」

廊下で話していたら、先生が來たので、俺たちは教室に入り席に着いた。

「さて、今日から授業を開始する訳ですね。俺は“松本雅治”です。担当教科は一時間目の授業、国語総合になる」

雅治先生は、担任の智夜先生に比べると、年はぐつてると思つが、それでも三十はいつてないと思つ。

ネクタイをピシッと閉め、髪は黒色なので凄く真面目やつに見える。……と言つても、ほとんど坊主だけだ。

何だ？ この学園は若い先生が多いのか？

そう言えば、昨日の体育館に居た先生たちは確かに若そつな人が多かつた気がする。

「さて、では早速授業を始めましょうか。皆さん教科書の十一ペー

ジを開いてください」「

言われた通り、俺は教科書の十一ページを開く。

タイトルには、屋上の選択、と書かれている。

「今日からこの屋上の選択をやっていくよ。では、テキトーに……。じや、優希ちゃん読んでくれる?」

「は、はい、ですっ」

まさか自分が選ばれるとは思ってなかつたよつで、声が上ずつている。

席を立つた優希ちゃんは薄い黄色のロング髪で左側に小さな花飾りを一つつけていた。

身長は桜花より少し低いくらいに見えるから、百五十五くらいだと思つ。

桜花とは違うが、また違う可愛らしさを持つている。

「屋上の選択。それは偶然だつた。余りにも偶然だつた。ただ、特に理由もなかつた。でも、何故か僕は屋上へやつてきた」

放課後。

教科書を詰めていた所に光輝がやつて來た。

「なあ、恭介つて将棋強いの?」

そう聞いてきたので「特に段とかは持つてないよ。ただの趣味の一つみたいなものだから。だから、強いかどうかは分からないな」と、素直に返す。

別に偽る必要もないしね。正直、中の上くらいはあると思つているが。

「へえ～じやあさ、これから勝負しない? 僕の部屋に将棋盤あるし

「こいね。やるつせ

し

特に断る理由もないのに光輝と将棋をする事にした。

「一緒にどうか行こう?」

「そこに、桜花が話しかけてきた。

「悪い。今日は光輝と一緒に将棋することにしたから、また今度ね俺の言葉に桜花は一瞬、瞳の光が消えたが、直ぐに笑顔で「……そっか。恭ちゃんにも用事はあるもんね。なら、仕方ないよね。うん。別に女の子と遊ぶわけでもないし……」後半は何言つてるか聞き取れなかつたが、分かつてくれたようだ。

「じゃあ、また夕飯の時にね」

そう言って、桜花は教室を出でていった。

「じゃ、俺たちも行くか

「ああ、負けないぜ」

俺の勝利宣言に光輝は「言ひじやん! でも、勝つのは俺だぜ。お前を俺の将棋テクニックで、敗北へ導いてやるよ」と、逆に挑発してきた。

「敗北へ導かれるのは光輝、お前だ」

俺たちは光輝の部屋へと向かつ。

……確かに、将棋は導いてくれた。

俺と光輝を導いてくれた。

友達へとな。

刻まれる時間は

誰にでも平等だけど

錯綜と飽食の世界は

量が同じでも 質は違つんだ

Chapter 3 夢願づ屋上（前書き）

夜の校舎に二人

校則違反の屋上から

寒い身体を温めながら

一瞬の煌めきを待つてゐる

『べ、別にあんたのために作ってきたんじゃないんだからね！ 勘違いしないでくれる！？』

そう言つて来たのは、俺の彼女。

正方形の箱を可愛い風呂敷に包んで持つている。

それは、もしかしなくとも、もしかすると……。

「そんなこと言つて～」

カチッ

『で、でもあんたが可哀想だから仕方なくよー。仕方なくなんだからね！？』

「でへへ～」

つい、声が出来てしまつ。

でも、仕方ないさ。俺の彼女が弁当を作つて来てくれたのだから。嬉しそうで、今すぐにでも電波ソングでも歌いそうだぜ。

カチッ

『お弁当……早く受け取りなさいよー。手が疲れるじゃない！？』

「ぐへへ～」

「コンコン

ん？……『氣のせい』か？

ゴンゴン

明らかに、パソコンのマウスのクリック音とは違う音がする。

「恭ちゃん……どうしたの？」

「桜花！？」

何故？ 『』は男子寮だぞ！

「どうしたの？ ねえ恭ちゃん！」

「いや、大丈夫だ！ 何でもない！」

俺はとつあえず、扉の向こうに居るであのつ桜花に向かつて話しかける。

「よかつた……恭ちゃん、時間になつても出でこないから……」

桜花の言葉に、俺は時計を見る。

七時三十七分。

しまつた！ 完全にギャルゲーに時間を奪われていた！

その時、オート機能が作動して『ねえ、恭介！ 聞いてるの！？』
音声が再生されてしまった！

「……恭ちゃん。誰かいるの？」

ヤバい！

理由は分からぬけど桜花の声色が怖い！

「中に誰もいませんよ！」

俺は桜花に叫ぶと同時に、素早くギャルゲーをセーブしてパソコンの電源を落とす。

そして、目の前にある長方形の箱を焦つてポケットに終い、扉を開ける。

そこには、桜花が立っていた。笑顔だが、目は笑っていない。

「……恭ちゃん。本当に誰も居ないの？」

「も、もちろんだよ！ さあ、朝食たべにいこりばー！」

桜花は、まだ疑つてはいるようだつたが、男子寮に女の子が居るのはヤバいと捲し立て、食堂へと連れていく。つてか、本当に誰も居ないのに、俺は何焦つてるんだろう？

食堂へ辿り着くと、光輝が居たので一緒に食べる事となつた。

「昨日はお前のせいで一日中、将棋の事が頭から離れなかつたぜ」

「俺は爆睡したけどな」

「勝者の睡眠か！」

「意味わかんねえよ」

そう、昨日俺と光輝は将棋をした。

かなり、互角ではあつたが最後の最後で俺が勝つたのだ。

やはり、あそこで飛車捨てが勝利の要因と言えるだろ？

「……将棋、好きだね」

桜花はまだ不機嫌なのか、単に話についてこれないからか、話のトーンが低い。

「ああ、大好きさー、やつぱり、運の要素がないのがいいね」
俺の言葉に光輝が「お、分かってるね！ まあ、たまには麻雀とか運要素があるのもいいけど、やつぱりボードゲームは将棋だな」と、相槌を打つてきた。

「だよねー」

俺も光輝の話に相槌を打つ。
もちろん、賛成の相槌をな。

「一時間目の授業を始める。だが、その前に自己紹介しておく」
そう言つと、先生は自分の名前を黒板に書き始めた。

「浜田だ。『浜田哲志』。担当は保健体育だ」

先生は国語総合担当の雅治先生と同じくらいの年齢に見える。が、「ちらは茶髪でネクタイもピシッとしていいない。

ぶつちやけ、サングラスでも掛けたら、めっちゃ怖そう。ヤクザや暴力団に間違われても仕方なさそうだ。

唯一、身長はそんなに高くない。雅治先生より高いくらいに見えるから百七十五前後だと思う。

「では、保健の教科書を開け

」

食堂で俺たち三人は昼食を食べている。

「牛丼は旨い！」

俺は牛丼を食べ、叫ぶ。

玉葱抜きのな。

当たり前だが、汁だくではない。汁だくは嫌いだ。玉葱も嫌いだ。

「いやいや、豚丼の方が旨いでしょ」

光輝が、朝とは違う反対と立場となつて反論してきた。

「牛が一番だろ！」

「豚こそ肉の頂点だ！」

俺と光輝は、牛と豚のどちらの肉がいいか激しい激論を繰り返す。

「よく考えてみろ！ どちらが高い？ 牛だろ！」

「高いからって美味しいとは限らないぜ！」

「それはひがみだ！」

「お前は常識に囚われている！ 高いから美味しいと言つ非科学的な根拠を並べているに過ぎない！」

「なんだよ！」

「なんだよ！」

俺は退かない。

だが、光輝も退かない。

熱い激論の隣では桜花が、親子丼を食べていた。

「なら、桜花に決めて貰つてのはどうだ？」

「望むところだ！」

急に矢面に立たされた桜花は困惑している。

「牛だろ？」

「豚だよね？」

「ええと……」

すでに朝のような不機嫌さはない。ただただ、困惑している。

そして、桜花が口を開く。

「牛も豚も……」

桜花が結論を出す。

「…………」

固唾を飲んで答えを待つ、俺と光輝。

「牛も豚も好きだけど、脂は嫌い……」

桜花の言葉に俺と光輝は「「そのとおり！」」と、相槌を打つて激しい肉の擦り合いは終結した。

昼食が終わり、五時間目が始まった。

「情報処理の授業を始める。机にノートパソコンを出しててくれ」
そう先生に言われ、俺は机の物入れに入っていたノートパソコンを机の上へと出す。

「出したら、立ち上げてくれ」

そう言われたので、素直に電源を入れる。

まさか、この学園でノートパソコンを持って席を立つ奴など居ないだろう。

「……」

……居た。

男子生徒が、ノートパソコンを持って席を立つた。クラスの注目が立ち上がった男子生徒に集まり出す。

「どうしました？」

先生が男子生徒に言葉をかける。

「あれ？ ……？」

男子生徒の頭にクエッショングマークが浮かんでいるが見えた。
「悠斗君。パソコンを立ち上げるとは、パソコンを持って立つことではなくて、パソコンの電源を入れることですよ」

先生の言葉に、立ち上がった男子生徒は恥ずかしそうに席に座った。周りから、クスクスと笑い声が聞こえる。
驚いたぜ。知らない奴が居るとはな。

「えーと、Hクセルを開いてくれ
エクセルを開く。

すると、そこに誰かのプロフィールが表示された。

「それは、先生のプロフィールだ」

画面に表示されたプロフィールの名前欄には“三浦敏彦”と書かれている。

身長は百七十八と書かれていて、血液型など基本的なプロフィールが書かれている。

画面ではなく見た目からわかるのは、雅治先生と同じ黒髪で、ネクタイをピシッとしている事。いつかはちゃんと髪があるけど。

「今日は、そのプロフィールを参考に自分のプロフィールを書いてくれ

プロフィールか。

俺は、項目は消さず、敏彦先生のデータをデータリートして、代わりに俺のデータを打ち込む。

「名前は、緑川恭介。身長は、百七十。体重は、六十。血液型は、A。誕生日は、二月七日。家族構成は

自分のプロフィールを打つだけの、授業とも言えない授業は数分で完成した。

「出来たら、印刷して持つてくれ。それで今回の授業は終わりだ

俺は、印刷ボタンを押してA4用紙に印刷された俺の簡易的なプロフィールを先生に届ける。他の生徒も次々と印刷した用紙を三浦先生に渡す。

「はい。みんな出したね。じゃ、今回の授業はここまで。残りの時間は自由に使ってくれて構わない」

と、許可が出たので、俺はいつもは携帯電話で作っているが、久しぶりにパソコンで自分のブログを開き、文字を打ち始める。

ブログと言つても、誰にも教えてないし、日記も書いてはいない。ただ単に、置き場として使つていて過ぎない。

文字列を打つては消して、打つては消してを繰り返している間に時間は刻々と進んでいった。

「時間だね。次回からはプログラムについて、勉強するからね」五時間目が終わる。

六時間目が始まった。

この授業が終われば、放課後だ。

「社会を教える“鈴木和大”だ。和大とは、親がみんなと仲良く、そして大きく育つようにつて、付けてくれたんだ」

和大先生は、年齢は敏彦先生や智夜と同じ一十五くらいに見える。哲志先生と同じく茶髪で、ネクタイもピシッとしてはいないが、哲志先生とは違い、怖くはない。

名の通り、仲良くなれそうな先生だ。そして、横にでかい。

別に、凄く太っている訳ではないが、他の先生がみんな瘦せていたので、余計に感じるのだろう。

「では、まずは教科書の六ページに載っている復習から始めるとするか」

俺は六ページを開く。

「では、読むから聞くよ」

」

授業が終わり、放課後となる。

俺の席に、桜花と光輝が来て、楽しく談笑してた。

「そう言えば、一人のメアド知らなかつたな。教えてくれよ」

俺は、二人のメールアドレスを知らない事に気付き、教えて貰うこととした。

「確かに教えてなかつたな。いいぜ」

「私ももちろんOKだよ」

光輝と桜花は、ポケットから携帯電話を取り出す。

俺もポケットから携帯電話を取り出して、赤外線で電話番号とメールアドレスを交換する。

「これで……いつでも恭ちゃんと一緒だね」

桜花が、笑顔で俺のメールアドレスを見つめている。

そんな変わったメールアドレスじゃないんだけどな……。最後の

数字は、好きな漫画キャラの誕生日だけだ。

「そう言えば、五時間目の十分休憩の時にクラスメイトが言つてたんだけど、明日喫茶店がオープンするらしいよ。明日、行ってみな

い？」

「いいね。桜花は？」

「恭ちゃんが行くなら、もちろん行くよ」「
桜花も行くつもりのようだ。

明日の予定は決まつたな。

その時、急に光輝が時計を見て慌て出した。

「あ、ゴメン！ 今日ちょっと用事あるから先に行くな

「ああ、じゃあ、夜に」

「おう！」

光輝が教室を出でていく。

「あ、私も先生に呼ばれていたんだ」

「どうして？」

「プリント、出すの忘れてちやつて。てへ」

「天然だな～」

「あはは。出してくるよ。じゃ、あた後でね」

桜花も教室を出でていく。

特に「コレ」といった理由はなかつた。

ただ、そう言えばまだ学園の屋上には行つてなかつたので行つて
みよう。そんな軽い気持ちだつた。

屋上の扉を開けた俺に映つたのは、一人の少女だつた。

「あつ……」

その少女は、昨日雅治先生に当てられて朗読をしていた同じクラスの
スの確かに、優希ちゃんだったと思つ。

長いロングの髪の片方に小さな一つの花飾りをしていてとても可
愛い。

そして、か弱そう。虫でさえ殺した事ありません的な無垢な少女
だつた。

「……」

「……」

だが、その少女の手に持つてゐる物は、そんな少女の見た目とは相容れぬ物だつた。

少女の手の中でもだ煙を出し続けているそれは、煙草に見えた。高校生での喫煙は犯罪だ。だが、高校生で喫煙している奴は意外と多い。

前にテレビを見た時に、ある高校ではクラスの半数が喫煙者だつたという二コースをやつていていた事を思い出した。

「い、言わないで下さいですっ」

煙草を吸つていた。

いや、実際に吸つていた所を見た訳ではないが、手に煙草があるのだから、吸つていたのだろう。

しかも、少女、優希ちゃんの反応を見ると、やっぱり吸つっていたみたいだ。

「一つ聞くけど……」

「は、はいっ」

「ソレ、煙草だよね？」

「一様確認する事にした。

もしかしたら、煙草に見えるだけで、本当は煙草風チヨコとか、そんな言葉を期待して……。

「え、あ、あう……」

だが、優希ちゃんは言葉に詰まる。やつぱり、煙草なんだ。

そう、俺は結論付ける。

「…………そつです。これは煙草です……」

本人の言葉により、それが煙草である事が証明された。

「お願いしますっ言わないで下さいですっ」

優希ちゃんは、縋るように俺に頭を下げる。

「…………」

俺は反応に困つた。

いやあ、マジで困った。
どうしたら良いんだ？

「顔上げて、優希ちゃん」

取り敢えず、顔を上げさせる。

俺は無意味にポケットを漁る。

すると、長方形の四角い物があることに気付いた。……煙草じゃ

ないからな。

それを取り出すとトランプだった。

「……？」

優希ちゃんが、不思議そうにこっちを見ている。

トランプの箱には、天使と銃を持った少女が描かれている。

そう、これは大人気アニメ、Angel Beats、のキャラクタートランプなのだ。

そう言えば、朝に桜花の奇襲があつて、焦つて置いてくるのを忘れていた。

何故かポケットにしまっていたみたい。別に普通の物なんだけどね。

「トランプしようぜ！」

俺はそう言いつと、箱からトランプを取り出し、シャッフルを始める。

「え……？」

優希ちゃんが、意味が分からないといった顔を窺わせる。

「ポーカー出来るか？」

俺は、優希ちゃんに聞く。

「はい……一様……」

それを聞いた俺は「もし、俺に勝つたら言わないであげるよ」そう、優希ちゃんに告げた。

「ほ、本当ですか？」

優希ちゃんが、疑うように、そして期待するように聞いてくる。

「男に一言はねえよ！ 北海道民は面積と同じで、心が広いのぞ」

「は、はいっ」

それを聞いた優希ちゃんが、笑顔で返事してくれる。

「いい？ 勝負は一回。交換は三回までだからね」

「はいっ」

俺は屋上に座り、優希ちゃんはしゃがんで、今ポーカーが始まる。俺は、優希ちゃんに五枚、自分に五枚、カードを配る。そして、残りのカードを真ん中に置く。

「どう、優希ちゃん。手はいい？」

俺は自分の手札を見ながら、優希に聞いた。

「ひ、秘密なのですっ」

当たり前だが、教えてはくれなかつた。

俺の手は、A、四、六、七、十。

初手はブタだ。決して良い手ではない。

「そうそう。俺は恭介。緑川恭介」

俺は、優希ちゃんにまだ名前を言つてい無い事に気が付き、名前を名乗つた。

「恭介さん、ですね……」

「さんは要らないよ。じゃあ、俺から交換な」

俺は三枚を捨て、三枚を引く。

一、三、六、七、となつた。

このままではノーペア。つまりブタだ。運の無い。

「ゆ、優希の番ですね……」

優希ちゃんは、俺と同じで三枚を捨て三枚を引いた。

三枚と言つ事は、ワンペアは完成してゐのか？

「ど、どうで、ですっ」

「あ、ああ……」

俺は、再び三枚を捨て、三枚を引く。

五、六、六、七、K。

漸くワンペアとなつた。少なくとも、ブタでは無くなつた。

「ゆ、優希ですね……」

優希ちゃんは、今度は一枚を捨て、一枚を引いた。と言つては、スリーカードが出来ているのか？

「最後だな。俺は三枚捨てるよ」

そして、三枚を引く。

「……」

「ゆ、優希は……一枚捨てます……」

そして、一枚引く優希ちゃん。

これで、後は手を相手に見せるだけで勝負が決まる。

言わば、手は攻撃力！ どちらの攻撃が、相手を喰らうか！

「……いきますっ」

優希ちゃんは手札をオープン。

Q Q Q 一 二。

スリーカードだ。

「……」

「……どう、ですか？」

優希ちゃんが、俺に聞いてくる。

俺は、自分の手札を開く。

六、六、六、K、K。

フルハウスだ。

「そ、そんな……」

俺の攻撃は、優希ちゃんを喰らつた。

「俺の勝ちだ」

俺はがっくりと頃垂れる優希ちゃんの目の前で、カードを集めてトランプを箱に仕舞う。

そして、ポケットに入れると立ち上がり、屋上の入り口へ歩き出す。

「い、言わないで……」

優希ちゃんが後ろから、俺に話しかけてくる。だが、その声は今までよりも遙かにか弱い。

「優希はまだ……」

「何のことだ?」

俺は立ち止まりついで言った。

「え?」

優希ちゃんがきょとんとしている。

「俺は何も知らないぞ。じゃ、また明日、教室でな」

そう言って、俺は再び歩き出す。

「あ……」

階段を降りる途中、俺の背中の方から「ありがとうございます」と二つ

声が聞こえた。

Chapter 3 夢願づ屋上（後書き）

僕の願いが叶いますように

夜空に輝く跡地に祈つた

誰かが諦めた夢に

手を伸ばした

Chapter 4 同士の相違（前書き）

桜が咲いて出会ったのは
確かに君だった
桜が咲いて訪れたのは
忘れない記憶

現在、六時間目の授業が始まろうとしている。

六時間目の科目は数学。担任の智夜先生の担当する科目だ。

「では授業を始める。本来なら復習から入るんだが、まあそんなものは飛ばしても問題ないな。では、十六ページの相対性理論から

」

チャイムがなり授業が終わる。

「おつと時間が。キリが良く終わったな。では、また明日な」
終わりの「HRが」の学園にはないので、担任の智夜先生はそれだけ言うと、教室を出でていく。

「おわったー」

それはつまり、今日の授業が全部終わって、放課後になつた事を意味する。

俺は腕を上の伸ばし、伸びをする。顔文字にするなり、／＼(^o

^)／＼オワタのポーズだな。

今日は昨日約束した通り、桜花と光輝と喫茶店に行く事となつている。

「恭ちゃん。疲れたねー」

桜花が俺の席へと来て、そう話し掛けてきたので「ああ、そうだな」と、軽く相槌を打つておく。

桜花とちょっと話していると、光輝も俺の席へとやつてきた。

「お、集まってるな。じゃあ、喫茶店に行こつか?」

光輝は行く気満々のようだ。自分から誘つておきながら、逆に不満だらだらなら困るけどね。

「ああ。桜花は準備いい?」

俺は光輝に返事をして、桜花に確認する。

「あ、ゴメン。ちょっと、お手洗い行ってからでいい?」
と、桜花が言つてきたので「じゃあ、玄関で待つてるよ」と、桜花に返事をする。

俺の言葉に「うん。わかった。ゴメンね。ちょっと、待つてね
そう言つて、桜花は教室を駆け足で出していく。

「光輝はトイレ大丈夫か?」

「大丈夫さ。ござとなつたら、お前の穿いているオムツを借りるか
ら平氣さ」

「どうか、なら平氣だな。

うん……平氣

「つて、穿いてねえよ!」

「思いつきり突っ込んだね。

もう少しで、頷く所だつたよ、まったく。

「わりいわりい」

光輝は笑いながら、手を合わせる。

「まったく、もう」

「でも、良かつたよ。否定しないから、マジッて引いてしまつてた

よ」

「そりやあ、気付かなかつたからだよ。

俺は確かに熟女派か、幼女派かと聞かれれば、迷わず幼女派と言
う自信がある。

だが、子供プレイは別に好きじゃねえよ!

口リつ娘が斬られたりする言わゆるグロは好きだがな。

だが、あくまでもそれは一次元の話。三次元の幼女に手は出さない
いぜ。口リコンは、タツチはしないのさ。

見つめるだけ。紳士なんだよ。

「まあ、いいか。早く行こうぜ」

「よくないからな」

俺は光輝に突っ込んで、そして席を立つて、光輝と玄関へ向かう。

「……」

その途中、廊下で俺は優希ちゃんと出くわした。

優希ちゃんとは同じクラスだが、優希ちゃんと話をしたのは、昨日の屋上の時だけだ。

俺は無視するのもおかしいと感じたので、話しかける事にした。

「よつ！ 優希ちゃん！」

俺は優希ちゃんに話しかけた。

「は、はいこんにちは、ですっ」

優希ちゃんは焦ったしゃべり方で返事をしてきた。
昨日と違い、特に疚しい事もないはずなのに、このしゃべり方なのは、単に人と話すのが苦手なのだろうか？

まあ、俺も苦手だけどね。画面の中の女の子とは、気兼ねなく話せるんだがな。

「何だ？ お前たち仲いいのか？」

光輝が、多少辛かつたように俺に聞いてくる。

会つて一日で告白するなんてしねえよ！ 元サッカー選手じゅあるまいし！ 靴下だつて履いてるし！

「そんなんじやねえよ！ ただ、昨日ちょっと話しただけだ。な？」

俺は優希ちゃんにそう問ひた。

すると、優希ちゃんはさつき以上に焦ったしゃべり方をする。

「は、はいっ昨日、ちよ、ちよっと話しただけなのですっ」

恐らく優希ちゃんは昨日の事を思いだし、焦つているのだろう。ひりだつて、悪い事をしたな。そう思つた俺は話を変える事にした。

た。

「優希ちゃんはこれからどうするの？」

まあ、この問への答えが「屋上」「なら意味ないだろ」。

でも、本当に「屋上」でもそつは言わないだろ。

「ゆ、優希ちゃんは特に用事はありませんですっ」

「なら、一緒に喫茶店行かないか？」

「

特に誘った理由はないが、せっかくまた話せたのだからまた話したいと思ったのは事実だ。

可愛いしね。いい娘そっだし。萌えるし。

「え？」

優希ちゃんは意味が分からないと、いつ顔をしている。

「俺たちこれから新しく出来た喫茶店に行くんだ。優希ちゃんも一緒にどう？」「

俺は、光輝と桜花の三人でこれから新しく出来た喫茶店に行く事を伝えた。

「……いいんですか？」

優希ちゃんが不安そうに、そう返してくれる。

「いいよな？」

俺は光輝にそう聞く。

「もちろん。ラブラブな一人を引き離すなんて俺にはできねえよ

「だから、そんなんじゃねえって！」

光輝はふざけた言い方をしたが、一緒に行く事を反対ではないようだ。

「つてことだ。な、一緒にに行こうぜ？」

「は、はいっお願ひします」

そう言って、優希ちゃんは頭を下げる。

「いやいや、顔上げてくれよ。あ、そういう。コイツは大野光輝な俺は光輝の名前を優希ちゃんに教える。

「光輝さん……ですね。優希の名前は優希です」

そう言って、またペコッと頭を下げる。

ヤベー、可愛い。抱き締めたい……。

おつと、あぶねえ。危うく、ロココンから、ペドフィリアになってしまふ所だったぜ。

まあ、優希ちゃんを口っこと見るかは、意見が分かれそうだが。高校生だしね。

「光輝でいいよ。優希ちゃん。これからよろしくね

「はいっ」

光輝と優希ちゃんの自己紹介が終わつたそのまま後、「恭ちゃん。ゴメンね。待つた?」と、言いながら駆け足でこちらに向かつてくる桜花が見えた。

「お、やつと来たな」

「ゴメンね恭ちゃん。……恭ちゃん、彼女は?」

桜花は優希ちゃんを見て、俺にそう聞いてきた。

そう言えば、当たり前だが桜花は優希ちゃんの事を知らないのか。でも、クラスメイトなんだが。

まあ、四十一人全員を覚えるのはまだ無理かな?

俺だつて、全員は把握してないしね。

「同じクラスの優希ちゃんだよ」

俺は桜花に優希ちゃんを紹介する。

「そうだつたの……。『めんなさい。知らなかつたわ

「い、いえつ当たり前ですっ」

桜花は知らなかつた事を詫びて、それを俺の時みたいに優希ちゃんがあたふたしながら話す。

「で、優希ちゃんも一緒に喫茶店に行く事になつたから

「よ、よろしくですっ」

優希ちゃんが桜花に頭を下げた。

「えつ……いや、頭上げて。ね? 一緒に行こ」

桜花は、一瞬暗い顔をしたが、優希ちゃんが頭を下げたため、桜花も慌ててしまつて、一緒に行こうと誘つている。

何故、暗い顔をしたのだろうか? 優希ちゃんを本当は誘いたくなかったのだろうか? 嫌いなのかな?

でも、優希ちゃんを知らなかつたのに嫌いも何もないはず。

「俺の気のせい?」

「何が?」

「え、いや、何でもない」

光輝の言葉に、俺は心の声を口に出ていた事に気付き慌てて繕

う。

「さ、喫茶店に案内してくれ」

「OKー。」

「おかれりなさいませ」主人様、お嬢様「

「……」

「……なあ、お前の言つてた喫茶店でこいだよな……？」

俺は戸惑いながら、光輝にそう問う。

「……ああ」

「もしかして、JUJUというのが趣味なのか？」

「ち、違う！ 勘違いするな！ 知らなかつたんだ！」

光輝が強く反対する。本当かなあ？

「あの……席へ……」

メイドさんが困っている。

「あ、お願ひします」

俺たちはメイドさんに案内され席に着く。

「まさか、メイド喫茶だつたなんて」

光輝が溜め息をついている。

どうやら、本当に知らなかつたようだ。

「メイド喫茶なんて……リアルで見たのは初めてです」

優希ちゃんは結構楽しんでいるようだ。

俺だつて、アニメとかでは結構見たりするが、リアルでは初めてだ。

メイド喫茶のメイドは、文字通りメイド服を来て、カチューシャをつけている……と言つのは思い込みで、実際は色々なコスプレをしている。

俺たちを案内してくれた人は、『涼宮ハルヒ』のコスプレをしていた。

店内もピンクを基調に可愛らしく装飾されていて、メイドさんの

歳も成人を迎えている奴はいなそうだし、メイドさんたちはみんな童顔で、お姉さん系が好きな人は嫌かも知れないが、口リ好きな俺としては「こ」はパラダイスだ！

「……」

「イタツ！」

「……」

桜花に足を踏まれた。目が笑つていない。
そんなに顔に出てたのだろうか？

「大丈夫だ、俺は二次元にしか興味はない」

「そ、それはそれで困るんだけど……」

桜花は本当に困つてている顔をしている。

「まあ、せつかくきたんだから何か頼もうぜ」

光輝がそう言つて、メニューを開く。確かに、せつかく来たのに何も頼まないなんて労働のムダ遣いだ。俺もメニューに目を落とす。

……。

「いもうとのあいじょうこねこねオニギリ」一千円。

「おいしくなれ」すぱいすいりオムライス、千五百円。

「ツンツンこうしんりょーカレーライス、千五百円。

「おにいちゃんはわたしだけのものチョコ、一百円。

……たけえ。

メイド喫茶つてリアルでも高いんだな……。

俺たちは目を合わせて「なあ、どれ頼むんだ？」俺の問いに答え

ない三人。

その時「こ」主人様、お嬢様メイドさんがやつてきた。

「なんすか？」つて言つても「メニューは決まりましたか」つて事

だろう。

残念だが、まだ決まってないんだよな。

だから、そう言おうとした時、メイドさんが喋つたのは想像して

いたのとは違う言葉だつた。

「呼ばれたい呼び方はありますか？」

へ？

呼ばれたい呼び方？

俺は基本名前で呼ばれるからなー。

あ、桜花には恭ちゃんって渾名で呼ばれてるけど。

「ど、どんな呼び方があるですか？」

俺が考へていると、代わりに光輝が返してくれた。

「そうですね～では、一つずつ言つていきますので、好きなのを決めてください」

そう言つと、メイドさんは呼び方を一つずつ言い始めた。

「じ主 人様」

まあ、さつきまでののだな。

これがスタンダード。

これがなければ、メイド喫茶は存在さえしなかつたのだろう。

だとしたら、考へた奴は神だな。もしくは紳士だな。変態という名のな。

「旦那様」

……ないな。

俺はまだ未成年だし。

「すいませんが、名前をつかがつても宜しいですか？」

そうメイドさんが聞いて来たので「恭介です」と、素直に名前を教えた。

「恭介くん」

……。

可愛い子から恭介くんなんて言われたよ！

はい、俺死んだ！ 萌え死んだよ！

「……」

「ツ！」

桜花にまた足を踏まれたよ！ 一度田は一度田よつイテヒんだよ！

だが、桜花にそんな事は言えなかつた。何故かは分からぬが、
桜花の事が怖い……。

「恭介ちゃん」

「ぐはつ！」

「……」

おつと危ない！

これ以上顔に出たら、また踏まれてしまつ……。
出しているつもりはないんだけどね。
分かりやすいのかな……。

「おにいちゃん」

「ぐふつ！」

「俺死んだ！」

ダメ、これは萌え死んだよ！

もう踏まれてもいい。ニヤケ顔が抑えられない！

「お兄様」

「……。」

ナムナム。

あー。俺は、天国へ旅だつた。いや、一次元へと旅だつたよ。

「と、各種取りそろえております」

メイド喫茶スゲエ！

この俺を、殺すとはな。恐ろしい。

「で、どう呼んだらよろしいですかあ？」

「おにいちゃんで」

即答だね！

絶対メイドさん、俺より歳上だと思つけど、もう関係ないね。

「はい、おにいちゃん」

ああ、もう極楽の極み。これ以上の幸せなんて果たしてあるのだ

るつか？

「ところで、おにいちゃん 食べるものは決まつたあ？」

「なんでもいいよ～めいのオススメを～」

「わかつたよ、おにいちゃん」

そう言つて、メイドさんは奥へと入つていいく。

「何デレデレしてゐるの？ てか、めいつて何？ 妹の名前？」

光輝に突つ込まれてしまつた。

「ふと、思いついた。メイドだからめいぢやん」「俺はキメ顔で光輝に返す。

いや、呆れないでよ！ 賢いつて讃めてよ！

「そんなに……おにいちゃんつて呼ばれたいの……」

桜花が質問してくる。

なんか、黒いオーラが見えるんですけど。

そんなに俺、デレデレしちゃダメっすか！

「……楽しいですね」

優希ちゃんは、俺たちを見てそう咳こいてくれた。

「なら、これかも仲良くしようぜ」

「え？」

「ね？」

「は、はいつよろしくお願ひします」

優希ちゃんは座つてゐるのに、頭を下げテーブルに頭をぶつけてしまつ。

「だ、大丈夫？」

「は、はいです……」

「おにいちゃんおまたせ、いもうとお手製ハンバーグ、だよ」「メイドさんはそう言つて、俺たち四人にそのいもうとお手製ハンバーグを置いていく。

まあ、どうせレンジでチン商品なんじょりがど。

「おにいちゃん五百円であ〜んしてあげるよ」「金取るんかーい！」

俺は何故か昔流行ったエセ貴族芸人のような語尾になっていた。

「所詮ビジネスですよ、おにこちゃん」

「ぶつちやけるね」

「これが真実ですよ～」

「それだけ言つと、メイドさんは他の席へと行つてしまつた。

「うん……」

味は普通だつた。

まあ、普通ここにくる人はメイドさん担当になんだらうけど。実際に周りはキモオタっぽい奴ばっかり。

『そんないゅあ、困っちゃうよお～』

「何だ？」

「テレビからみたいだな」

「テレビ？」

俺はテレビへと顔を向ける。確かに、その声はテレビからだつた。めつちや口り系の可愛い女の子がテレビに映つていた。見た限りではドラマのようだ。

「誰だ？ 知つてる？」

俺はみんなに聞く。

「CMとかで見たことがあるけど、それ以外は知らないね」「売れてないのかな？」

俺のこの言葉に対し罵声が飛んできた。

「ふざけるな！ ゆあゆあはめつちや大人気なんだよ！ 僕の大好きな子なんだよ！」

急に、隣にいた奴が突っかかってきた。

まあ、そのテレビに出てる子のファンなんだり。

「そつなんだ」

「そつなんだよ～ ゆあゆあはめつちや可愛いんだ～」

「アレ？ コイツ知つてるぞ？ 誰だっけ？」

黒髪で、身長は俺より下だから百六十五くらいな、弟子分みたい

な感じの奴。

……あ、昨日、パソコンを立ち上げた奴だ。

「お前、確かパソコン立て持ち上げた奴だろ

「なつ！ なんでそれを！」

「なんでつて、クラスメイトだからな」

俺の言葉に、桜花たちも思い出したようだ。

「う……とにかく、ゆあゆあは可愛いだろ？」

「まあ、そうだな」

俺の言葉に「だろ？ 一目見た瞬間からファンだよ」と、めっちゃ喜ぶ……確かに悠斗。

「でも、俺は二次元にしか興味はないから」

俺の言葉に「は？ 二次元？ ワロス w」と、バカにしてきた。

「アニメとかゲームつて現実にないんだよ？ まさか、それさえも分かってない？ それぐらい痛い子？ 乙！」

「ふ……アニメやゲームの素晴らしいしさが分からぬなんて悲しいね！」

「なら、どちらがいいか、勝負するか？」
「望む所だ！」

「金髪ツンデレお嬢様を召喚！」

「ふ、リバースカード！」

はい、俺ゾンビです。魔装少女やつてます……じゃなくて、今俺は店に置いてあつたカードゲームをやつてます。

使用料五百円です。

甘い内装とは裏腹に、現実は辛いです。

KONAMIの出しているカードゲームとは一切関係よ？ ブシ

ロードでもないからね！ 本当だよ！

「喰らえ！ バーストストリーム！…」

……本当に関係ないんだからねつ！

「ぐつああつ！」

「常闇の世界が見えるか？」

「厨」「病乙」

「あの……」

急に、優希ちゃんが間に入ってきた。

「なに？」優希ちゃん

もしかして間に入つて仲裁しようつと？

ふ……もはや、優希ちゃんの可愛さを持つてしても、一次元を愚弄した奴を殺す事でしか俺の拳は治まらないぜ！
「どつちが攻めで、どつちが受けですか？」

「えつ？」

飛び出した予想もしない言葉に、俺と悠斗……ああ、戦う前に確認したが、悠斗であつていた。

そう、一次元を愚弄した奴の名は“笠原悠斗”。

そいつと一緒に優希ちゃんの予想外の言葉に、あつけらかんとしました。

「え……優希ちゃん、何かおかしなことを言つてしまいましか？」

優希ちゃんの言葉に、俺は怒りの熱が冷めてしまった。

あ、今はどつちが攻撃しているかつて意味かな？

「……受けは奴だ」

「ええ！？」

悠斗が驚き、そしてあつけらかんとしている。

「……まあ、悪かった。一次元をバカにされてイラッとしてしまった」

「いや、俺も、人にはそれぞれ趣味があるもんな。同士どつしきれからは仲良くしようぜ」

「もちろん」

優希ちゃんのおかげで熱が冷めて、冷静な判断が出来よつになつたぜ。

確かに一次元はまだサブカルチャー、批判的なんだよな……

…。非常に残念ながら。

興味の無い人には理解出来ない領域。

向こうもそれを悟つたのだろう。

俺たちは握手する。

こうして、出会つた。

まあ、正確にはクラスメイトだからもっと前に出会つてはいるが

…。

悠斗と友達になる初めての日だつた。

因みに、後日友達になつた印に悠斗に某泣きゲーを貸してやつた
んだが、サッカー部に苛ついてディスクを割つてしまつたとか言わ
れた。

…まあ、友達関係が割れなかつたからヨシとするか。

それに、苛ついたと言つとは、感情移入したつて事だしね。
俺も、初めてやつた時は思わず叫んじやつたね。

「芽衣をいじめるなー」つてな。

Chapter 4 同士の相違（後書き）

君と出会つて

歯車が狂い出したなら

出会わなければ

よかつた

Chapter 5 声優を探して（前書き）

幾千の次第の中で

特別に選ばれた

だから幾億の夢を

諦めないといけない

土曜日。

昔なら午前だけだが、授業があつた曜日だが、今は休みである。今でもゲームの世界じゃ、授業があつたりするけど。

まあ、ここはゲームの世界じゃないから休み。

そう、俺は一次元と三次元を「こつちやになつてたりしない！」

だから、可愛いと思っても間違つても結婚したいとは思わない。

昔、秋葉原で一次元のキャラクターと結婚できるよう著名活動した奴がいると聞いたが、それは流石に引いてしまった。

うん、そういうのが、オタクの偏見に繋がっているのではないか？

俺はそう思う。全員が同じだとは限らないのだ。

俺のように一次元が好きな人も居れば、悠斗のように三次元……つまりアイドルが好きな人も居るようだ。

寧ろ、俺は働かないニートを差別するべきだと思うね。

……もしかして、オタクとニートは一緒だと思ってない？

それは間違いだ！ 四+四=ハジやなく、パーと答えるくらい間違いだ。

分かりやすく言えば、西から太陽が昇つて、東に沈むつて思つているくらい間違つてている。

……まあ、小学生の時、あの歌のせいで間違つて覚えてテストでミスつてしまつたが……。

まあ、それはともかく！ オタクとニートは違うのだ！

どう違うかって？ 知りたいか？ なら画期的には解決案を一つ伝授してやる。聞いて驚くなよ？

ググれ。

分かりやすい解決策だろう？

さて、話を戻すが今日は土曜日。つまり、休みである。

まあ、寮生活の為、学園に居る事に変わりはないが。

てな訳で、俺は寮の自分の部屋でゲームしてまーす。樂しょー！でも、今俺はシンテレに会っているんだ。べ、別に勘違いしないでよねっ！

の方ではなく、詰んだ出れないの方な。

鷹文がなかなか過去を話してくれないんだ。

名前を偽るのがダメなのかな。

アニメ化したら、声優は勿論、グリーンリバーライト……緑川光

！」

でも、つい選んじゃつって！

後、河南子は可愛い。

はるちゃんや佳奈多と同じ事はすぐ分かつたけど、鷹文と中の人気が同じって事はビックリしたぜ！

午前十一時。

正確には午後零時？

まあ、いいや。ゲームがシンテレしてしまった俺は、ひょいひょい

時つて事もあつて食堂に来ている。

「はい、しううが焼き定食お待たせー

「どうも」

俺は食堂のおばちゃんから皿飯を貰い、空いてる席へと着く。

「いただきまーす

どう？

偉いだろ？ ちやんと「いただきまーす」って言つたぞ？

……まあ、桜花たちが居ないから誰も返事をくれないけどな。

「あ……」

「あ……」

田が会つ。どうやら、悠斗も皿飯を食べに来たようだ。

「どうだ？ 良かつたら一緒に食べよ？」

俺は悠斗にそう提案する。

べ、別に恥ずかしくなんかないけど！

そ、そり！ 一人じゃ悠斗も恥ずかしいだろうからね！
ぱつちって思われたくないだろうし！

お、俺は恥ずかしくなんかないけどね！

勘違いするなよ！

「なら、お願ひされようかな

やつたー！

うん。今、悠斗は「やつたー！」と心で叫んでいたに違いない。

間違つても俺は叫んでなどいなーからな！

「恭介はしきりが焼き定食かー」

悠斗が、向かいの席に座りながらそつ聞いてくる。

「ああ、そういう悠斗はハンバーグ定食なんだね」

「僕の大好物なんだ」

そう、悠斗が満面の笑顔で言つてきたので「舌が子供だねー」つて、からかつてやつた。

「そんなことないよー！ そんなこと言つたら、浜田先生も子供舌になっちゃうよ？」

そう言つて、悠斗が指を指すので指された方を見ると、浜田先生がハンバーグ定食を食べていた。

「ケチャップ……口についてるね」

「そうだね……やっぱり子供舌なのかな……？」

「冗談で言つたつもりなんだが、本気にした？」

なら、じじでなんか気のきく一言をビシッと言つてやつれ。

「バカ舌よりはいいよ」

「……そうだね」

「アレ？ 反応薄！？」

めつちや、気のきいた一言じやね！？

……おかしいな……。

「そう言えば、恭介って部活入る？」

「なんだ突然？」

料理を食べ終えた頃、悠斗が突然部活に入るかつて聞いてくる。
「いやあ、入るのかなーって思つてさ」

部活か……。

確かに、入りたい奴は五月迄に書類を書かないといけないんだよな。だから、四月は体験つて事でどの部活も勧誘を行つている。
「別に入る気はねえなー。入っちゃうとゲームする時間とかも減るしねー」

まあ、これが本音。入る気など無い！ 断じて無い！
大切な事なので一回言いました。

「そうなんだ。まあ、僕も部活とか入つたら、ゆあゆあが主役のドラマ見れないから入らないけどね」

「ホント、ゆあゆあ好きだねー」

「うん！ ココに転校して来ないかなー」

悠斗、それは無理だろうよ。

小説や、アニメならフラグなんだろうが、現実では無理に等しいぜ。

人気アイドルがわざわざ北海道に転校して来る理由なんてないんだから。

「来たらいいね」

「うん！」

まあ、悠斗も来るはずないって本当は分かっているんだろうから、否定はしなかった。

「僕、アニメやゲームなどの一次元とか全然興味ないんだけど、面白いの？」

悠斗。それは、愚問だよ。

「ああ、素晴らしい世界だね！ もし猫型ロボットがいるのなら一
次元に連れていって欲しいね！」

「へえ……」

「まあ、興味がない人には下らない領域なんだろ? けどそれ……」

「そう……興味がない人には下らない領域なんだ。」

「なら、やつてみたら? 泣きゲーでも貸してあげるよ?」

「泣きゲー?」

悠斗とは泣きゲーを知らないのか?

ビックリだぜ!

顔が『（。○。）』みたいになつちまつたじやねえか。

「泣きゲーってのは、その名の通り泣けるゲームのことね」

「ゲームで泣くの? バカじやね?」

「昔の友達も同じこと言つたよ。でも、この泣きゲーは凄いぜ?
泣きゲーと言わせててもなかなか泣けない俺でも泣いたからな
俺は熱弁した。このゲームの素晴らしさを。」

「マジか」

「ああ、初めてやつた泣きゲーで、初めてやつたルートがそのルートなんだが、結婚式のシーンは自然と涙が出てた」

「そんなにスゲエの!」

悠斗が興味を持つてくれているようだ。嬉しい限りだぜ!

「後はやってみたものにしかわからないだろ? な」

「じゃあ、貸してくれ

「OK」

悠斗に泣きゲーを貸す約束をした。

泣いてくれたら嬉しいなー。

「あ! そう言えば知つてる?」

突然、悠斗が話を変えてきた。

知つてるとか言われても、内容を聞かされてないのに知つてると
知らないもあつたもんじやない。

「何が?」

「うちのクラスに声優が居るって話」

「……マジ?」

「マジ

なにいーーー!? 声優がうちのクラスに!?
そ、そんな!? 知らないぜ! そんな事! 誰だ? 誰なんだ
ーーー?!

「だ、誰が!?

俺は身を乗り出して、悠斗に問い合わせる。

「そ、そこまでは分からないよ。お、落ち着いて……
知らない間に、かなり早口になつていた。

俺は悠斗に謝り、席に座る。

「よし! 声優を見つけにいくーー?」

俺の言葉に「ええ! ? ビリやつて?」と返してくれる悠斗。

「まずは情報戦術だ。グローバル世界の今、情報はかなり有効な手段だ

俺はそう悠斗に言いつと、ケータイを取り出し、電話をかける。

プルルルル

『は、はいっ』

電話をかけた相手は優希ちゃんだ。

何故、優希ちゃんを選んだか?

それは消去法だ。桜花は何故か他の女の子の話になると機嫌を悪くするし、光輝は全くそういうのに興味なさそうだから。

優希ちゃんは、メイド喫茶を楽しんでるようだつたし多少は知つていそうという理由からだ。

「優希ちゃん。今、大丈夫?」

『はいっ大丈夫ですっ』

ケータイでも、そのしゃべり方なんだな。

そこまで、会話とか苦手なんだ……。

「ちょっと聞きたいんだけど、うちのクラスに声優が居るっていう話、聞いたことない?」

『せ、声優がうちのクラスにですか?』

「うん

『…………知りませんです…………』

「どうせや、優希ちゃんも知らないらしい。」

『…………すいませんです…………』

優希ちゃんが謝ってきたので「いいよ。」JリハJを悪かった。じやあ」と言って電話を切った。

「…………俺の情報戦術は失敗した」

「繫がり薄！」

悠斗がなにか言っているが無視！

「じゃ、次は刑事は足だ戦術だな」

「僕たちは刑事じゃないよ」

悠斗がなにか言っているが無視！

「聴き込みだ！」

「え～メンンドイよ」

悠斗がなにか言っているが無視！

「さあ行くぜ！」

俺は悠斗を連れて、声優探しの旅へと旅立った。

カラオケルームの前に俺と悠斗はやつてきた。

「声優は声が命！ そして声優と言えばキャラソン… 恐らく歌の練習をしているに違いない！」

うん、この推理力は小学生探偵をも越えたな。

「ホントかな……」

悠斗がなにかブツブツ呟いているが無視！

「まあ、見てろ！」

俺はカラオケルームの扉を開ける。

「…………」

そこには誰も居なくてただ、「LIVEDAM」のデモスクが充

電切れを起こしていた。

「くつ……」

「そんなバカな！　俺の推理のどこに穴が！
「誰も居ないけど……」

「あ……！」

「待て」

「何？」

「くくく……氣付いてしまった。そう、声優は隣の部屋だ！」

「それはどんな根拠で？」

俺はなにも分かつてない悠斗のため、俺の素晴らしい推理を披露してやる。

「忘れていたよ。声優の本業は演技のことだ。歌うことじゃない。つまり、アフレコ機能がある、CROSSO、に声優がいるー。」

「どうだ！　じっちゃんも完敗する程の推理は！」

「ホントかな……？」

「見てる」

俺は扉を勢いよく開ける。

「……」

「……」

そこには過剰ビブでカансストを出しているダニア声の生徒が居た。俺はそっと扉を閉める。

「あんな奴が声優な訳ないし……」

「一体何処！　何処で推理をミスってしまったのだろうかー？」

「まったく分からないよ。」

「もう、まったくわけの分からない推理は止めたからー？」

「悠斗がなにかふざけた事を言つているが無視！」

「もう、諦めたら？」

悠斗がなにかふざけた事を言つているが無視！

「そうだ！　職員室に乗り込み、個人情報を奪えば……」

「名案だ！　右京さんの新しい相棒になれるね！」

「それは犯罪だよー！」

「犯罪？ 犯罪だと詰つなら罪名を詰つてみれよ…」

「諸々だよ！ 退学になつてもいいの…？」

退学……それはマズイ。

どうやら、冷静さを失つていたようだ。

「までよ。よく考えたら、声優が男性か女性か知らないんだけど」「聞かれても知らないよ」

クソッ！

どうしたらいいんだ！ デジに声優が！？

「……あ！ [写真部]！」

「[写真部]？」

「そうだ。最近の声優は声だけじゃない。見た目も重要なんだ。だから[写真部]で安心の角度を探しているに違いない！」
「そうだ！ そうに決まつている！」

と、言つ詰で[写真部]にやつて來た……が。

「……廃部」

「……まあ、人気なさそだしね」

「まだだ！ きつと陸上部だ！ ライブとかのために体力を上げて
いるに違いない…！」

「……休みかよ…」

陸上部は本日休みと詰つ看板が掲げられている。

「もう、諦めた方がよくなき？ 無理だつて」

悠斗がなにかイミフな事を言つてているが無視！

「そうだ！ 美術部に違いない！ きつと画伯つて呼ばれないため
に頑張つているに違いない！」

「……存在しない？」

「それには僕もビックリだけどね」

「なんと、美術部は存在しなかった。」

後から聞いた話だけと、浜田先生が画伯と言われて怒つて廃部にしちゃつたらしい。

「猫のようにすばしつこく逃げやがつて」

「いや、元々来てないだけだって」

「悠斗がなにかほざいているけど無視！」

「んー。演劇部だ！ そこで演技力に高めているに違いない！」

「ホントかなあ……。僕にはなんだか、君が三十三分探偵な気がしてきましたよ」

「私には貴方しか居ないの！ お願ひ！ 行かないで！」

「演劇部では、少女が演技をしていた。」

「……」

「いやあ、香菜ちゃん凄いねー」

演劇部の部長らしき人が、同じ一年生らしき少女をベタ褒めしてゐる。

「ありがとうございます」

「……なあ、正解っぽくないか？」

「俺は小声で悠斗に呟く。」

「……いや、でも……そうと決まつたわけでは……」

「悠斗は驚きを隠せていない。ふふ、俺の推理力に驚いているんだろつ。」

身長は百六十くらいで、金髪をツーサイドアップにして、制服ではなく赤色を基調した服に着て、下は白いニーソだ。

「うん、可愛い。」

「まあ、見てる」

俺は悠斗の肩に手を置き、せつなくと前に出る。

「ねえ、香菜ちゃんで……いいのかな？」

俺は、さつき部長に香菜ちゃんと呼ばれていた少女に話しかける。

「……何？」

うん、冷たい態度だけど、訂正しないって事は合っているって事でいいよね。JK。

「俺は恭介。緑川恭介。あいつは同じAクラスの笠原悠斗」とりあえず名を名乗ってみた。

俺は好きなRPGシリーズの主人公の一人が「名前を聞くならまづ自分が名乗れ」的な事を言っていたので。

「……“竹達香菜”」

名前を教えてくれたー！

……ん？ 何か聞いた事ある名前のような……。

「……あー！」

「何よ、いきなり。五月蠅いわね」

「俺のやつてるHロゲーの、俺の妹がそんなに可愛いわけがない、のシンデレラのヒロインの声優でしょ！？」

タイトルは人気ラノベにパクリ文化の中国もビックリなほど似ているが、‘こんな’じゃなく‘そんな’だから大丈夫らしい。

「なあ！？ ちょっと来なさい！－！」

「イデテ……」

俺は香菜ちゃんに腕を捕まれ、拐われていくよー。

連れて来られたのは屋上だった。

「アンタ！ バカじやないの？ 人前でエロゲーとか言わないでくれる！？ 変な噂が立つたら困るじゃない！－！」

「はい……」

現在俺は、屋上で正座させられます。

決してMではないよ？ 寧ろうなんだよ？

だから、白い一ソを見て踏まれたいなんて思わないんだよ？
本當なんだからねつ！

「ちょっと聞いてるのー。」

「……はい」

「いい！ 一度と人前であたしが声優をやっているとか言わないで
よね！ 分かった！」

「……はい」

「フン……分かればいいのよ」

そう言つと、香菜ちゃんは階段の方へ向かつ。

だが、急に足を止めて「で、どうだつたの？」と、聞いてきた。

「何が？」

正座させられ恐縮している今の頭ではなんの事か分からぬ。

「だから……その……演技よ、演技！ エロゲーやつたんでしょ！？」

「あ、ああ。とつとも良かつたよ」

嘘なんかではない。心から出た本心だ。

「……そう

それだけ言つと、香菜ちゃんは階段を降りていつた。

俺の妄想かもしけないが、階段を降りて行く時の顔は微笑んでた
みうに見えた。

Chapter 5 声優を探して（後書き）

君の道は険しくて

その上 道は脆くて

簡単に崩れて

底へ落ちていく

Chapter 6 オタクと腐女子の本探し（前書き）

自分の世界

仲間が居ればいいけど

仲間が居なければ

他人には興味のない領域

口曜日。

昨日と同じく休みである。やはり、週一一日制はいいね。これに慣れたら、土曜日学校行ってたのが、馬鹿らしく感じるよ。頭は賢くなるけどね。

普普通。

自分のギャグに笑つてしまつたぜ！

え？ シマラナイだつて？

有り得ない……。

嘘……嘘だよね？ 嘘、嘘嘘嘘！

ねえ！？ ねえつてば！！

……何か、ヤンデレ見たいになつてしまつたぜ。

Nice boatを見てしまつたからだな。

まあ、グロ好きの俺にしてみれば、まだまだ物足りないね。やっぱ、内臓は見えないと、興奮しないぜ。

あ！ もちろん、一次元の話だぜ？ リアルにしたりなんかしねえよ？

感化とかされてないからな！

「恭介さん！ お願ひがあるのですっ！」

そう言つて、優希ちゃんがやつて來たのは、昼食の時だった。

「ふ？ もふしあ？」

何言つてるんだと思うかもしれないが、カーレライスを口に含みながら喋つたのだから仕方ない。無論、玉葱は抜いてなる。

「ん？ どうした？」と言つてしまつたのだが、結果的には「ふ？ もふしあ？」となつてしまつた。

優希ちゃんは頭の上にクエッシュョンマークが見えないから、意思

は通じたと思つ。

もちろん、実際に頭の上にクエッショングマークなんか浮かぶ訳ない。あんなのは、一次元だけの話だ。ただの比喩表現に過ぎない。「大切な本をなくしてしまいましたですっ」

「大切な本？」

「はいです。お願ひしますです。一緒に見付けて下さいですっ」

「優希ちゃんが自ら頼つてくれるとは……感激つ！」

「オク」

もちろん、即オクと頭が考えるより先に出たね。

「ありがとうですっ」

優希ちゃんがペ「リと頭を下げる。

ヤベニよー 麦酒が犯罪的美味さなら、優希ちゃんは犯罪的可愛さだよー！

「で、本って漫画？ ラノベ？」

本と言つても様々な種類がある。

ジャンプやサンデー等の月刊誌、単庫本。

ラノベと呼ばれるライトノベルや、人間失格、や、吾輩は猫である、等の有名小説。

「匣の中の失楽、等のミステリー小説も人気だな。

でも、優希ちゃんみたいな可愛い今時な女の子は、やつぱり、雑誌かな？ ファッション雑誌とか？

俺は雑誌とかは見ないから分からぬけど、一度だけ芸能人等のスキヤンダルなスクープを特集してる雑誌は見た事があるな。

「それは……」

優希ちゃんはなにか、言ひづらそうにしている。

言いくらい本なのか？

「日記とか……？」 日記つて本に含まれるのかな？

まあ、含まれるだろ？ けど、日記なら日記つて言つだらう？ 違うか？

確かに、日記は恥ずかしいな。

もし、誰かに見られたら……アレ？ 正解か？

「もしかして日記？」

「いえ、日記ではないです……」

不正解だった。

う～ん。じゃあ、何だろうか？

他に言いづらい本つてあるだろうか？

少女漫画？ でも、別に普通だし、恥ずかしい要因はないな。

……十八禁？ 男子なら別に普通だから考えもしなかつたけど、優希ちゃんのような性格なら、確かに言いづらいだろう。

「……十八禁？」

「違いますですっ！」

強い口調で否定された。

うん、強い口調で言われたのは、優希ちゃんが俺に心を許して証拠として受け止めよう。

ポジティブ！

「……ゴメン。分かんないや。何の本？」

もう、何の本か考えも考えも思い付かなかつたので、俺は言いづらそうにしているけど、優希ちゃんに聞く事にした。

だつて、聞かなきや、探しよつもないしね。

「それは……」

やつぱり、言いづらそうにしている。余程、知られたくない本なんだろうか？

逆に興味が湧いてきちゃう。人間ってやつぱり、他人の秘密とか知りたくなる人間だとしみじみ感じる。

俺は、今猛烈に知りたい衝動にかられている。優希ちゃんが秘密にしたい……まあ、頼つてくる時点で言いづらいけど、知られてはいけない本でもないんだろうけど。

「大丈夫。他言はしないよ」

と言いつつも、俺だけは聞くぞと言つ気持ちが込められているのは事実だ。

あー、俺、卑しいな。

「実は……」

優希ちゃんが重い口を開き、喉に突つ掛かってる言葉を吐き出す。

「……自作の……本……です……」

「へ……？」

自作……？

自分の作品……。

自分で作った品。

……。

あー、確かにそりゃあ、恥ずかしい。

万が一、見られたりしたら、一生立ち上がりがれない気がするぜ。不登校になつちまつよ。

だが

「自作出来るなんて凄いじゃないか！」

そう思つた。

俺も趣味で自作とかしてるけど、片方しか出来ないから、結局は真の意味で完成しないんだよね。

まあ、近い内に、挑戦するつもりだけじね。出来るかどうかは分からぬが、確実に諭吉は羽根生やして飛んでいっちまうがな。

「あの……探して……」

優希ちゃんが、俺の顔を覗き込んでくる。

そのおかげで、意識が自分の自作の事になつていていた事に気付いた。

「ゴメンゴメン」

俺は優希ちゃんに軽く謝り「じゃあ、探そつか？」と笑顔で、そう優希ちゃんに言った。

「ありがとうございます」

優希ちゃんも、そう返事して本探し……優希ちゃんの自作の本探し始めた。

あ、もちろん、カレーライスは全て食べたよ。

飽食の時代だからって、食べ物は粗末にしてないさ。

もし、テレビ番組なら、「このあと、スタッフが美味しい頂きました」といつ、テロップが流れるな。あれって、本当に食べているのだろうか。一度、調べてみたいものだ。

「で、優希ちゃん。本はどう辺に落としたの？」

食堂を出た俺は、隣に居る優希ちゃんに聞く。

本がどんな本か分かっても、この広い学園全部から探すのは流石に骨が折れるからな。

「それが分からぬのです。朝、食堂に朝食を食べに来たときは確かに持つていましたです」

「え？ 持ち歩いてるの？」

「はい。創造力、つまり妄想はいつ生まれるか分からぬのです。だから、すぐ描けるように持ち歩いているのです」

「なるほど……」

「でも、寮に帰ってきて、ないことに気が付いたんです。食堂に忘れたのかと来たのですが、あつたのは恭介さんでした」

今、俺、物扱いされなかつた？

うん、きっと、言葉のアヤだよね。

日本人には分からぬが、世界的に日本語は難しいみたいだから。俺にしたら、英語の方が難しいけどね。

なんで、日本語が世界の共通語にならなかつたかなー。そうすれば、英語の授業なんてなかつただろうに！

「で、迷つたんですが、恭介さんは信用できるので話しかけましたです」

「信用されてるんだ」

「はい。期待していますです」

優希ちゃんが俺の前に立つて笑顔を向けてくる。

ヤベエ！ 犯罪的可愛さだよ！

この笑顔だけで、ペリカでの生活を送れる自信があるね！

「任せとけ

俺は指をりにじて優希ちゃんに向ける。

「嬉しいです。恭介さんなら必ず見付けてくれると信じていますです」

優希ちゃんの期待が伝わってくる。

「今、廊下なう」

優希ちゃんがネット用語を使いながら、廊下を歩く。

俺なら見付けてくれると信じてくれるんだろう。

だから、内心は焦っているんだろうが、笑顔でいられるんだと思

う。

なら、期待に答えないとな。……つてか、優希ちゃんつてネット用語を知ってるんだな。まあ、インドア派っぽいしね。

優希ちゃんなら、二二二二二動画を見ていても全く違和感はないな。もちろん、まったくもって存在自体も知らないかもしれないけど。

「……」

俺は優希ちゃんが、どのくらいネット用語を知っているのか、力マをかけてみることにした。

特に深い意味はないが、まあ一種の暇潰しみたいなものだ。

「優希ちゃんつて、‘みづべ’とかよく見る？」

‘ようつべ’とは‘YoutTube’のローマ字読みだ。

アップルのスペルさえ分からなかつた時は、YoutTubeのスペルも書けなかつたが、ようつべとローマ字読みで読める事を教えてもらつて、YoutTubeのスペルを書けるようになつたものだ。

「優希はあまり見ないです」

「なんだ……」

通じている……と、捉えていいよな？

よし、次だ！

「優希ちゃんつて、アニメ見たりする？ 俺は結構好きで、原作を持つてる奴がアニメ化したときのwktkは凄いものだぜー！」

「優希も分かりますです。でも、同時に不安にもなりますです。原作のイメージを壊す、所謂、なかつたことによる黒歴史になる可能性もありますから」

分かる分かる。

好きな漫画やラノベが、駄作にされた時のガッカリ感は異常。特に最近は内容のない声優だけで持つてゐるアニメも多いしね。……アレ? 結構、優希ちゃんとはマニアックな話が出来るかも?

「優希ちゃんは、某スレとか見る?」

NHKの事だと思ってた、あの時の自分が懐かしい。

あの頃は健全だった。いろんな意味で。

なのに、今はネットと言ひ名の深い海に沈まってしまった。

「それも優希はんまり見ないです。でも、流れる口メと一緒に見る事はありますです」

あー、俺と同じ仲間だな。ニコニコ動画で、口メに笑いながら見るのが好きなんだよなあ。面白いのだけうつされていのから、一々探さなくてもいいしね。優希ちゃん、ニコニコ動画を見ていの事確定!

まあ、別に不思議な事でもないけど。

将棋界の羽生義治も見た事あるみたいだし、福山雅治に至つては、ニコニコ動画が出来た初期から見ていのらじこしね。しかも、プレミアム会員。

「へー、じゃあ、ボーカロイドとか結構聞くの?」

「聞きますです。アーティストの楽曲よりいに楽曲も一杯ありますです」

うんうん。

いい曲、一杯あるよなー。

「優希も作りたいとか思つたりしましたです

「マジで? 聞かせてよ」

優希ちゃんが作った楽曲。どんな楽曲なんだろ? めつけや、や聞きたい。

優希ちゃんのイメージだと、ロックや演歌でもないから、バラードとか……うーん。可愛いから、アイドルの歌とかが、似合います。まあ、歌うのはボーカロイドだけ。

「残念ですが、作ってはないのです」

「そうだよな。高いんだよなー、ボーカロイド。諭吉が羽根を生やして飛んでいく。

「俺が初めて聞いたボーカロイドは、悪ノ娘、だつたんだけど、優希ちゃんはなんだつたの？」

そう、あれは偶々だつた。

あの頃は規制も甘く、普通にアニメの本編が投稿されていた。俺は、それぐらいしか見てなかつたが、なんの気紛れか偶々、歌つてみたを聞いたんだよな。

それが、悪ノ娘、だつた。

あの時は、ボーカロイドなんて知らないから、その人が作つたと思つていたけど、その人の原曲様と言つリンクをクリックしたら、なんとリンちゃんが歌つてているじやあーりませんか。

まあ、あの時は鏡音リンなんて名前は知らなかつたけど。でも、やっぱり、ボーカロイドにはまるきつかけとなつた楽曲は、歌に形はないけれど、だな。

アレに会わなければ、俺は二コ二コ動画を今も見てはいなかつたかも知れない。……そう考へると、俺はバラードが好きなんだと気付かされるな。

ロックも好きだけね。カラオケじゃ、演歌だつて歌うし。

「優希が初めて聞いたボーカロイドの楽曲は、みつくみつくなしてあげる、です」

最初から知つてゐんだなー、優希ちゃんは。よく考えれば、yanよ、つて時系列的には、この楽曲の方が先に使わさつてゐるんだな。

「結婚してyanよ、つてこの楽曲から思い付いたのかな?……まあ、そんなわけねえか。

「恭介さん。本はどうなったんですか?」

「.....」

「.....」

「もしかして、忘れていたんじゃないですか?」

「.....」

「.....」

「もうなんですか! 優希はガッカリしましたです」

「違うんだ!」

「何が違うんですか?」

「正論だった。」

「「めんなさい.....」

「急いで探して下さいです! 誰かに見付かっちゃま.....!」

「また?」

「いえ、何でもないです」

「?」

「また.....なんだつたのだら?」

「で、この道以外は使つてないんだな」

「俺は目の前の廊下を指差し、優希ちゃんに問ひ。

「はいです。使つてませんです」

「でも、となると、全ての廊下を探したことになる。外も探したし
.....女子寮に落ちてたりはしない?」

「探してない場所。それはもう、女子寮しか残つていなかつた。

「それないとありますです。なくしたときに真っ先に探しました
です」

「だとしたら、もつ誰かに拾われたんじゃね?」

「そんな.....」

「薄々はそうかもと思つてはいだらうが、俺の言葉に優希ちゃん

が震え出す。

同情するよ。俺も優希ちゃんの立場なら、震えて歩けないかもしない。

「優希ちゃん」

俺が優希ちゃんに声をかけた瞬間だった。

田の前からよく知っている金髪の奴がやって來た。

「よー、一人で何してるんだ?」

光輝の言葉に、言葉に詰まる。

光輝なら話しても大丈夫だとは思うが、優希ちゃんに誰にも言わないと言つてあるので、俺は本の事は言わない事にした。

「光輝はどうして?」

だから、無難に質問に質問で返した。本当は良くないうじいナビ、光輝は気にする様子もなく、質問に答えてくれる。

「まあ……時間潰しかな。待つてるので、結構苦痛なんだ。歩いていれば、運動にもなるし、時間潰しにもある。まあ、一石二鳥」

「何待つてるの?」

まあ、Amazonからのゲームとか、漫画だらつ。

光輝が、ゲームや漫画に興味なるかは知らないけど。

「手紙」

意表を突いた言葉に一瞬、思考が止まる。

「そりや、また随分古風だね」

だつて、今ならメールと言つものがある。

だから、手紙と言つのは、ぶつちやけ、お正月くらいしか見ない。しかも、最近はメールで済ましちゃうから、年々減つてきてるし。なので、「手紙」と言つ返答な本当に予想外な返答だった。

「まあ、相手が機械音痴でな。携帯さえまともに使えないんだよ」

どんな年寄りだよー。いや、年寄りだつて使える時代だぞ、今は。

「手紙の方が相手の字が見れるしね。相手にも俺の字が伝わるから、俺は好きだけね」

「へー、そんな事、考えた事もなかつたぜ。」

「おつと、そろそろだな。じゃあな」

「そう言つて、光輝は去つていつた。

「……」

優希ちゃんは、俺が光輝と話しているつまこ、震えは少し収まつたようだ。

嫌な汗は滲んでいるのが見えるし、表情も暗いけど。

「大丈夫。この学園にいる奴は自作の本を見てもバカにしねえよ。きつと」「で

「そりでじょうか……」

「ああ

「……」

「とりあえず、もつ少し探して見ようよ。もしかしたら、誰かが落とし物として違う場所に移動させちゃったかもしれないし」

俺の言葉に優希ちゃんは、ただただ頷くのだった。

「……ないですか」

俺たちは、職員室、警備室に行き、落とし物がないかを聞いた。もちろん、落とし物はあった。が、優希ちゃんの本はなかつた。で、今は屋上に来ている。優希ちゃんが来たいって言つたからだ。優希ちゃんは、暮れ始めた景色を見ている。

言葉では言わないが、誰かが拾つた。もちろん、中を見たかは分からぬが、そう考へているんだろう。

俺も、さつき優希ちゃんに言つたが、同じ考へだ。こんなに、探してないならきっともう誰かの手に渡つている。

この学園の生徒が優希ちゃんの自作した本を見て、ビリビリ思つかは分からぬが、悪用はされないだろ。

「優希ちゃん

俺が、優希ちゃんの名前を呼ぼうとした時、屋上の扉が開いて、そこから悠斗が姿を現した事に気付く。

悠斗も俺たちに気付いたようで、俺たちの方へ向かつてくる。手

にはキャンバスが握られていた。

優希ちゃんも流石に、景色から悠斗の方へ視線を移す。

「何か描くのか？」

「うん。暮れ始めた空を描いひつと思つてね」

そう言つて、悠斗はキャンバスを一回置いて、脚立でいいのか……

……それは組み立て始める。

キャンバスの上には絵の具とパレット……そして本？

「悠斗、コレ何の本？」

「ああ、それね。廊下に落ちてたんだ。漫画みたいなんだけ……

え……漫画？ それって……。

「それ……優希の本ですっ！」

優希が本を拾い上げる。

「そりなの？ 手書きみたいだけ、君が描いたの？」

「……」

その言葉はつまり、中を、絵を、見たつて事で……。

「見たんですか……」

優希ちゃんが、やっと口にしたのはそんな言葉。

分かつていてるけど、信じたくない。

否定して欲しい本心から出た言葉。

だが

「うん、見たよ」

悠斗の口から出たのは、期待を真つ向から打ち砕く肯定の言葉。

「……」

そりや、俺だって見ちゃうだろつよ。

だから、悠斗を責めるわけにはいかない。

元々は落とした優希ちゃんが悪いんだから。

「絵、上手いね」

「……え？」

優希ちゃんが、悠斗の言葉にきょとんとしている。

何だ、上手いのか？ なら、そこまで嫌がる必要はないんじゃね？

まあ、死ぬ程恥ずかしいのは分かるけどな。

「……あの、……内容……」

優希ちゃんが、途切れ途切れに言葉を発する。

内容がどうかしたのか？

「……ゴメンね。僕には理解は出来なかつた」

「……」

難しい内容なのか？

「優希ちゃん？ 見てもいいかな？」

「え……あ……」

優希ちゃんは、俺の言葉に迷つてゐるみたいだつたが、最終的に本を見せてくれた。

「ありがと」

優希ちゃんに礼を言つて、本を開く。

タイトルは、甘い体温。

……うん。内容は性描写……そないけど、二人がイチャイチャしてゐた話だつた。

でもそれだけなら、普通に同人誌とかである本だ。ただ、そのイチャイチャしている二人が……そう、問題なんだ。

「……」

イチャイチャしている「一人は」一人とも……男性で。そう、優希ちゃんが描いた本は、ホモ漫画だつた。

「……可笑しいですか？」

優希ちゃんが聞いてきた。

だから、俺は返してやる。

俺の気持ちを。

「ぶつちやけ、俺にはよくわからない」

「……」

「でも、差別なんかはしねえよ」

「え……」

「だって、好きなものは個人の自由だからな。誰にも咎める権利な

誰にも咎める権利な

んてねえよ。好きなら好き。それで、いいじゃねえか

「恭介さん……」

「なあ？」

俺は悠斗に話を振る。

「うん。もちろん。僕だって、やあやあをバカにされたら嫌だし、
気持ちは分かるよ」

「悠斗さん……」

「好きなものを否定される気持ちは、俺だってよく分かるよ。オタ
クってだけで批判する人は沢山居るからな。冷たい視線を送つてき
たりな」

「恭介さん……！」

優希ちゃんの双眸から涙が溢れた。

「ちょ！ 止めてくれよー！」

「はい……ありがとうございます……」

優希ちゃんが頭をぺこっと下げる。

「普通のことを言つただけだって」

優希ちゃんは、手で涙を拭いて「……はいですっー」と、強く笑

顔で返事をした。

Chapter 6 オタクと腐女子の本探し（後書き）

馬鹿にされない為に
批判を受けない為に
差別が苦しい為に
自分の世界に殻をつくる

僕は止めてとこう

でもお前は止めない

この程度は 痛くも辛くも

ないだろうと笑いながら

どこか。

コンクリート剥き出しの部屋に三人の姿があつた。

二人は高校生くらいの男女で、もう一人は中学生くらいの少女だ。

「お、お願ひ！ 罰ならもう受けたでしょ！？」

高校生くらいの少女が、片手を手で抑えながら少年に懇願している。

少女は全身ボロボロで、綺麗な黒髪もボサボサで、服も所々破けている。そして、至る所から血が滲んでいる。

一方、少年の服装には乱れ一つない。髪も少女と同じ黒髪だが、こちらは綺麗に整えられている。

「バカが！ その程度で罪が償われたと思っているのか？ それはただの罰だ。そして、罪としてお前の妹は貰う」

少年は冷酷な声で、無慈悲に少女に言つ。

「そ、そんな……」「くくく、所詮世の中は金なんだよ。智力あつてもダメ。腕力があつてもダメ。最後に勝つのは金力だ」

「……」

「だつて、この通り僕は捕まらない。金さえ払えば国は政府は警察は動かないんだよ」

「……」

「だから、お前のやつてことは無駄無駄無駄ッ！」

「……ッ」

少年が少女に罵声を浴びせる。

「これに懲りて、一度と変な気は起こすな。お前の力など金の前にはネコにも劣る。血統書付きのネコは高いからねえ」

「分かりました！ 分かりましたから彩奈を連れて行かないで！」

少女が土下座して懇願する。

だが、少年は口を愉悦を感じたように歪ませるだけで聞く耳を持

たない。

「ダメだ。ほら行くぞ！」

少年は、彩奈の腕を掴んで無理矢理連れて行こうとする。

「いやあー、おねえちゃん！」「

中学生くらいの少女、彩奈はお姉ちゃんに助けを求めるよつと、ボロボロな少女へと叫ぶ。

「お願いします！　お願いしますっ！」

同じ高校生でも少女では少年に歯向かつていつたつて勝てる見込みなどない。ボロボロな少女もそれを分かつてているから、ひたすら少年に頭を下げる。十下座し続ける。

涙を溜めた瞳が許しを乞うが、無情にも少年の足は止まらず彩奈と共に消えていく。

静寂の中で、少女の泣き声がだけがコンクリートの部屋に反響した。

彩奈はお姉ちゃんと同じく黒髪だが、少女と違いショートカットでサイドテールだ。

身長は百四十くらいと小柄である。

彩奈を見たら、百人中百人が可愛いと答えるだらう。そのくらい可愛いのだ。

だが、そんな少女は今、赤色の首輪を付けられ、赤色の手枷と足枷を付けられ、どこかの部屋に拘束されている。

「くくつ彩奈ちゃん可愛いね」

少年が、彩奈の身体を玩ぶかの触りながら、そう囁く。

「た、助けて……」

彩奈は恐怖で声が震えている。

「怖がらなくていいよ。くくつ」

少年はそう言つと、ヒラヒラの付いた可愛い服を破き始めた。

「いやあー、やめてええええ！」

布を引き裂く音に続いて、彩奈の悲鳴と嗚咽が部屋に響き渡る。

「やめて……」

彩奈が瞳に涙を浮かばせてすがるが、服はゆっくりと確実に排除されていく。

拘束されている彩奈は、抵抗しようにも何も出来ない。

「大丈夫。君は僕の愛玩動物になるんだから。優しく可愛がってあげるよ」

少年はそう言うと、懐から小型のナイフを取り出して、勢いよく亜美の耳を切断した。

「ヒギイイイイイイ」

彩奈の声に鳴らない悲鳴が部屋中に響き渡る。

「大丈夫かい？ くくっ。ほらもう片方も行くよ」

少年は有言実行とばかりに彩奈のもつ片方の耳も勢いよく切断する。

「ヒギイアッアアッ」

彩奈の少女の声とは到底思えない声の絶叫が、部屋中に先程よりも響き渡っている。

「亜美ちゃん。どう？」

「うう……」

人間の耳があつた場所は、数日前に少年に平たく削ぎ落とされ何も無くなっていた。

元々、そんな所に耳なんてなかつたかのように、穴も綺麗に塞がれている。

その少し上には、頭髪の一部をそり落とし頭皮を焼かれ、そこに新しい耳が縫い付けられていた。

獣の、猫の、愛玩動物の耳が。

「ほり」

少年が彩奈を四つん這いにさせ、何かを促すように催促する。

「うう……なあ……にやああああ……うう……」

彩奈が涙声混じりに猫の泣き真似をする。

それを聞いて楽しそうに嘲笑う少年。

「はははっそう、お前は俺のペットだ。だから主人の命令は絶対だ。わかつたか？」

少年が彩奈の背中に座りながら言いつ。

「ほり、返事は？」

「ひっく……にやああああ……」

彩奈の鳴き声が部屋中に響く。

「うひぐ……おえつ……『ふつ……ごふううつ…』」

彩奈の口に大量の水が注がれる。しかも、水とともに長い鎖が亞美の喉に流し込まれていた。

飲み込む度に苦しみが増す彩奈を見て、笑みを絶やさない少年。彩奈には耐えられない苦痛が、いや、大人でも耐えられないであります苦痛を中学生の彩奈の体内を犯していく。

「漸く端か……頑張つたな。偉いぞ」

少年はそう言い、彩奈の頭を撫でる。

「うう……」

恐怖で固まってしまう彩奈。だが、それすらも越える苦痛が彩奈の身体を揺さぶる。

端は呑み込むことのできない程、大きなリングになつていて、少年は彩奈の口に嵌め込む。

それでも、なお呑み込もうとする整理機能が、彩奈自身を苦しめ続けるのだった。

やがて……。

「お、出できた出できた」

彩奈の肛門から鎖が出てきた。

少年がそれを引っ張ると彩奈は痙攣して白目になり、失神してし

まつ。

「ねつと、やり過ぎたな……。死んでしまつては困る。俺は嫌がる子に嫌がる事をさせるのが、楽しいのだから」

次の日の朝。

彩奈は激痛で目を覚ます。

口に嵌め込まれた鎖はなくなつていだが、それ以上の激痛が彩奈を襲つ。

「……ああ」

「お、起きたね。麻酔したんだけど、それでも痛むのかな？　だとしたら、日本の科学力もまだまだだね」

そう言いながら笑う少年の手には、包丁の姿があった。何かを切つている。

「……ああ」

やつ、彩奈の手足だ。すでに止血をしたのか、切られた断面から血はもう余り出てはいなかつた。

「今日はじつは優美として、豪勢な食事をあげるね。今まで食べたことないと思つよ」

そう言つて愉悦の笑みを浮かべる少年は、彩奈の中指を彩奈の口に近付ける。

「……！」

血の臭いが鼻につく。

「お残しは許さないからね。ちゃんと全部食べようね」

少年は彩奈の口の中へ中指を入れるが、彩奈はすぐに吐いてしまつた。

「くくく、全部食べ終わるまで終わんないからねー！」

再び口に中指を近づけるが、彩奈は口を開ざし開かない。

「開けないと食べれないよ～」

わざわざ少年が言つ。

「全く……面倒をかけさせるね」

そう呟つと、少年は彩奈にフェイスクスラッシュマスクを装着した。

フェイスクスラッシュマスクとは口を筒のよつなもので永久に開けられ、さらに蓋をする事もできる代物で、だから排水溝ならぬ排水口とも言われている。

「んんっ」

彩奈はもがくが、装着された排水口を取る手段など、手足のない彩奈にはありはしない。

「はい」

少年は、彩奈の口の中に中指を入れてあげる。
そして、蓋をする。これで、呑み込むまで中指は口の中から消えない。

「んっんんっ」

「よく噛んで食べてね。噛まないで食べるのほ身体に悪いからね。
くくっ」

口一杯に広がる血の味を身体は拒絶に吐き出そうとするが、それが出来ない。

呑み込む事もできず、肉片の冷たい感触から何度も嘔吐する。が、蓋をされている為、口から出でていかず、余計気持ち悪くなつてまた繰り返す。

そんな姿を冷酷な笑みで見続ける少年。

この食事は、彩奈が全て食べるまで続けられた。

この日、彩奈が目覚めるとそこはいつもの場所ではなかつた。

その部屋は生活感で溢れていて、もしかしたら夢だつたのかもつて思える程だつたが、切断された手足はそのままだつた。

「……」

「おはよう。彩奈ちゃん」

「……」「……

「もう、喋らなくていいんだ。動かなくてもいいんだよ。彩奈ちゃんはこれから僕の抱き枕だからね」

支度をしていた少年は、彩奈が目覚めた事に気付いて彩奈へそれだけ言つと、「また夜にね」と言つて、部屋を出ていつてしまう。彩奈の口は糸みたいなもので縫われていて、口を開けることが出来ない。

唯一良くなつたのは服を着ていた事。彩奈が自分で選んだ破られた服とは違うが、ピンク色の服でフサフサが付いて可愛いらしい服。だが、手足がない用に作られていて、しかもピッタリなので彩奈のためだけに作られた服だと分かる。

よく見ると、下半身の一部に穴が空いている。そして、その穴から猫耳だけではなく、猫の尻尾までも知らない間に付けられていた。

猫耳だけではなく、猫の尻尾までも知らない間に付けられていたのである。

「……」「……

逃げ出したくても、手足がないため動けず、助けを呼びたくても声が出せない。

もう、死んだ方がマシと舌を噛もうとするが、噛めなかつた。歯が全部抜かれていた。

「……」「……

彩奈は抵抗するのを止め、ただ時間が刻まれていく時計をただじっと眺めた。

一筋の光が瞳から流れた事も分からず。

漸く六時間目の授業も終わろうとしている。

今日は買い物があるから、早く授業が終わってほしい。

だが、そう思えば思うほど、時計の針は、ゆっくりとゆっくりと時を刻んでいく。いつもと変わらないはずなのに、とてもゆっくり

に感じる。人間の時間感覚はホント、テキトーだなーと思つ。
「では、最後に今日の復習を……そうだな、拓夢くんに答えてもら
うかな」

雅治先生がそう言つと、一人の生徒が席を立つ。
まあ、あいつが拓夢なのだろう。

身長は俺より低くて、悠斗よりは高く見えるので、百六十七くら
いだろう。

髪は黒色で、同じ黒色の眼鏡をしている。

でも、俺には関係ねえ！

……なんか、一発屋のギャグみたくなつてしまつた。だいじょぶ
だいじょぶう。

みんな、すぐに時が流れ忘れていく。もちろん、俺も。
席を立つた生徒、拓夢が朗読を始める。

早く終われー。

「なぜだろう？なぜ飛び降りたいのだろうか？だが、死にたく
なるほどの理由などストレス社会の現代では多様にある。そして

「

キンコーンカンコーン

やつた！

やつとチャイムがなつたよ！

「では、ここまでだな」

そう言つて、雅治は教室を出でていつた。

他の学校なら、掃除とかあるんだろうけど、葉鍵学園にはない。
天才の特権という奴かな？

まあ、そんな事はどうでもいい。

俺は買い物に行くのだ！

鞄に教科書を詰めていると、桜花と優希ちゃんがやつてきた。

「恭ちゃん。一緒に帰ろ?」

「あの……。よかつたら、一緒に帰りませんか?」

「一人で誘つて来るなんて、仲良くなつたのかな?」

それはいい事だ。いや、俺がやつぱ勘違いしてただけだな。

……可愛い一人からの誘いは非常に嬉しい。喜びすぎて鼻血が出

そうなくらいだ。

だが、残念だ……。

「悪い。今日は買いたい物があつて、書店に行くから一緒に帰れない」

非常に残念だ!

「そうなんだ……なら一緒に行く

「えつ?」

桜花が一緒に来ると行つたので驚いてしまつた。

「だ、ダメですか?」

優希ちゃんも!?

別に大歓迎だけど、わざわざどうして?

あ! そうか。たまたま書店に買いたい物があるんだな。

「分かつた。じゃあ、一緒に行くか

俺は鞄を持つて席を立つた。

書店へと俺たちはやつてきた。

学園から徒歩十五分くらいの所で、入る前に気付いたが前に光輝に誘われて入つた喫茶店……メイド喫茶の真向かいだつた。

「目的のものあればいいが……」

俺が周りを見渡す。

「あいつは……」

俺は目の前に拓夢がいることに気付いた。

「あ、今日朗読してた人ですね。何の本を見ているのでしょうか?」

優希ちゃんがそう疑問を呟く。

まあ、確かに同じクラスの奴が何を読んでいるか興味ないと言つたら嘘になるな。

「マンガコーナーみたいだね」

桜花が、上に吊り下げる看板を見てそう呟く。

「……ふふ」

「わ、笑つたです！ マンガ見て笑いましたです！ 怖いのです！」

た、確かに……。

俺も漫画見て、笑つちゃう事があつたりしちやつたりするが、実際笑つている人を見ると怖い。気を付けないと。

「……タイトルは、……、ハヤテのごとく！」と書いてあるわね」「その言葉を聞いて、俺は思い出した。

「あ！ そう言えば、新刊出たんだった。買わないと！ 今回の限定版はイラスト集だしね」

桜花が、なら「持つてきてあげる」と拓夢のもとへ行こうとする。その漫画を手に入れるために。

だが「待つて。今行つたら、バレる」と、俺は桜花を止める。

「バレたらダメなの？」

桜花がそう聞いてくるのはもつともなのど、俺は言つてやつた。

「何買うか興味ある。尾行しよう

俺の言葉に無言で頷く一人。

桜花は分からぬが、優希ちゃんは楽しんでる感じだ。

「テンションあがつてきたー！」

「大声出したら、バレるよ、恭ちゃん

俺たちは尾行を開始した。

「ここはラノベコーナーね。あそこは、電撃文庫ね」

桜花が看板を見て、そう報告する。

「あつた……」

「ターゲットが何か手に取つた。

あれは……。

「あれは、俺の妹がこんなに可愛いわけがない、だな
俺が自慢の視力で一人に報告。

まあ、分からぬだらうけどね。知らないだらうからね、タイト
ル言われても。

優希ちゃんなら、知つてゐるかもしれないけど。

「あ、列がずれたわ。そこは、ファンタジア文庫ね
桜花が再び、俺たちに報告する。

「くくつ……」

「また笑つたのですつ！」

優希ちゃんが怖がつてゐる。

まあ、本氣で怖がつてゐるわけではなぞそつなのでいいだらう。
寧ろ、かなり楽しんでゐる感じだしな。

「あれは、生徒会の一存、と、これはゾンビですか？」だな。くう
ー！ 奴とはい酒が飲めそうだ！」

「未成年でしょ」

桜花が突つ込みをくれたので返しておぐ。

「例え話だよ」

「あ、移動しますですつ」

「あ、あつた！ 口口氣に入つた！」

ターゲットが何か喜んでゐるように見えるが、理由は分からぬ。

「何があつたんでしょう？」ここは、スニークー文庫ですが

「ハルヒじやない？」

桜花の口からハルヒという言葉が出てきて驚いた。

「知つてゐるの？」

つい、聞いてしまつたね。

「え……べ、勉強したの……恭ちゃんを知るために」

俺を知るために？ 意味不明だが、一次元に興味を持つてくれる

事が嬉しくてしょうがないぜ！

悠斗に貸した泣きゲーで、悠斗も一次元に填まればいいな……。

「あ！ 何か手に取つたですっ」

優希ちゃんの言葉に、俺は拓夢の手元へと意識を集中させる。

「あれは、ムシウタ、！ やべえ、奴と踊りてえ！ ！」

「迷惑になるから、止めなよ、恭ちゃん」

桜花がまた突つ込みをくれたぜ。

「あ、移動しますです」

「ん？ ラノベコーナーを出でていったな。

「おお！ 見付けた。これで……ふふつ……はは……」
なつ！ あれはっ！

「ちよ！ 恭ちゃん！」

俺は無意識に駆け出しつたね。

だつて、仕方ないじやん！

奴の手に取つたブツは、俺の目的のブツはなのだから！

「それ、買うの？」

俺はターゲット、拓夢にそう聞いた。

「誰？」

まあ、当然の反応だろう。知らない奴からいきなり話しかけられたら、誰でもそんな態度になるだろうぜ。

だから俺は、眼鏡をかけてないのにロイドといふ名の大好きな有名RPGシリーズの主人公のように、まずは自分から名を名乗るぜ！

「俺は恭介。緑川恭介。お前と同じA組だよ」

どう？ 完璧な自己紹介じゃね？

「そうか。俺は“黒羽拓夢”だ。で、何のようだ？」

「それ、買うのかつて話。それは俺が狙つていたブツなんだ」

俺は譲つてくれと拓夢に頼む。

だが……！

「これは俺にとつても、最大の目的だ。最後の一個を渡すことなんてできないね」

くつ……！

た、確かに、俺でも渡さないだろ？

だが、そのブツが欲しい！

白い快樂みたいに、そのブツを俺は求めてるんだ！

「そいつを持つ権利が、お前にあるのか？」

お願いがダメならと、俺は挑発してみた。

「なん……だと……」

「そのブツも、より素晴らしい才能を持つている奴に使われたいと

思つてゐるはずさ。だから、勝負で買った方がそれを手に入れる。

それでどうだ！」

勝負を振つてみた。

「た、確かに……一理ある

「あるんだ……」

「あるんですかっ！」

後ろで二人がなにか言つていたが無視！

道理など関係ない！

倫理も論理も！

ただ、本能が欲する！

それをツ！

「で、勝負とは何をするんだ？」

拓夢が聞いてくる。

何にしようか？ うむ……困った。

行き当たりばつたりで行動してしまつたから、何も考えてねえ！

「やはり、そのブツを使うには創造力だと思う。だから、実践して人気の方の勝ちつてのはどうだ？」

我ながら素晴らしい名案だ！

はぐれ刑事の下でも殉職しない才能を感じるね！

「でも、根本のブツはコレ一つだけだぞ」

「あ……！」

「あの……いいですか？」

俺がロンドンの探偵クラスのミスをしてしまった時、優希ちゃんが話に入ってきた。

「なんだろうか？ まさか、また攻め受けの話じゃないよね？」

「どうしたの？ 優希ちゃん」

「それなら優希も持っているので、よかつたら貸しましょつか？」

「え……。

「マジで？」

「はいです」

「解決だー！」

「つてなわけでそれはやるよ」

「ああ、じゃ、ありがたく使わせてもらひうよ」

拓夢が安堵した顔を見せる。

それだけ、拓夢もそれに依存していたのだろう。

「ライバルになるわけだな。……だが、互いに頑張ろっぜー。」

「おう！」

俺たちは熱い握手を交わす。

「絶対完成させてやるよ」

「俺だつて」

俺たちは完成を誓つ。

「「鏡音を」「鏡音を」」

数日後。

俺は拓夢の部屋にお邪魔していた。

理由は、一人でボーカロイドを製作しているため。

あの握手はどうなつたーという突つ込みに答えると、俺は作詞が

趣味でよくケータイで作詞してたりするが、逆に作曲はまったくしていなくて、なんとかあるさと思つてた時期が俺にもありました。……が、出来なかつた。

逆に、拓夢は作曲は出来るけど作詞が出来なかつた。

なので俺たちは力を合わせて、漸く楽曲を完成させたのである。

「よくやくできたな」

拓夢が安堵の表情でいつ。

「そうだな。できればPVも付けたかつたが……」

「あれじやあね……」

そう、俺たちはPVも作ろうとした。

だが、絵に互いに覚えがないため光輝に頼んだ。すぐOKしてはくれたが、完成したのは画伯のようなある意味芸術的な絵だった。まあ、そんなのは使えないでの、代わりに悠斗に頼んだところ、貴方は神か的な絵を描いてくれた。

よくよく考えれば、優希ちゃんの自作の漫画を探している時に、屋上で悠斗は夕日をキャンバスに描こうとしていた。その後、俺はすぐ自室に戻つたから知らなかつたけど、上手かつたんだな。知つていればすぐ頼んだのに。

結局、時間が間に合わず一枚絵になつてしまつた。残念な事に時間は戻らないからね。

最初から頼んでおけば！

投稿日を伸ばせばいいんだが、今日を逃すとメンテナンスとかで一ヶ月投稿が出来なくなる。

「でも、悠斗だつけ？ ホント絵上手いね。アニメだつたら絶対、神作画のタグがつくよ」

そう俺に言う拓夢。俺もそう思つ。お世辞とかなしで。あれはもう趣味レベルじゃなく商売レベルに達してるね。

「そうだな。……人気出るかな？」

俺は少し不安だつた。

作詞なんて所詮自己満足だと思つていたので、誰にも見せた事が

なかつたから。

「大丈夫さ。最高の歌詞と、最高の曲なんだ。ミリオンも夢じゃない」

「そう言つて、不安など見せない拓夢。

「……そうだね」

「ああ、それに最初は話題になることが重要だからつてネタ曲にしたのも、間違つてなんかない。自分の頭脳と才能を信じよつぜ」

「……だな」

俺は拓夢の言葉に吹つ切れた。

そうだ、そうだよ。俺の歌詞は神歌詞だ。だから、大丈夫！

「じゃあ、投稿するよ」

拓夢がマウスを操作し、ポインターが投稿ボタンに乗つかる。

「……いくよ」

ポチッ

拓夢が左クリックする。

すると数秒読み込んだ後、画面には投稿を受け付けましたの文字が表示された。

「……俺たちならいけるよな」

拓夢が初めて「いけるな」ではなく「いけるよな」と言つて弱音を吐く。

やつぱり、拓夢も不安だつたのだろう。だから俺は言つてやつた。

「大丈夫だ、問題ない」

脱オタなんて m.j.s.k
ホントならマジDQN
わかつてるの?
三次元がいい香具師は
自重だよ自重!

私の心の隙間
真の寂しさは
誰にも埋められない
なんとゆう中二病
これってwww

ヤンデレがノートを拾つたら
名前を書きまくつて

新世界の神降臨かあーみいー

B.L（男と男） k t k r
リアルキタ（。。） ! !

届けよ 弹幕のA・R・A・S・I
作者男性だったのに
ビックリ（：）米の数々
過疎スレ知らず
だけど それもいつかは
オワタ＼（^○^）／

リア充なんか?

こんな楽しい世界

病んでない?

二次元へ逝くバスは

心の中に在る

オタクの批判の傷は
奥に突き刺さり
政府も規制するの?
過ぎ過ぎた差別化は
これって死亡フラグ

フルーツ（笑）の意味が分からない

2ちゃんでスマートで

電脳界の神（VIPPER）参上

中目黒 wktk

リアルキタ（。。）！！

行きたい 憧れのA・K・I・B・A
趣味で同人誌書いたらね

（。。）アヒヤー 金が儲かる

コスプレいいなあ

はげど 似合わなければ

m9（^ ^）ブギヤー

ニコニコは厨房だらけ

ワロスと米つて落ちる
電脳界の神なんです

腐女子で 廃人

sneeg（それなんてエロゲ?）

みんなの ネットのSE・KA・I

池沼が溢れまくったら

タミフル 大量出現

（（（（；。。））） ガクガクブルブル

なにが？ 今北産業

ググれ

大好き ネットのSU・KI・RU

趣味で RPG創つたら

十異世界 ゲーマー 回復体质

ボーアズラブ

なんで 受け入れられない

ggrks

あqwせdrftgyふじじp

scene2 出会い（前書き）

もしも あのとき

僕が居なければ

君が居なければ

歯車は違つ時を刻んでいたね

空から女の子が降つてきたりすと思つか？

そんな事は有り得ないと云うアニメやラノベの主人公を見たりしないだろ？

分かつてゐると思つが、それはフラグである。

絶対落ちてくる。

最近だと、そうだな……。

‘緋弾のアリア’、などがそうである。

内容はそうだな……。

‘灼眼のシャナ’、のシャナが刀の代わりに銃も持つた……。

全然違う？

なら、完璧な回答をしてやる。

ググれ。

だつて、俺はアニメを見て似てるつて思つたんだもん。

別にアニメやゲームとかは好きだが、その程度だ。

好きなキャラのスリーサイズとか聞かれて、答えるはずもない。

答えるのはオタクくらいだろうよ。

だから、ラノベとか見た事もない。

で、何故、そんな事を聞くかつて？

フラグだからだ。

だが、ここはアニメでもラノベの世界ではない。

勿論、ゲームの世界でもない。

正真正銘、現実の世界だ。

現実で空から女の子が落ちてくる。

それは死を意味する。

だが、安心してほしい。

今現在、少なくとも俺の目の届く所に死体などない。

自分をアニメの主人公かなんかと勘違いして、「俺、空飛べる」なんて言う痛い奴はない。

だけど、俺の目の前にフェンスを越え立っている女の子が見えた。

「……あ」

と、驚いたように小さく声をあげ、じつちを見た。

もし、飛び降りたなら死は確實だね。

アニメやゲームのよう、三階建ての屋上から飛び降りてきた女子を手で受け止めるなんて現実では不可能だから。

まあ、今日は部活もないし遅いから今、下に人が居る確率もかなり低いが。

何故、こんな状況になつたのか。

単純に言えば、先生から出された宿題をやつていなかつた。

なので、放課後に補習させられていた。

それだけの話。

で、疲れたので帰る前に屋上でちょっと休憩でもしようと思つた。

日も暮れ始めていたので、夕日を見ようと叫び、ちょっととした考えもあつたが、またまたま寄りついたと言つのが、一番適任だ。

そして、屋上の扉を開けると女の子がいた。

「……あ」

と、驚いたように小わけ顔をあげ、じつちを見た。

フェンスを越えた先で。

ちょっと悪ふつてフェンスを越えただけと言つ事ならそれでいい。

だが、もしも……飛び降りよひとしているなら。

有り得るのだ。

今、田の前に居る女の子なり。

女の子は雪がちらつく一月の北海道の寒さなんかさえも、感じてないよくな死んだ田をしていく。

「……フェンスを越えると何か違つ世界が見えるのか？」

俺は何故そんな質問をしたのだろう？

自分でも分からぬ。

ただ、自然と出た第一声だった。

「……樂園が見えるわ」

女の子が俺の質問に答えをくれた。

「樂園？ そりゃどんな世界なんだ？」

樂園……比喩表現だらうか？

「幸せな世界よ。痛みも苦しみもない。ただ、幸せな世界」

そう言つて、女の子は再び幸せな世界の方を向いてしまつた。

恐らくは、いやほぼ百%の確率で、幸せの世界が何所を指しているか見当はつく。

だけど、敢えて聞いてみた。

「そ、うか……。なら、お前の幸せな世界ってどんな世界なんだ？」

涼葉

女の子、涼葉が驚いたようにこちらを見る。

「…………どうして…………いえ、そうね。知ってるわよね…………」この生徒
なら…………

そう自分を納得させている涼葉。

まあ、強ち間違いでもないけどさ。

「確かにそうだね。でも俺はお前と同じクラス一年一組の生徒だからな。例えお前が知られてなくとも、名前くらいは知つてたさ」

俺はそう言い、涼葉の下へ足を踏み出す。

11

涼葉は黙つている。

涼葉。

“水橋涼葉”。

この学校の生徒なら知らない者は居ないだろう。

何故ならイジメられているから。

理由はオタクだから。

涼葉も、最初は隠していたみたいだ。

だから、一年生の時も一緒にクラスだけど、一年生の時はクラスメイトと仲良くしていったのを覚えている。

何故バレたのかは知らないけど、最初はオタクを批判され距離をとられるくらいだったらしい。

その後、クラスメイトによる一部の主に女子からのイジメが始まり、徐々にクラス全体に広まり、いつしか学校全体からイジメの対象となっていた。

学校側もイジメがある事は知っていたが、進学校であるため、名を汚れるのを嫌がったのか黙認している。

と、まあ友達から聞いた事だから多少の間違いや語弊はあるだろうが、大体はそんな感じだ。

「……」

「……」

フーンスを挟んで、俺と涼葉は向かい合って立てる。

「……止める気?」

涼葉が小さく呟く。

「止めなよ」

「……やつ」

涼葉がまた小さく呟く。

「……なんで?」

今度は小さい声で質問してきた。

意外だったのだろう。

いや、もしかしたら否定される事で、踏ん切りを着けるつもりなのだろうか。

俺は答える。

あつと、俺は考へは異質だ。

歪んでいるのかも知れない。

涼葉に踏ん切りを着けさせてしまうかもしれない。

でも、紡ぐこの言葉が俺の嘘偽りのない考えだから。

「幸せな世界に行くのは人生の選択肢の1つだ。だから、俺は止めない」

そう、選択肢。

人生は選択の連続。

ただ、大きいか小さいかの違いしかない。

進学するか就職するかも、朝食をご飯にするかパンにするかだつて同じ。

やはり、選択なのだ。

そして、その選択はその人自身が決めた道。

だから、誰にも止める権利ないと俺は思う。

「……そう。分かった」

涼葉は、決意したのか幸せな世界の方を再び見る。

でも分かる。

気持ちがまだ迷っている事が。

だからずっと、ただ幸せな世界を見ていたのだ。

でも、それを振り切るかのよつこ、足を踏み出す。

「だけど、考える。その選択肢は大きい。本当にその選択でいいのか？」

俺の言葉に、涼葉の浮いた足が再び屋上に留まる。

だが、こつちは見ない。

幸せな世界を見つめている。

「俺に止める権利はない。だって、この辛い世界に生きるのは義務じゃないから」

「……」

「でもやつぱり嫌なんだ！　もつ俺の田の前から誰かが居なくなるなんてツー！」

分かつてる。

わつわとは言つてゐる事と反対の事だつて。

相容れないって。

俺の我儘だつて。

でも！

やつぱり、この涼葉も俺の本当の気持ちなんだ！

自由、権利だつて分かってる。

止める権利などないと分かってる。

だけど！

「……」

涼葉が黙つている。

綺麗な黒髪を降り積もる雪が白く染める。

「言つてることがメチャクチャなのは分かってる……でも、行つて欲しくないんだ！！」

そして、俺はフェンスを登る。

「……」

フェンスを登る音に、流石に涼葉もこいつを見や。

だが、俺は涼葉の方へは行かず、フェンスの上で手を伸ばす。

「もし、辛い世界に歸るとこつのはじめの手を掴め！ 引き上げてやるー。」

「……」

涼葉がこいつを見上げるがその顔は無表情だ。

ポーカーとか絶対向いてるぜお前。

「不満か？ なら、辛い、中に一つだけでいいから楽しいことを
付ける！ もしくは認めさせろー！」

「……無理だよ……国が、世界が……~~固定する~~……」

涼葉は顔を竦める。

まあ、そりだらうな。

差別じゃなくとも、オタクをよく思つていらない奴は多いからな。

「確かに、難しいと思つ。だが、俺が手伝つてやるー。」

俺一人が抗つたって無理だつて分かる。

俺はいつも、長いものには巻かれて生きてきた。

でも誓う。

偽善ではない！

「……君が？」

涼葉が再びこいつを見てくれた。

「ああ、確かに無理かもしねない。でも、やつて見なくちゃ分から
ない！」

「……」

「やうすれば、ほら、一つ手に入れて、幸せ、の世界になった

「……ふつ面白いわねアンタ」

涼葉が笑う。

アレ？

笑わせるよつたな事、言つたかな？

まあ、いいや。

俺も、釣られて笑つてしまつたから。

「……誰かに頼るなんて、考えたこともなかつた……」

涼葉が何か呟いたように聞こえたが、俺には何を言つてゐるか分か
らなかつた。

「……俺を信じる。決して落とさない。だから、掴んだら離すなよ

俺の言葉の後、涼葉は暫く沈黙し、

「……」

そして、

「……約束、守りなさいよ」

手を伸ばしてきた。

だから俺は、

「もううん。こんな可愛い子を落とすなんてどうかしてるぜー。」

と言つて引っ張りあげた。

「やつぱり、放していいよ」

と涼葉は言つたが、放したりはしない。

顔は笑つていたから。

俺は狭間から、涼葉は幸せの世界の入り口から、辛い世界へと舞い戻つた。

「……で、何してくれるの？」

と言つので、

「……えあ？ ワカンね

て言つてやつた。

だつて、何も考えてなかつたもん！

「あ～あ、騙されたわ」

と言つて、再び笑う涼葉。

仕方ないじゃん！

あの時は必死だつたんだからさー

いいじゃん！

これから考えるから！

でも、この涼葉だけはすぐ浮かんできたんだ。

「……おかげり

俺は涼葉にそつと言つてやつた。

すると、涼葉は笑つて返してくれた。

「……ただいま」

scene2 出会い（後書き）

あつあといじのじの世界で

伸ばした手と手が

一つだつた影を

一つに繋げた

永遠にこの関係が

ずっと続いて行くと

そう 信じていた

なのに お前は簡単に裏切った

「え～一学期が始まります。え～これからもこままで以上に精進し
」

どうも、緑川恭介です。

今、俺がどんな状況か、きっと大体の人は分かっていると思うけど、
一様言つとくと、始業式と同じだよ。

はい、終わり。

……早い？

まあ、そりや 同じ体勢で一時間以上も立たされてたら早く次に行き
たいじやん。

分かってるさ。

そんな事考えたって、時間が早く進んだりなんかしないってさ。

時間は誰にでも同じ量を刻む事なんて。

「え～みなさんには三つの袋を大切にしてほしいと思ひます」

結婚式じゃねえんだからさ！

白髪のオヤジ……校長はボケているんじやね？

ついで、名前は忘れた。

確か、始業式の時に名乗つてた氣はするけどな。

覚える氣もねえから。

覚えるなんて、勉強と一次元だけで十分だぜー。

「 一つ目は……」

やつ言えば、なんだつけ？

二つの袋つてヤツ。

昔、テレビで言つてたのを聞いた氣がしなくもないが、意識してないものは人間、聞き流してるからなー。

全く覚えてないぜ！

威張る事でもないけど。

エチケット袋か？

まあ、考えればそんな氣もしてきたな。

じゃ、一つ目は何だ。

……ボチ袋？

……。

流石に「コレは違つか。

……お年玉袋?

な、訳ないか。

まあ、いいか。

どうせ、今から分かる事だしね。

あー、金欲しいなー。

降つてこないかなー。

「一〇〇万は……金用袋」

まさかの下ネタ!

校長下ネタかよー

「「「……」「」」

空気重いよー

場所考えろよ校長ー

「コレは偏差値七十七の天才校だぞ!

そんなの分かりきった事じゃねえか!

「え……金玉袋」

もつ一度言つた！

大事な事だから一回言つましたってか！

「 「 「 「 「

余計重くなつてゐよ！

最早、葬式レベルだよ……

「え……」 | つまは……

流した！

だが、それでいい。

わざと終わるのが一番の得策だらうか。

「金玉袋」

まさかのまた金玉袋！

まさかのまた金玉袋！

俺が一回言つちゃつたじゃねえかよ！

「 「 「 「 「

最早、空気が苦労してやつとラスボス倒したのに、フリーズした時の寂寥を感じさせるよー。

校長はもつと生徒に鎌を打つぜー。

「…………最後は…………」

あ、今回は繰り返さないんだ。

安堵…………。

「…………金玉袋…………最後は…………」

今、ボソッと金玉袋つて言つたよね？

いや、絶対言つた！

「最後は…………」

もう、金玉袋でもいいから早く終わらせりやー。

「…………鼻…………」

…………。

まさかのギャグ！

「…………」「…………」

もうダメだ！

やつとエロゲーでエッチシーンに行つたのに、狙いすましたかのよう母親が部屋に入つてきて逝つてしまつた時のことだ。

「フ・ク・ロ・ウ！」

なんか、校長が一文字ずつ主張始めた！

気付いてないつて思つていいのか？

気付いてないのは校長だろ……。

さみーんだよ。

つて事はあつたが、漸く教室に戻つてこれで席に着けたぜ！

スゲエ、極楽なんですけど！

「夏休みも終わり、今田から一学期だ。気を抜かないで頑張つてくれよな」

担任の智夜がガツツポーズをとる。

……何故だらう？

別に似てる訳ではないが、松岡修造を思い出した。

「あ、そうそう。一週間後に転校生がくるからな。そのつもつで

この学園に転校生が来るなんて凄いな……。

実はココへの転入は普通の入学より難しい。

毎年、高い倍率を誇り割れなど起こした事のない壁陽学園にとつて、新しい生徒は別に要らない。

自分で言つのもなんだが、だつてすでに優秀な人材が揃つてているのだから。

だから、転入はするには優秀な生徒以上と学園側に思わせなくてはならない。

なので必然と、難しくなつてしまふのだ。

拓夢の話だと、卒業する迄に一人でも転校生が来たら、一生の運を使つてしまふらしい。

……つて事は使つてしまつた。

「しかも一人だ」

なにい！

来世での運も使つちまつたぜ。

まあ、生まれ変わりなど信じてないけど。

サンタクロースや、神様なんてものは空想上の人物に過ぎない。

人間が創つたものに過ぎないのだ。

勿論、お化けや幽霊、UFOも信じていない。

あんなものは全て、科学で証明できるのだ。

非科学的なものなど認めないぜ。

魔女とかな。

……何か、社長を思い出したぜ。

久しぶりに、遊戯王でも見るかな。

「さりにヤロードもには朗報だ。一人とも可愛い女子だ」

なん……だと……！

可愛い……女子……。

か・わ・い・い・じ・ょ・し・！

テンションあがつてきたー！

絵文字で表すなら、テンションあがつてキタ（。 。 ）ー！

「ま、つてことだから（ 21 ）でも手はだすなよ」

そう言つて、智夜先生は教室を出ていった。

今日は授業がないので、まだ午前中だけ放課後だぜー。

「拓夢、いつまでやる？」

「恭ちゃん。どうか行かない？」

桜花が俺のもとにせつてきて誘ってくれた。

「ここよ。どう行く？」

俺は特に用事もないのに、桜花の誘いを受ける事とした。

「あ、恭ちゃんが行きたい所ならどこでもいいよ。

桜花がそう言つて來た。

「いつもそうだ。

桜花はいつも誘つてくれるけど、行きたい場所はどこでもここつて
言つんだよな。

本当に行きたい場所に行けなくて、楽しくないのかな？

それとも、本当にどこでもいいのかな？

「恭介、聞いてくれよー。」

拓夢が駆け足でやってきた。

なんか、焦っている。

何か、あつたのだろうか？

「どうした？」

「前に二つ動に投稿した曲あるだろ？」

ああ、あのネタ曲か。

タイトルは、オタク パラダイス、だつたな。

我ながら、素晴らしいネーミングだ。

そつ言えば、何か見れなかつたんだよな。

恥ずかしいつてか、怖いつていうか、そんな言い表せない気持ちになつて、気が付いたら一回も見ていなかつた。

「ああ、それがどうした」

「聞いて驚くなよ……」

何だ？

まさか、荒らしが沢山いるとかか？

それは嫌だな……。

「ひ、ひや、ひやく……」

ひやく……？

百再生突破した？

数ヶ月で百再生は流石に少ない気もしなくもないけど、最初はこんなモンなのかな。

「百萬再生突破した！」

「く……」

ひやくまん？

……ひやく……まん。

百万再生つ！

「ま、マジで！？ ドッキリ！ 隠しカメラは？」

「落ち着けつて。ドッキリじゃねえよ」

そ、そ、うだよな……。

芸人じやねえんだから。

ロンドンブーツとかに嵌められたりする訳ないじゃないか。

「……ガチ？」

「ガチ」

「こつやつ姉ーー。」

テンションあがつてキタ（。 。 ）ーー！

無意識に立ち上がり両手を上に突き上げてしまつたぜ。

「え……なんか分からんけど、おめでとう」

桜花は意味が分からないよつて感じだつたけど、一様俺が喜んでるからおめでとうと拍手してくれた。

「やつたな……拓夢」

「ああー……でも、早速だけど一作田を作りやー。」

「もつるんー……こますべ行」ハーハー。

「恭ひやん……私と遊ぶつて……」

あ……。

盛つ上がり過ぎて、忘れてしまつていた。

「やつだつた……。じゃあ、明日みんなでカラオケでも行いやが
？」

俺は桜花にそつ提案する。

「カラオケ?」

「ああ。今日は部活で光輝も優希ひやんも香菜ひやんも部活だしね」

そつ。

光輝はサッカー部に入ったし、香菜ちゃんはやっぱり演劇部に入ったし、優希ちゃんはゲーム部なんてそんなのあったの的な部活に入つちやつたからね。

でも、明日は土曜日だから部活も休みなのだ。

「……うん。じゃあ、明日楽しみにしてるね」

桜花はそつと切ると、教室を出ていった。

「じゅあ、寮に行くか

拓夢がそつと切ったが、俺は拒否する。

「こや、まづ明田カラオケに行くへ事をおれないつりと伝えておこう」と思つ

「メールでいいんじゃね?」

拓夢がそつ提案してきた。

まあ、そつなのだが、残念な事に俺の情報網は少ないので。

「やうしたいのは山々なんだが、実は香菜ちゃんのメアドは知らない

いんだよね

「あ……確かに俺も知らないな。なら、先に寮に行つてくるから会つてついでにメアドも交換してけよ」

「……してくれたらね。なんか、あんまりよく思われてない気がする」

「最初がいきなりエロゲーの声優でしょって言つたんだってね」

「忘れない記憶を掘り下げてきやがつて……」

「やめてくれよ。俺の黒歴史の話は」

「ふ……じゃ、お先に」

そう言ひて、拓夢も教室を出でていったので、俺も鞄を持って教室を出た。

「送信……と」

俺は明日カラオケに行こうと友達にメールを送る。

「あとは……」

田の前の部屋の扉のプレートには演劇部の文字が書いてある。

……前来た時と何も変わらない。

だが、今回はミスはしない。

好感度ヒヤだぜ！

「失礼しまーす」

俺はスライドドアの扉を開けた。

「……夢の中、君には届かない。その外で手を繋いで……」

中に入ると、香菜ちゃんしか居なかつた。

他の部員はどうしたんだろうか？

「香菜ちゃん一人なの？」

まあ、どうしたのかは香菜ちゃんに聞けば分かる事なので、聞いて見る事にした。

「……」

あれ？

明らかに機嫌悪い？

「……どうしてアンタがここにいるのよ。鍵かけたはずなんだけど」

「いや、開いてたから」

「え……」

鍵かけるの忘れたようだな。

でも、そのお陰で入れたからよしとするか。

「……今日は休みなの。だから、誰もいないわ

だから、誰も居なかつたのか。

納得。

「一人で練習とか偉いね」

「オーディションの練習よ」

「へー、何のアニメ?」

「……違つ。ゲーム」

「そつか。何のゲーム?」

「……アレよ」

「アレ?」

「……エロゲー」

あー、やつ言えば番菜ちゃんはエロゲーに狂ひたんだよな。

あの屋上での出来事のせいで封印してたぜ。

「せつか、邪魔して悪かつたな」

あつと、不機嫌なのもとのせいだね!。

だから、謝る事にした。

「別に……いいわよ。で、何かよひ?。」

香菜ちゃんがジト目で聞いてくる。

なので、俺も本来の目的を果たすとこみ。

「うひと歸郷をおかず」と

「死ね」

香菜ちゃんのローキックがモロに腹にキタ（。。。）――

いや、縦文字で「おかしてこるが、本当に痛いぜ。」

「あつがとひやるこますー。」

「なんでアタシ、お礼言われてるの?。」

「ローキックくれて」

「……」

香菜ちゃんが変質者見る目で見てくのと、慌てて「冗談だと」と言ふ。

「じょ、「冗談だつて」

「分からないわ。」のロリコン野郎！」

ちょー？

ロリコンじやねえよ！

そりや、美人よりはかわいい系。

熟女よりはロリの方がいいけど！

「安心しろ。俺のストライクは十一歳から十六歳の間だ

「十分ロリコンじやん」

「いや、待て。よく考えろ

俺は片手を香菜ちゃんの方に付きだし、待てのポーズ。

「俺はまだ高校一年生だ」

「だから？」

「全然健全！」

グハッ！

今度はパンチが腹に飛んできたよ！

俺は云じやないから喜ばないってー！

「で、マジの話かると畠口カラオケ行こうぜや」

「…………何するのさー？」

「何で騒うんだよー！」

「普通に歌うだけだつてー。みんなにはメール出したんだけど、香菜ちゃんのは知らなくてさ」

「それでわざわざへー」

「おかしい？」

「うんー。だつてもうすく飯食よ？ その時でもここでは？」

「あ…………」

「忘れてた…………。

もうすぐ飯食だった。

つまり、食堂でわざわざ来なくても食えたんだ。

「でも…………ありがと」

「え…………」

「あつがとつて言つたのー、何回も言わせないでよなつー。」

「え、あ、はい」

「……出しなれこよっ。」

「何を?」

「携帯よー。番号送るから」

「あ、うんー。」

俺は携帯をポケットから出して、香菜ちゃんと赤外線通信でデータを共有する。

「ぐへへ」

「なんか、いきなり交換したこと後悔したわ」

そう言つて、香菜ちゃんは溜息を吐いた。

「サンキュー」

「別に。……変なメール送つたら、サッとはじめ出してやるんだからねつー。」

「はい」

香菜ちゃんと別れ、現在廊下である。

だが、寮に向かつてゐる訳ではない。

屋上にだ。

実は、送つた相手からOKのメールが来たが、優希ちゃんからだけ返信が来ない。

電話も考えたが、何か用事で返せないのなら迷惑になるので、でももしかしたらまた屋上に居るかもしれないから、なうじょっと屋上に居ないかよつて行こうと思つたからである。

え？

部活に居るんじゃないかつて？

実は香菜ちゃんから聞いたんだが、スポーツ系以外の部活は今日な
いらしい。

だから、ゲーム部も当然ない。

「……」

メールの受信一覧を開く。

十一時三十三分、『りょーかい』の文字の光輝。

部活だらうに一番とは恐れ入つたぜ！

十一時三十七分、『悠斗、行きます！』の文字の悠斗。

お前はガンダムかつて言いたくなつたぜー。

だが、それより先に新しい受信メールはない。

つまり、優希ちゃんからはまだ着ていないので。

なので、屋上に着いた俺だつたが……。

結論から言えれば、優希ちゃんは居た。

だが、返信出来ない理由も分かつた。

なんとい、優希ちゃんは寝ていたから。

「ん……」

優希ちゃんが畳を擦る。

「あ、起こしちゃつた?」

「アレ? 恭介さん? どうしたんですか?」

優希ちゃんは立ち上がり、手でパツパツと制服に付いた埃を取る。

「いや、メールしたんだけど返信がないからさ。もしかしたら、屋上に居るかもって思つて来てみたんだ」

「やうだつたんですか。すいません。優希、寝てましたです

「別にいいよ。それより明日、カラオケに行かない？」

優希ちゃんが申し訳なさそうに謝るので俺は別に言いつと一言付けて、優希ちゃんをカラオケに誘つ。

「カラオケですか？ 楽しそうですね。是非、お願ひしますです」

そう言って、優希ちゃんはペロリと頭を下げる。

……屋上、好きなの？」

好きですか？嫌いな場所ですか？

h
?

好きなのに嫌い？

意味わからんぞ

「意味わからなくてすみません」

優希ちゃんが俺の心を察したのよ、そん時てきた

「まあ、ぶつちやけわかんね」

…………優希にはお姉ちゃんがいたのです」「…………ほほえ、そうですよね。

「へー。俺には兄も姉も居なかつたからわからぬいけど、やつぱり上が居るつていいものなんでしょ？」

「はい……です。でも、ひょっと前からお姉ちゃんがこきなり話す
感じが……」

優希ちゃんが少し俯いて話を続ける。

「優希は何かお姉ちゃんの気に障る事でもしたのでしょうか。
だから話したいのです……。でも、勇気が出なくて……」

優希ちゃんが少し俯いて話してくれた。

「やうか……。もし、俺に出来ることが何でも叶つてくれよ。
俺のできる」となんてたかが知れていぬせいで、出来の限りのことを叶つてやるか」

「あつがとつ……です……」

優希ちゃんは自分の事を話してくれた。

また、一つ優希ちゃんと仲良くなれた気がした。

だからこそ、優希ちゃんの力になつてあげたい。

そんな気が……いや、そんな気持ちが確かにした。

声に出せたなら

何か変わるのかな？

だけど 言えないよ

だって僕は孤独だから

Chapter 2 カラオケパッケ（前書き）

一度触れたなら

簡単に触れられる

だけど その最初が

触れられない

Chapter 2 カラオケパーツク

土曜日。

勿論、授業はない。

ゆとり教育万歳ヽ(^^)ヽ

つてな訳で昨日約束した通り、俺たちはカラオケに行く事になつて
いる。

学園に近いカラオケ店まねきねこで九時から十八時までの間、歌い
まぐるつもりだ。

まあ、人数が多いから思つた程歌えないとは思つが。

因みに、この学園にもカラオケルームが存在し生徒なら無料で使用
できるが、二部屋しかなく休日は俺たちのように歌いたい生徒が出
てくる為、使う場合には申請が必要なのだ。

で、今回は残念ながら先に申請した生徒が居た為、使用は出来ない。

やはり、無料はでかいよな……。

コンコン

「恭ちゃん。起きてる?」

扉の向こうから桜花の声がする。

迎えに来てくれたのか、それは嬉しい限りだ。

「ああ、起きてるよ」

俺は桜花に返事をする。

ずっと、扉の前で立たせる訳にも行かないからな。

曲がりなりにもこには男子寮なのだから。

……まあ、桜花が迎えに来てくれるのが口課となつた今では、管理人にも許可を貰い、他の男子生徒も羨ましいとか言って来るが、いつの間にか公認になつていたしな。

そのせいで、付き合つてるなんて噂も流れるし。

ただの幼馴染みなだけなのに。

桜花も、根も葉もない噂で俺なんかと付き合つてるなんて思われたくないだろうしな。

「入つてもいい?」

だからこの言葉の答えは勿論、

「いいよ」

である。

「失礼しまーす」

桜花が扉を開けて、俺の部屋に入つてくれる。

まあ、来年には違う人の部屋になつてるけどね。

当たり前だが今日は授業はないので桜花は私服だ。

勿論、俺も私服だ。

俺は黒を基調とした髑髏の絵の服だ。

我ながら氣に入つてゐる。

自分で言つのもなんだが、俺はセンスがいい。

一家に俺一人の時代がくるね。

「おはよー、恭ちゃん」

満面のスマイルで挨拶をしてくれる桜花に、

「ああ、おはよー」

と返す。

「恭ちゃん、朝ごはん食べに行こ?」

桜花がいつもと変わらない言葉を紡ぐ。

だから、俺の返事もいつもと変わらない。

「おく」

現在七時一十三分。

休日の為、平日に比べると生徒は疎らでいつもなら満席なのに、今日は半数以上の席が空いている。

ゆつくり食べにくる人も居れば、外食に行く奴も居るからである。

まあ、学食は無料なので、わざわざ、外食をする人は少ない。

殆どはゆつくり九時十時に食べに来る。

俺も普段はその中の一人だ。

「恭ちゃんは何食べる?」

「そりだな……どうせカラオケ店でポテトとか頼むから軽くでいいかな」

「なら、私もそりじようかな」

「別に真似しなくてもいいぞ」

俺はそう言ったが、結局一人でタマゴサンドを食べる事となつた。

「ふふ」

タマゴサンドを半分食べ終わった頃、突然桜花が笑い出したので驚いた。

「い、いきなりどうした？」

「べ、別になんでもないよ。ただ……」

「ただ……」

「ただ……なんだろう？」

「恭ちゃんと一緒に居れるのが嬉しくて」

なんだ、そんな事か。

別にたいした事じゃ、ないだろう。

「今日も個室で……一人きりならきっといいのに……」

声が小さくて、何を言つたのか聞こえなかつたけど、赤面して下を向いてしまつた。

びついたんだね？

桜花つて、よく赤面するよな。

赤面症なのかな？

「あ……恭介」

「ん」

俺の名を呼ぶ声の方へ顔を向けると、そのまま香菜ちゃんが居た。

「香菜ちゃんも朝飯?」

「うん。 さうだけど」

アレ?

朝からいきなり不機嫌?

「何か嫌な事でもあつた?」

「そんなことないわ。 ただ……」

また「ただ……」かい!

流行つてんの?

「今日急にオーディションが入ったから、行くのは午後からになるわ」

「マジか」

オーディションか。

香菜ちゃんは声優だからな。

まあ、一般的には余り知られていないみたいだけ。

「やうか、頑張れよ」

「も、もちろんよ。必ずエロゲーに出てやるんだから」

自分でエロゲーって言つてみじやん。

桜花には聞こえてなかつたみたいだけど。

そう言えれば、昨日練習してたもんな。

でも、急にこつて言つてるから、オーディションはホントは今日じやなかつたのかな。

「受かるといいな」

「ええ。 そう言つわけだから、じや」

そう言つて、香菜ちゃんは焼きおにぎりを食べながら食堂を出でつた。

九時丁度。

俺たちはカラオケ店に来ていた。

カラオケ…… そう言えれば久し振りだ。

最後に来たのはあの時か……。

「さ、ささき今日は呼んでくれてありがとります」

優希ちゃんは俺に礼を言つてきた。

「別にいいって。友達なんだから」

「友達……はいです」

優希ちゃんに笑顔が浮かぶ。

「優希ちゃんは、カラオケとかはよく来るの?」

「は、はい。よくヒトカラしてますです」

ヒトカラ……一人カラオケか。

最近、流行ってるよな。

いや、単に友達がいない奴が増えてるのか?

そう言えど、ヒトカラってJOYSOUNDを出している会社、エクシングの登録商標らしいな。

ふふ、豆知識~

まあ、見せびらかしたりしないけどね。

……見せるんじゃねえな、聞かせる方だな。

「知ってるか、ヒトカラつてエクシングの登録商標なんだぜ」

と思つたら、光輝が言いやがつた。

知つてたのか！

「ふん、その程度、知つている」

拓夢、お前も知つていたのか！

「あ、僕も知つてたよ」

悠斗もかよ！

ふー、言わなくてよかつたぜ。

恥、かく所だつた。

「……」

光輝、ざまあ

「恭ちゃん。そろそろ入ろうよ」

「そうだな」

桜花の言葉で俺たちはカラオケ店へと入る。

フロントに着くと、店員がテンプレの台詞を紡ぐ。

「こいつしゃいませ。会員証お持ちですか？」

「はい」

俺は財布からまねきねこの会員証を取りだし、店員に渡す。

油性のペンの太い方で書いてしまって、潰れてしまつてるけど。

「はい、お預かりします。六名様でよろしいですか？」

俺、拓夢、光輝、悠斗、桜花、優希ちゃん。

確かに六人だな。

だが、俺は訂正する。

「いえ、午後からにもう一人来ます」

勿論、香菜ちゃんの事である。

「そうなんですか？」

優希ちゃんが俺に聞いてきた。

そう言えども、優希ちゃんが居る時は香菜ちゃんと遊んだ事はなかつたな。

基本、香菜ちゃんは部活で全然遊んでなかつたし。

…… そうなると、桜花も今日、香菜ちゃんを知つたのか。

同じクラスだから会つてない事はないか。

まあ、俺の知らない所で仲良いかも知れないが。

「畏まりました。『来店時にフロントへ電話をして頂きますようお願いします』

「はい」

「今回せどりの『ースで』

「フリータイムで

「畏まりました。混雑した時は四時間で、退出頂く事も御座います
が、よろしくでしょうか？」

「はい」

「あらがとうござります。今回、機種はどうにしますでしょうか？」

機種か……。

そう言えど決めてなかつたな。

「何がいい？」

やつぱ、勝手に決めるのはよくないので、みんなの意見を聞く事に
した。

「私は恭ちゃんが選んだのならどれでもいいよ」

「桜花……それが一番困るんだが。

「CROSSOがいいです」

「うおー」

いつも静かな優希ちゃんがいきなり大きな声で言つてきただのでビックリしたね。

「す、すいません……」

いや、別に驚いただけだから謝りなくていいの!」

まあ、それが優希ちゃんっぽいけどね。

「みんなはそれでいい?」

俺は、拓夢と光輝と悠斗に聞く。

「ああ」

「いいぜ」

「いいよ」

と、三人とも反対しなかつたので、それにせつかく優希ちゃんが意見してくれたのでCROSSOにする事にした。

「クロウスの」

「はい。熙まりました。では案内致します」

俺たちは店員に連れられ、奥へと進んでいく。

そして、一つの部屋の前で止まつた。

「五〇一十二号室になります」

案内された席は八人用の部屋で六人では広く感じじる。

「では、何かあつましたら電話アドセー」

店員はやつぱり、去つていく。

さて、歌こまくらわー！

「え、えと」

優希ちゃんが、デモスクを弄り、設定していく。

あ、JÖYSはデモスクではなくてキョクナビだつたな。

「主旋律……リージック……Hマーは下げて……」

優希ちゃんは、まだ設定を弄つてゐる。

……と思つたら、パンクの可愛い携帯電話を取り出し、かざして口グインだつけ？

ログインしていた。

気が付けば、テレビ画面は全国採点の文字が右上に表示されている。

「優希ちゃん、最初歌つてこないか？」

俺は優希ちゃんに叫び声を出した。

「いいんですか？」

「わいわい

まあ、そりゃあ、キョクナビを手に持つて放さないんだもん。

「では……」

優希ちゃんは自分のマイルームに入っているマイクから曲を一つ選択して送信ボタンを押し、俺の隣に座っていた優希ちゃんがマイクを持って立ち上がる。

当たり前だが、今日はみんな制服ではなく私服だ。

優希ちゃんは控えめな白いチェックのワンピースに、花飾りを髪の片方に着けている。

優希ちゃんは清楚で可愛いらしく、衣装だ。

もし優希ちゃんが一次元のキャラクターだったなら、可愛い妹キャラ

うかな？

見た目的には、‘生徒会の一存’の‘椎名真冬’みたいな感じかな。
まあ、ちょっと違つけど、大体そんな感じだな。

みへ考へたら、性格も似てるかも。

……優希ちゃん、B-好きだからな……。

ぶつちやけ、オタク パラダイスは優希ちゃんがモデルなんだよね。

B-……ずっとビゴーティフルライフだと想つてたのに騙されたよ。

……アレ、誰に騙されたんだっけ？

まあ、いいか。

過去より今だよね。

「き、緊張しますぐ……」

俺は頑張れと優希ちゃんに言おうと思つたけど、テレビ画面に表示されたタイトルに吹いてしまつた。

だつて、‘カレーの歌’、つて書いてあつたんだもん！

「恭ちゃんは何歌うの？」

もう一方から、桜花が俺にくついてくる。

桜花は茶色を基調とした服だ。

だが、決して茶色だからって婆臭いと言つたりではなく、所々に可愛いらしさのアクセントがあり、見事に着こなしている。

生半可な奴が着たら、この服に喰われてしまつだらうね。

桜花も二次元のキャラクターに居たつて不思議ではないくらいに可愛い。

桜花も二次元のキャラクターで表すなら、同じ名前に桜が入つてゐる繋がりで、Fate/stay nightに登場する、間桐桜だな。

桜花……。

よく、俺の好みが分かつてゐるな。

この「」

まあ、声優で言えば、俺はゆかりん「〇〇」です。

世界一かわいいよ

「せうだな……」

俺は桜花の言葉に返事をしながら、キヨクナビを弄り、曲を検索する。

……俺も今度、登録してみつかなー。

「ま、泣きゲーの〇〇でも歌うかな」

俺はそう桜花に言つて、曲を送信する。

そして、キョクナビを桜花に渡す。

「ほー、桜花」

「ありがと」

桜花はキョクナビを受け取り、曲を検索している。

その時、優希ちゃんの曲が終わり、採点画面が表示される。

九十三・四九九点と表示されている。

……高いなー。

「凄いね、優希ちゃん」

素直に思った事を俺は優希ちゃんに言つた。

「あ、ありがと」

優希ちゃんは喜んでくれてこる。

俺の言葉なんかで、喜んでくれるなんて、俺も嬉しいぜ。

「凄いね」

「上手ことよ」

「わすがー」

拓夢たちも賞賛を優希ひかるに送つてゐる。

「ありがとうございます……」

ヒ、頭を下げて優希ひかるは席に座る。

「次は俺だな……」

俺は優希ひかるからマイクを受け取り立つた。

丁度、採点画面が終わり、次の曲が始まる。

……優希ひかるのエロはコキか……覚えておいで。

「恭ちやん、頑張つて!」

「おひー!」

桜花からの応援に答え、俺は熱唱したね!

歌詞は何か著作権とかで書けないけど、まあ分かるよね?

あの泣きゲーだよ。

「…………」

「…………」

後奏力ギットによつて後奏はバツサリと切られ、曲が終つてゐる。

「恭ひやん、凄いよー。」

「凄い上手かつたです。」

「まあ、なかなかだな」

と、賞賛の言葉が降つてくる。

あー、嬉しいぜー！

「おー。」

光輝が画面を見て、驚いている。

どうが、したか？

「…………」

うん。

画面に書いてあるね。

…………採点できませんでした、つて。

どうして？

イジメ？

誰かの陰謀？

「恭介さん、マイク」

桜花の言葉で俺は漸く理解する。

「あ……」

「あ……ナリだよ。」

〇一二〇になつてなかつたんだよー。」

〇一二〇のまま歌つてたんだよー。」

「ふつ……まあ、点数は心の中で表示されてるぞ」

「何言ひてるの?」

……悠斗に突つ込まれちやつたー。

まあ、いこや。

「桜花、マイク」

俺は桜花にマイクを渡す。

「恭介さん、私頑張るよ」

と言つて、桜花は勢いよく立ち上がる。

逆に俺は座る。

「ん」

その時、メールが着ている事に気づいた俺はメールを開く。

予想通り、それ香菜からだつた。

『一時くらこにまやつちにいけると思つわ』

今は、まだ九時半くらいのまままだだな。

俺は、りょーかいと返信して携帯を閉じる。

一方、桜花はジャニーズの歌を歌つてゐる。

桜花は、小学生の時もジャニーズとか好きだつたから、変わんないんだな。

そう思つと、なんか桜花がより一層近くに聞る感じがした。

あれから、何周かして、優希ちゃんはボカロを歌い、俺はアニソンを歌つて、桜花はジャニーズ、拓夢はバンドや昔の曲、光輝は最新の曲、悠斗はアイドルを歌を歌い続けた。

気が付けば、時刻はもうすぐ一時になろうとしてる。

「あ、むつあぐだな

「ん？ むつあぐへるのか？」

拓夢がポテトを食べながら聞いてみるの

「ああ、一時くらこつて言つたからな

と答へる。

その時、噂をすればなんともうりで、扉が開く。

「待たせたわね

香菜ちゃんが入ってきた。

「ああ、待つたよ

「な……仕方ないでしょー

「怒りなこで

まあ、そういう返しが来るつて分かって言つたんだけじな

「……

隣を見ると、優希ちゃんが香菜ちゃんを見て、震えてる。

「優希ひささん？」

俺の言葉に優希がやんせ答へず、少しずつ無意識に口から声が出了よ
つて呟いた。

「…………おねえちやん

Chapter 2 カラオケパ一ツク（後書き）

声に出せれば簡単だけど

負のスパイラルが廻り

決して前へ進めない

道はあるのに

それは きっと

素晴らしいものだ

僕も愛された

壊されるほどに

○

おねえちゃん?

111

香菜ちゃんが、優希ちゃんのおねえちゃん？

え、そんなはずはない。

だつて、優希ちゃんにクラスに居る声優を聞いた時、優希ちゃんは知らなかつた。

いや、流石にエロゲーに出ていた事は隠していた？

でも、ギクシャクした関係なら知らなくとも無理なしが……。

……結局 時田の力で不景は香菜子を 久が来た後 気まぐなり

1

はあ。

まさか、香菜ちゃんが優希ちゃんの姉だつたなんてな。

優希ちゃんに屋上で話を聞いてなかつたら、全く意味わからないま

ま、ギクシャクしたまま、カラオケが続いていたと思つと怖いね。
拓夢たちこぼづして優希ひやんと香菜ひやんがギクシャクしてい
るのか知らない訳だしな。

そつ考えると、知つてるのは俺だけか……。

いや、悠斗と桜花以外は俺の前では香菜ひやんと会つてもいないの
か。

「……」

『兄貴、何してるの？ 早くしなきよくなつ』

画面上では、ツンテレ妹が喋つてゐる。

『お……お兄ちやん……急いで……』

もう一人の妹も喋つてゐる。

性格は違うが、声は似てゐる。

まあ、そりゃそうだ。

この姉妹の声優、つまり中の人は同じ人物なのだから。

……[画面上の姉妹は仲良しだ。

だが、優希ちゃんと香菜ちゃんは……。

『まい、兄貴！ 涼だつて待つてるんだからー。』

『お姉ちゃん……靴ひもばじかでるよ』

『えつー・♪』

田の前の姉妹は仲良わざつに、主人公が来るのを玄関で待つている。

……優希ちゃんと番菜ちゃんだつて昔はこんな風に仲良かつたはずなんだ。

やつ、優希ちゃんが言つたんだから。

えつこ？

うーーん……ひとつでもゆくよ

その時、俺の携帯電話が震えだし、電話が着た事を告げた。

「……拓夢か」

ディスプレイには黒羽拓夢と表記されてる。

俺は携帯電話を開き、ボタンを押して耳に当てる。

「どうした？」

『——「動にづくする楽曲が完成した』

ああ、そつ言えば作ったね。

そのせいで、桜花と遊べなくなりカラオケに……。

「……そうか。それは良かった

『うん。後は悠斗に頼んだPVの絵が完成するのを待つだけだ』

「やうか

『……話したい。俺の部屋まで来てくれないか?』

話すなら、今言えば電話しているのだから話せばいいこと思つたが、俺はすぐ拓夢の話したい事が分かつた。

「分かつた

だから俺はそう言って電話を切り部屋を出た。

勿論、エロゲーの電源も消して。

……あ!

セーブしてねえ!

……まあ、自動でクイックセーブされているから、感じじょり。

もう一度、ツンデレ妹の靴ひもがほどけるだけだからな。

グッジョブ!

クイックセーブ！

数分後。

俺は拓夢の部屋へとやつて来た。

まあ、数分後と言つても、距離的には何部屋か越えて隣つて訳だから走れば早い奴なら十秒程度で着くかもしけないな。

「お前、優希と香菜ちゃんのこと、何か知つてるだろ？？」

正解だ。

まあ、拓夢たちが訳が分からぬよ的な事になつていて、俺は優希ちゃんと一緒に驚いてしまつたしな。

正確には、香菜ちゃんが優希ちゃんのお姉ちやんだつた事に。よく考えたら、優希ちゃんの名字、知らなかつた。

まさか“竹達優希”だつたとはな。

「ああ、詳しく述べ知らぬけどな

こんな事を聞くのは、拓夢だつて心配しているのだと思つ。

香菜ちゃんが入つてくるなり優希ちゃんの元気はなくなつたし。

一人は歌わない、ただ席に座つていただけ。

顔を合わせたくないのか、一人とも下を向いて。

……同じクラスなのに全く気付きも出来なかつた。

結局、氣まずい空氣に押し潰れそつになつた俺は解散を宣言し、みんな了解して扉を開けた。

何が、出来る限りのことはするよ、だ！

俺は逃げただけじゃないか！

空氣に耐えかねて！

屋上で言つた言葉は、これじゃただの偽善じゃないかつ！

「恭介。昨日の解散は、間違いじゃないと思つ

俺は驚いた。

まるで、俺の心が見えているような事を言つたからだ。

「あの場面は離れて正解だつたと思つ。もちろん、俺の解釈だけどね」

……。

「……お前は、俺の心が読めるのか？」

自分でも馬鹿な質問だと思つ。

だが、勝手に俺の口は開いていた。

「そんなの無理だよ。……でもそうだね、分かつたらいいよね。相手の嘘だって簡単に見破れるんだから」

相手の心が読める……。

「俺は読めない方がいいかな」

「どうして？ 分かつたら乐じやない？」

拓夢が聞いてくる。

どうして？

そんなの決まっている。

「辛いからさ」

「辛い？」

ああ、そうさ。

「例え、表面だけだって分かつていても、心が分からなければもしかしたらっていう希望が見える」

そう、そうすれば騙していられる。

心の中で嘲笑われていても。

「希望……ねえ」

拓夢は呟くよつて葉を紡いだ。

それは肯定したのか、否定したのか、心が読めない俺には分からない。

ただ、その表情を信じるなりまでは、肯定も否定もしてなにって感じだ。

「優希と香菜がね……姉妹とはな」

俺は拓夢に俺が知つてこる事を全て話した。

煙草の事だけは、隠しておいたけどな。

「ああ、俺も昨日驚いたよ。いきなり優希ちゃんが香菜ちゃんを見つめながらやんつて言い出すから」

「…………ド、お前がどうあらんだ?」

「…………」

「優希と香菜のことはだよ」

……。

出来の限りの」とは協力したい。

「この言葉は嘘ではなかった。

本心だったはすだ。

でもっ！

ぶつひやけ、軽い気持ちで言つた事も事実だ。

深くも考えないで。

「……何とかしてあげたい

そう。

何とかしてあげたい。

「でも……

「でも、何だよ？」

「軽い気持ちだった。深くも考えないで

そう。

深くも考えないで。

「ただ、困つてゐなら何とかしてあげたい。ただそんな軽い気持ち
だつたんだ」

「……何が悪いんだ？」

「え？」

「困ってるから助けてやりたい。手を差し伸べてやりたい。立派な理由じやないか」

……立派。

立派なのか？

「立派？」

「ああ、立派や。困ってる奴を助けるのに理由なんて要らうだろ？」

困ってる奴を助けるのに理由なんて要らうない。

……理由なんて要らうない。

理由なんて関係ない。

そうだ！

俺はただ、困ってる優希ちゃんを助けたい。

あの時、俺はその気持ちだけだった。

それは、軽い気持ちだと思っていた。

でも、立派な理由だつたんだ！

だって、困ってる優希ちゃんを助けるのに、理由なんて要らないんだから！

ただ、笑ってほしい。

それだけだ！

「ありがとう拓夢。お陰で分かったよ」

「そうか

「ああ、俺は優希ちゃんを助けたい。だって悲しんでいる優希ちゃんなんて見たくないから。優希ちゃんには笑って欲しいからー！」

理由……。

理由なんて要らないけど、敢えて言つなり、そう、俺は優希ちゃんに泣いて欲しくない。

笑つて欲しいんだ！

「なら、行けよ

「うんーー一緒に……」

きっと、俺一人じゃ踏み出せなかつた。

俺一人が動いたつて何も変わらないと。

でも、そんなのやつてみなくちゃ分からぬい！

そう、教えてくれた拓夢と一緒に……！

「俺は行けない」

え……！？

「どうして？」

「優希が、待つてるのはお前だからだ。だから一人で行け

「俺を待つてる？」

「そうだ。自分のことを語る。それは一人じゃ抱えきれないからだ。
だから、持つて欲しいんだよ」

……。

「特に、何でも自分一人で溜め込みそうな優希が、だ

……。

「誰でも良かったわけじゃない。お前だからだ

……。

「分かったら、さつと行け

……。

「ああ」

俺は拓夢の部屋を飛び出した。

拓夢に「ありがとう」と走りながら伝えて。

勢いよく出たのはよかつたが、流石に女子寮に入つて行く訳にはいかない。

桜花が特別なだけであつて、本来は禁止なのだ。

破つたら、最悪退学になる事もある。

……そう考えると、桜花は本当に特別なんだと考えさせられる。

寮の管理人曰く、「心を射たれた」と言つていたが、毎日の熱心さが伝わったのかな。

まあ、それはさておき一体どうしたものか、と、女子寮を見上げながら途方にくれていると、携帯電話と言つ存在を忘れていた事を思い出す。

余程、焦っていたのかと、深呼吸をして俺は優希ちゃんへ電話を掛ける。

「……」

着信音はなる。

「……」

が、優希ちゃんは出ず、留守番サービスへ繋がってしまいます。

「……」

俺は電話を切る。

そして、このまま女子寮に入ってしまおうかとも考えたが、見付かった時、優希ちゃんに迷惑をかけてしまうと思い至り、考え直す。

そして、優希ちゃんは女子寮に居ると決め付けていたが、本当に居るか知らなかつた事に思い至る。

どうせ、よっぽど、今、俺の頭は回転を止めているようだ。

俺の使つてゐる「モの携帯電話にはGPSを使つて、相手の居場所を探す機能が付いてゐるが、相手が了承しない限り表示はされないので意味はない。

「……」

俺は階段を上つてゐる。

別に優希ちゃんの居場所が分かつた訳ではない。

ただ、もしかしたらソコに居るかもといつまつてゐる頭をフル活動して考え出した勘である。

一階を越え、二階……そして四階の上へ。

田指すは屋上。

初めて話した時、優希ちゃんが煙草を吸つてた場所であり、俺が約束した場合であつ、優希ちゃんが好きで嫌いな場所。

俺は屋上の扉を開ける。

そこには、初めての時と同じように煙草を持って遠くの景色を眺めている優希ちゃんの姿があった。

「……」

優希ちゃんは俺には気付かず景色を見続けている。

俺はゆっくり優希ちゃんのもとへ歩いてこき、隣へやつて来た。

すのと、流石に優希ちゃんも俺に気付いてくれた。

「恭介さん……どうして？」

俺は優希ちゃんの質問へは答えず、違う言葉を発した。

「おー、景色綺麗だな」

ここに来て、男子寮の屋上で初めて見た時のよつ、太陽が沈み、映し出すオレンジの夕日は美しい。

少女は美しいよつ、可愛い方がいいけどね！

「優希には、灰色に見えますです」

優希ちやんが、景色を見てそつまく。

恐らく、本当に灰色に見えていの訳ではないだら。

空がオレンジに染められてる景色を見えてはまつだ。

でも、見えるけど見えないのだと思つ。

オレンジ色だけど、灰色だから。

「俺は、前に約束したじやん」

俺は景色を見ながら優希ちやんに話しかける。

優希ちやんも聞いてはいるけど、景色の方を向いてい。

「出来る限りのことはあるよつわ」

優希ちやんは無言だ。

ただ、景色を見てい。

俺は話を続ける。

「昨日のカラオケ。ぶつちやけ、驚いたよ。まさか、香菜ちやんが
優希ちやんの姉だったなんてさ」

「……」

「でも。昨日の俺は扉を開けるくらいしか出来なかつた

「……」

「拓夢は間違つてはなつて言つてくれたナビ、俺は正解だとは思つてなかつた」

だつて、それは逃げた事と思つてゐたかい。

「……」

「優希ちゃんはまづか分からないナビ、今も俺はベストだつたとは思つてない」

「……」

「正直元氣つナビや。前で約束したとき、俺は軽い気持ちだつたんだ。ただ、笑つて欲しこつて」

「……」

「それを拓夢に言つたいたと、何で言つたと想つへ。」

「……」

優希ちゃんは答へな。

質問風だが、答えを求めてない台詞だと分かってるんだろう。

「別にいいじゃんだつてよ」

「……」

「俺は特に理由もなく、約束した。だが、助けたいと言つて貯持ちに理由は要らないつて言われてさ、分かつたんだ」

そして、俺は優希ちゃんの方へ向いて、今一番言いたかった言葉を口に出して綴る。

カツコ悪くたつていい。

俺はアニメやゲームの主人公のよつこ、カツコイイ台詞なんて言えないから。

でも、これはシナリオライターが書いた偽りの台詞ではなく、俺が心から思つた本当の言葉だ！

「優希ちゃんには笑つて欲しいんだ！ だから、優希ちゃんが抱えている悲しみを半分、俺に持たせてくれ！」

「……！」

優希ちゃんが驚いた表情を見せ、俺の方へ向く。

「前も言つたように、俺なんかじや何も出来ないかもしねない。でも、出来るかもしねないから、俺に手伝わせて欲しい」

「……恭介、さん……」

優希ひやんの手から煙草が落ちる。

「俺に、灰色の世界を色が溢れる世界へ変える手立てをしてくれ

「恭介、さん」

優希ひやんが俺に抱き付いてくる。

「……」

俺は黙つて優希ひやんを受け止めた。

あつとい、本當は香菜ひやんに抱き付きたいはずだ。

言わば、俺は代わりだ。

「き恭介さん……」

優希ひやんは涙声で俺の名を呼ぶ。

でも、代わりでも、代わりになれるなら今はいい。

「ありがと……『ありがとうございます……』」

涙声で感謝の言葉を吐きだされる。

だから、

「それは、おねえちやんと仲直り出来たらいいってくれ」と、言つてやつた。

そう。

これがスタートライン。

やつと、始まつたのだ。

「…………は、はい……っ！－！」

優希ちやんは力強く、返事をする。

だが、声はやつぱり涙声のままだ。

優希ちやんには笑つて欲しい。

だが、今だけはいいだろ。

今だけは。

片方が正しくて

片方が間違っている

当事者から傍観者へ

それが間違いだと気付いた

Chapter 4 尊（前書き）

撃は破れない

それが世界のルール

抗つても 戰つても

神になれば かえられる？

「では、今日から新しい所にいくぞ」

正治先生がそう言って、教科書のページを指定する。

そのページを俺たちは開く。

流石に、この天才校で居眠りなどをしてる奴などはない。

そんな奴は入れないからな。

まあ、もの凄く頭が良ければ入れるかもしれないが。

「今回からやる所は、価値観の相違、だ」

一学期の現代文の試験は九十九点と、惜しくも一点足りなかつたからな。

一学期は満点を採つてやるぜ！

葉鍵学園の試験は学期事に一回ある。

つまり、その一回の試験で、その学期の評価が付けられるのだ。

因みに、この学園の赤点は五十点。

半分以下は赤点なのである。

だからといって、簡単な問題でもない。

ぶつちやけ難しい。

数学では、相対性理論を学んだが、満点まで五点足りなかった。

まあ、でもこのクラスの平均点は九十点。

このクラスが特別凄いのではなくて、他のクラスや、学年でも大体同じ平均点が出る。

やはり、ここに居る人たちには本当にみんな天才なんだと改めて思つたね。

全教科で最低点は九十三点で、俺の平均点は九十五点だが、クラスでの順位は十一位だった。

四十一人居るので、数字上では上位だが、一位の奴はオール満点など、まだまだ差がある。

やはり、苦手な英語で躓いたのは痛かったかもしれない。

いや、痛かった。

躓かなければ、一桁まで行けた。

……だから、一学期は頑張つてオール満点を目指すぜ！

「では、光輝くん。読んでください」

「はい」

正治先生に指名された光輝は教科書を持つて、立ち上がって朗読を始めた。

「過去を見ると、そして現在を見てみると、世の中には沢山の差別があることがわかる。例えば、人種差別。日本ではあまり馴染みはないかもしねが、外国ではまだ存在する所もある。最も有名なのは黒人と白人の違いだろ?」

差別……。

俺たちゆとり世代の日本では平等が憲法でも示され、あまりお目にかかることはないな。

……本当にそうだけ?

何か、スゲエ間近な問題だつた気もしなくもねえが、ゲームの影響かな。

まあ、確かに昔は白人が偉く、黒人は身分が低かつた。

だが、そんな事は誰でも知つている事だ。

日本でも、昔は黒人を奴隸として扱つていたらしいからな。

「次に有名なのは、男女差別だろ?。俗に言う男尊女卑だ。これも外国ではまだ存在する所もある。日本でも昔は男尊女卑だつた」

そうだな。

そつ思えば、男尊女卑から男女平等になつたのは、結構最近なんだな。

確かに、女性の社長はまだしも、女性の校長とかを見ると違和感を感じる。

俺はジエンダーに取り付かれているらしい。

でも、流石に風呂・飯・寝るの親父を想像したりはしねえよ。

まあ、亭主闇白とはいからずも、かがあ天下は確かに嫌だね。

最近は草食系男子が増えているから、余計女子の肉食系が増えるんじゃないんだろうか？

俺も肉食系とは言えないしな。

ロールキャベツでも田舎そうかな？

まあ、俺はきっと亭主闇白にはなれないだろうな。

……なんか、女子に引っ張られる姿が想像出来る。

……まあ、妄想だな。

俺はきっと、ずっと彼女いない歴＝年齢で、いつか魔法が使えるようになるんだ。

……恋愛、いっぱいしてるし、嫁も沢山いるのに。

……画面の中では。

正治先生の授業が終わり、放課後となつた。

だが、今は俺の田の前には正治先生が居る。

「進路とかは考えているのかな？」

正治先生は進路とか、悩み事を聞くカウンセラー的な事もしている。別に悩みとかはないが、進路の事は先生とかに早いうちから聞いてもらひた方がいいだらうと思つて、今話をしている。

職員室に訪れたのは単に落ちてた千円を届けたのが理由だが、正治先生がついでだから進路について聞かせてと言つて來たので話をしている。

あ、別に、千円を自分の物にしようとか、一瞬も刹那さえも考えなかつたからな！

本当だぞ！

ただ、ちょっと、ゲーム代に心は揺れたり……なんかしないんだからな！

勘違いするなよ！

「『』を卒業したら、ゲーム科のある専門学校に行こうとしてる

「じゃあ、ゲームプログラマーって？」

「ぶつちゅけ悩んでる。プログラマーかプランナーかで

「なるほど

ん？

先生にタメ口はおかしいってか？

別にいいんだ。

先生も了承済みだ。

何か、一学期の頃からよく話し掛けられ仲良くなつた。

それで、先生が敬語は止めてくれと囁つかり、止めた。

それだけ。

ぶつちゅけ、先生の中では正治先生が一番、仲がいい……と囁つかの
はおかしいか？

親しくなつた。

担任の智夜先生よつ……。

……ん？

周りを見ると他の先生達がいて、それぞれ何かやっている。

印刷してる先生や、パソコンで何か打つてる先生など。

だが、担任の姿だけはなかつた。

「智夜先生は？」

だから、聞いてみた。

まあ、特に意味はないが。

「ああ、智夜なら用事があるから帰つたよ。忙しいからね」

へえ、そつなんだ。

それから、進路について三十分程話して、俺は職員室を出た。

今俺は談話室にいる。

こりは、その名の通り、談話する部屋だ。

個室ではなく大部屋なので、聞かれてたくない話をするには適さない
けどな。

ただ、無料の自動販売機も設置されていて、たわいのない話をする
には最高な場所だ。

つまり、今のような時には最高な場所つて訳だ。

「じゃ、もし本当ならヤベージャん！ めつちやヤベージャん！」

紙パックの「コーヒー牛乳を片手に持ち、ストローで啜る俺の前で、悠斗が俺に向かつて話してくれる。

「なつ！ スゲーだろつーー！」

まあ、確かにもし本当ならそれはとてもなくスゲー事だ。

多分、葉鍵学園の歴史を見ても、まずないだろうな。

だつて、ここは天才学園。

失礼だが、テレビに映るイケメンやアイドルとかは、ぶつちやけ頭は悪いだろ？

高校生になつて、掛け算できないとか終わつてんだろ。

だから、頭がいい奴はブサイクが多い。

見た目が悪いから、せめて中身だけはつて頑張る。

……まあ、全ての人に当てはまる訳じゃねえけどな。

大体はそんな感じじやね？

でも、この考え方も偏見なのかな。

ジョンダーかもしれないしね。

つまり、一言で言えば、アイドルの結愛ちゃんが、この天才校に転校してくれるっていう噂を悠斗は手に入れたらしい。

だが、噂なんて、所詮は根も葉もない話。

極論を言えば、信じられない。

だって、大人気アイドルの結愛ちゃんが、この天才校に転校してくるってことは、かなりの天才って事だ。

それは、それでいい。

アイドルは頭が悪いなんて、間違いだとはぶつちやけ思っていないが、全員ではないとは思っている。

結愛ちゃんは、見た目も中身も凄い奴なのだろう。

ライバルが増えるのは辛いが、確かにアイドルが来てくれるのは、アイドルにそんな興味もない俺ですら嬉しい。

だとしたら、悠斗のよつこファンは、もっと嬉しいんだろうな。

だが、問題は北海道に来るって事だ。

この学園は寮生活が義務だ。

つまり、この学園に入るって事は、ここで暮らすって事になる。

いくら、飛行機で行けるからと行って、わざわざ北海道に転校して

くる意味はない。

アイドル業をするなら、都市圏に居た方が遙かに楽だ。

だから、俺は信じられない。

「そんなの根も葉もないただの噂や」

正直に言つた。

前は悠斗も分かっていたが、今回はガチっぽいので本音を言つてしまつた。

「ああ、分かってるよ」

何だ、分かっているのか？

「だから、噂の真偽を確かめにいく

はあ？

やつぱり、コイツ何も分かっていない。

好きな女の子が来るつて事が余程嬉しいのか、周りが見えていない
よつだ。

悠斗の中では、‘そつあつてほしい’が、‘そつであるはず’に変わっている。

願望が想いが、そつあせているんだ。

だから、その証拠が、ある、と信じられるから、見つけようとしているんだ。

‘ない’はずの証拠を。

「わうか。頑張れよ

俺は、話を切り上げ、ギャルゲーをする為に寮に戻り、席を立つた。

「く・ろ・れ・き・し」

俺の足が止まる。

「あの時、無理矢理手伝わされたの誰？」

……。

「無理矢理付き合わせたのは？」

……。

「……俺です

「分かればよろしく」

俺は、「コーヒー牛乳を」ハリ箱に投げて、悠斗の後を追つた。

まあ、あの時は俺が悠斗を引きずり回したのだから、今回は礼も兼

ねて付き合つよ。

ただ、一つ違うのは、探し物が存在するかしないかの違いだ。

前回はあつた。

でも、今回は……。

「で、どうするんだ？」

「噂の発信元を探す

「どうやって？」

「僕に噂を教えた奴に聞いた奴を聞く

なるほど。

つまり、どんどん近づいて行くって訳だな。

「僕が聞いた奴は先輩から聞いたって言つてた。行こう

そう言って、悠斗は再び歩き出す。

噂の発信元。

そんなの、見つかるのかな……。

海から探す様なものだしな。

まあ、ネットとこつ海よつけマシか。

「あすこちん萌え！ セレバ時代は妹系だよねー。」

先輩は、発言通りオタクのようだ。

しかも、みんなが想像するような太ってて、汗つかきのキモオタだ。

ぶつちやけキモい。

あすこちんが、桐乃の声で「キモシ」と叫びださう。

でも、気付かなかつたな。

中の人気が同じだなんて。

キヤスト見るまでは、平野綾、か、伊藤かな恵、のどいちかだつて思つてたから、吃驚だつたよ。

顔がw(。○。)wつてなつちまつたぜ。

「先輩、ちよつといいですか？」

見た目で少し引いていた悠斗が、意を決したよつて話しあげた。

見た目で引くのは悪いとは思つが、……うん。

これはキモい。

「やつぱりこ、男じゃ萌えないお

うん。

声もキモい。

「ゆわゆあの尊は誰から聞いたんですか？」

悠斗が先輩の言葉を無視して、尊の話を聞く。

「ゆわゆあ、ああ、あれはねえ。三年の男子があ、喋ってるの聞いたんだお」「

「……ビックリしたね」

「……ああ。あんなの、ゲームやアニメでしか居ないものだと思つてたよ」

「……僕もだよ。ある意味、真のオタクだね」

そんな話をしながら、俺たちは寮の三階に上がり、キモオタが話していたと言つ、三年の男子が居る部屋に辿り着いた。

「……」

悠斗がチャイムを押す。

数秒後、扉が開く。

「あら～ん。いい男」

「……」

俺と悠斗は田を丸くした。

キモオタの次はオカマかよ！

どんだけ濃いんだよッ！

こんな奴、この学園に居ていいの？！

ってか、こんなに濃いのに今まで知らなかつた事にも驚きだよーー。

「どうしたのよ？ ガツカリしたあ？ そりやあ、一二丁田にはあ
敵わないわよ」

ガツカリしたよ！

別の意味でなーー

「あの、ゆわゆあの噂つて誰から聞いたんですか？」

悠斗は、キモオタのお陰で耐性が出来たのか、もう大丈夫のようだ。

「噂あ？ 一年生のお女子からあ聞いたのよーー」

女子からか……。

どうしよう。

女子寮には入れないぞ。

「そんなことより、部屋によつてえ行かない？ 優しくするわよ
お」

「遠慮しませうー」「

やつひで、悠斗と一緒に階段に向かつて走り出す。

男子寮の外に出でた俺と悠斗は立ち去へしていた。

理由は、次の情報元が女子だからだ。

男子は女子寮には入れない。

桜花が特別なだけだ。

……桜花？ そうだ！

「桜花に連絡してみるか？」

俺は悠斗に提案する。

まあ、寮には居ないかもしれないけどな。

情報元の女子も寮に居るという証拠はないが。

だとしたら、無駄だな。

居なけりや、余計探せないけど。

でも、桜花なら知ってるかも。

同じ一年生のようだし。

「うふ！ お願ひするよ

俺は桜花に連絡する。

女子なら、桜花じゃなくてもいいかも知れないけど、優希ちゃんと
香菜ちゃんには、こんな事で今はしづらいからな。

二人とも優しいから、やつてはくれると思つけど。

香菜ちゃんは、最初嫌つて言つと思つけど。

桜花はコールが始まつて、一回田で俺の電話に出た。

相変わらず早い。

『恭ちゃん！ 電話してくれて嬉しい！ どうしたの？』

桜花の口調は明るい。

何か、スゲエ嬉しそうだ。

いい事でもあつたのかな?

「あのれ……」

俺は桜花に、経緯を話した。

『それなら隣の子がそうだよ。確か、ナンバープレートに書かれていた名前が確かそうだから』

『どうせ、知つていろ』

「じゃあ、行つてくれる?』

『いいよ。恭ちゃんの頼みなら喜んで』

行つてくれるようだ。

桜花は優しい奴だな。

今度、お礼しなきやな。

チャイムが携帯電話越しから聞こえる。

俺は受信音量を最大にして、悠斗と携帯電話から聞こえてくる音に耳を傾ける。

『あ

『あのー』

『あ

『あなたが

『

『あ

『尊

『

『あ

何か、相手の言葉が『あ』としか聞こえないんだが、携帯電話の調子が悪いのだろうか？

『間違いないですね？』

『それと便座カバー』

『では誰から？』

『それと便座カバー』

『びつしてだらりつ~

今度は『それと便座カバー』としか聞こえないんだが。

最新携帯なんだけどな。

スマートホンに替えるとこつ携帯会社の陰謀か？

『それは本当ですか？』

『いい質問ですねえ』

『嘘……じゃ、ないですな？』

『いい質問ですねえ』

……何故だろうか。

池上彰の名言が聞こえるのだが。

つて言づか、桜花。

どうして、話が進む！

絶対進まないだろ！

『分かりました』

『でもそんなの関係ねえ』

バタン

何か、一発屋の台詞を聞いたような。

気のせいだよな、うん。

扉がしまったようだから、話が終わったようだ。

『噂と言つか、先生から聞いたよつです。だから、彼女が嘘を言つていなければ噂は真実だと思います』

マジで……。

「やつたあ！ ゆわゆあに会える！」

そんな……。

バカな……。

アイドルが何故？

俺の中の常識が、パラダイムシフトされていく。

その後、職員室で聞いたらすんなり本当だと答えてくれた。

マジかよ……。

つてか、今日の頑張りって……。

Chapter 4 噂（後書き）

加害者は 笑う

被害者は 泣く

傍観者は 知らない

知っているけれど

Chapter 5 転校生（前書き）

幾千の欠片の世界は
絡み合っているから
自分の為に 人を傷付け
生きていく

「……大丈夫かな？」

拓夢があの時のように、不安げに聞いてくる。

だから答えてやる。

「大丈夫だ、問題ない」

拓夢は頷き、マウスをクリックする。

ちゃんと、投稿出来たようだ。

「一曲目……流れ、掘めるかな」

「大丈夫さ。俺の詞、お前の曲。そして、悠斗の絵。すべてが完璧だよ」

そう。

昨日の夜、噂が真実だと知った悠斗は、嬉しさからか嬉しいスピードで絵を仕上げた。

そして、今、漸く二コ二コ動画に投稿したのだ。

「そう言えば、明日は転校生が来る日だな」

「ああ」

噂の転校生がな。

翌日。

「席に着けーー！」

担任の智夜先生が、生徒に指示する。

みんな、反発する事など勿論なくちやんと席に座る。

無論、俺も。

強いて言えば、言われる前からな。

悠斗は、待ちきれないという感じで、顔が綻んでいる。

「前に言つたが、転校生を紹介する。入ってきていいよ」

先生の声を合図に、教室の扉が開く。

どのくらいの生徒が、アイドルの結愛ちゃんが来るって知っているかは知らないが、全員の目線が扉に注目される。

そして、そこから期待通り、アイドルの結愛ちゃんが姿を現す。

驚きの表情をする生徒が大半だ。

俺は知っていたから驚かないが、殆どの生徒は噂を聞いていても、

真実だとは思つてなどいなかつただろつ。

俺だつて信じられなかつたぞ。

「おつ

思わず声が出てしまつたね。

結愛ちやんはテレビで見る通り、可憐いから知つてはいた。

ほんと、ゲームの中から出てきたような少女だ。

配置は絶対妹だな。

問題はもう一人だ。

めつちや、可憐い。

いや、マジで。

アイドルに負けないくらいの可憐さを持つてるよ。

アイドルって言われたら絶対信じつけられぬ可憐い。

いや、もしなつてなくとも、なつたらすぐファンが付くだらうね。

まあ、結論を言つと、一人とも可憐いって事を。

みんな、同じ感想らしく、「レベルたけー」、「ゆあゆあだ」、「ktkr」等の声が聞こえる。

それもその筈だ。

結愛ちゃんは、黒髪のツインテール。

これだけで、大抵の男は落ちるだろ？。

身長も百五十ちょいくらいで、まさに妹系アイドルの頂点と言つていい。

もう一人の子は、茶髪のショートで、身長は百五十五弱くらいだ。

前髪をヘアピンで×にして留めている。

こつちは、クールな感じが漂つている。

と言つても、お姉さん系ではない。

ぶつちやけ、小柄で胸は結愛ちゃん同様すつとんっぽい。

だが、それがいい。

貧乳はステータスだ、希少価値だ！

「えつと、自己紹介してもらえるかな」

先生が一人にそう言つと、ざわめきが治まる。

流石は、天才校だぜ。

「埼玉県から来ました“釤宮結愛”です。よろしくお願ひします」

結愛ちゃんが自己紹介をした。

何か、テレビで聞いた声よりは低い。

まあ、テレビの時は媚びてる声だからな、アニメ声って言つのかな？

だから、これが本当の声なんだろう。

それでも、可愛い声に変わりはねえけどな。

「“堀江理緒”です。よろしくお願ひ致します」

そつ言つて、もう一人の少女、理緒ちゃんはお辞儀をした。

礼儀正しいだな。

由緒正しいどつかの箱入り娘とかなのかな？

まあ、それはともかく二人とも可愛い！

よく、美人派か可愛い派かってあるけど、絶対可愛い派だよねっ！

外国人は美人派が多い氣がするけど、俺からすればイミツ。

全く、ワケが分からぬよ。

何か、契約厨みたいな台詞を浮かべてしまつたが、どどのつまつは
……。

可愛い方がぜつてえいいに決まつていいのツ！－

放課後。

そこには、よく漫画とかにある光景が映つていて。

転校生を囲んでの質問責めだ。

よく見ると、悠斗も加わっている。

「スゲエ人気だな」

光輝が俺の所に近付いてきて、そう呟く。

「この学園への転校は珍しいのに、さらに一人とも可愛いからね。まさに、可愛いは正義だよ」

「……よく分からぬけど、確かに可愛いよね」

「ああ、俺の嫁だ」

「いやいや、せめて彼女でしょ」

彼女か……画面の中では沢山居るのにツ！

現実は厳しー（^v^）

もし、この世がゲームだったなら、現実では不可能なRepeat

を繰り返して、RewriteとRebuildを行って、必ず手にしてやるのにッ！

まあ、現実では告った事なんてないけどな。

「じゃあ、俺は部活があるから行くな

「おう！ 頑張れよ」

「ああ！ 近いうちに将棋リベンジするからな

「いつでもウエルカムさ」

「余裕ぶりやがって」

そう言い放つと、光輝は部屋を出ていった。

光輝は部活に入った為に、なかなか遊べなくなってしまった。

次遊ぶ時は、こっちが調整しないとな。

「恭介、今ケータイから楽曲を見てみたんだがな

今度は、拓夢が俺の前に現れて話し掛けてきた。

「どうだった？」

投稿から一日しか経っていないからな。

一万再生あれば、凄いんじゃないかな？

だが、流石に零という事はないとは思ひナビ、一桁にも届いてなかつたら泣くしかないな。

「なんと、十万再生だ」

……何。

十万再生だと……。

「……やつたな」

「ああー。」

つい、拓夢とハイタッチしてしまったね！

だって、そのくらい嬉しいんだよー！

後で、アイドルを囲んでる悠斗にも教えてやらないとな。

「三作目もよろしくな

「任せとおけー！ どんな歌詞だろうが、書いてみせるぜー。」

「頼んだぜ！ じゃあ、俺はテイルズの最新作を買いに行つてくるよ。予約してるから安心だぜ」

その後、拓夢は教室を出ていった。

テイルズシリーズか。

嫌いって言つ人もいるけど、俺は好きだぜ。

「恭ちゃん。聞いてもいい?」

光輝、拓夢に続いて、桜花が俺の前に現れた。

「どうした?」

「一体、何だらうか?」

「恭ちゃんは、転校生をどう思つ?」

「どうこのつ意味?」

「だから……その……可愛いくとか……」

「ああ、そういう事か。」

「もちろん、可愛いに決まってるじゃん! あの一人をブサイクと言つ奴はよほどの美的センスのない奴だと思つべ」

何度も言つが、結愛ちゃんと、理緒ちゃんは可愛い。

「……恭ちゃんは……ああこいつが……タイプ……なの……?」

「タイプ?」

そりやあ、勿論。

「ドストライクですとも」

当たり前の質問、愚問だね。

いや、俺以外の奴も同じ事を言ひださうぜ。

例え、美人派で巨乳派でお姉さん系がいこと言ひ俺と全ての反対の人が好みの奴でも、心搖らぐに違いない。

「そ……そんな……始末……きや……」

「ちよ！ オ、桜花っ！」

何か、分からぬが、桜花が走つて教室を出て行つてしまつた。

まあ、桜花なら大丈夫だろ？

俺は席を立つて、悠斗のもとへ向かう。

どうやら、優希ちゃんと香菜ちゃんはすでに教室を出たらしく、姿はない。

「ゆあゆあちゃん！ そ、サインくれないかな？」

俺が悠斗の所に来た事など悠斗は気付きもせず、結愛ちゃんに、サインをねだつてゐる。

「……」

だが、結愛ちゃんは無言だ。

「うひゅ、無視されっこなよつだな。

（ドンマイ）（ドンマイ）

「むあむあひやん……うひつむつから話してくわねーの?」

「……」

生徒の言葉に話題ちゃんは無言で、ただ教科書を抱いて話題へ。

「むあむあひやん」

「……なこで」

「え?」

「むあむあひやんとか言わないでー。気持け悪いーー。」

話題ちゃんのその言葉に、悠斗は勿論、周りの生徒も驚く。

勿論、俺も。

「……」

そして、話題ちゃんは、そのまま席を立つて、教室を出て行つてしまつた。

「……」

「うやうやしく、悠斗は放心状態のようだ。

悠斗だけではなく、他の生徒も放心状態のようだ。

そりやあ、大ファンの結愛ちゃんに「気持ち悪い」とか言われたんだから仕方ないな。

「なんだよ！ やっぱりアイドルって性格わりいな！」

そう言って、怒って出て行く生徒も多数いた。

「あの……」

そう呼ばれて俺は後ろを向く。

そこには、もう一人の転校生、理緒ちゃんがいた。

何だろ？

理緒ちゃんは、結愛ちゃんとは違ひ、いつもまで質問責めにたいして、ちゃんと受け答えしてた筈だ。

それを、押しきってまで、話しがけられる理由などない筈だが。

「なにかよう？」

「はい。この後、空いていますか？」

予定の事だらうか？

「どうしてそんな事を聞くんだ？」

「まあ、空いてるナビ」

「でも、後で屋上に来てください。では」

そう言ひて、理緒ちゃんは教室を後にする。

その後の事は思い出したくない。

簡単に言えば、男共にもみくちやにされたとだけ言つておひつ。

「どういう関係だ」とかの質問責め。

だが、この後の出来事に比べれば何て事もなかつた。

そう、命の危機に比べれば。

男共の襲撃の後、悠斗は何とか歩けるまでこま回復して、教室を出て行つた。

俺は約束通り、屋上を田指していた。

その時だつた。

「……」

「……」

偶然、結愛ひやんと遭遇した。

「……」

まあ、田中ひまつたし、無言は流石に嫌だつたので話し掛けた。

「……」

が、悠斗たちと回り返事はない。

「……結愛ひやんでいいかな？ 呼び方」

まあ、心せんせん無視されるんでショーナビ。

「いー」

だが、予想外に予想外。

向ひから返事が返ってきた。

だから、俺はやつさんの事を追及してみる事にした。

「じつじつわざ無視したんだ？」

「……」

また、無視ですか。

「……気持ち悪いからよ」

と、思つたら、ちやんと返事が返つてきた。

「気持ち悪い？」

「あああとか気持ち悪い？ 今まで仕事だからって我慢してたけどもう限界！ 私はてめえらのなんだって言つの！ 仕事だからお兄ちゃんとか言つてたけど、赤の他人だろ！ 駐れ駻れしくゆあゆあとか言つなつての！」

何か、スゲエぶつちやけられた。

うん。

ファンが、聞いたらスゲー悲しむんだろうな。

きっと、アイドルも大変なんだなー。

思つてる想像以上に。

「だから辞めて来たの。いちようは休みつて扱いだけど、もう戻るつもりなんてない。ここならアイドルに興味ある人は少ないって思つてたけど、結局同じね。もうあああとか呼ばないで！ 私は結愛。あああじゃない！」

そう言つて、結愛ちゃんは俺の横を通り過ぎて行つた。

なるほど、理由が分かつたよ。

アイドルを止めたから北海道に來た。

そして、天才校ならアイドルに興味ある人は確かに少ないだろ。

現に、さつきだって悠斗のよひに集まつてたのは十人程だ。

まあ、それが多いか少ないかはわからないが。

でも、理由が解けてスッキリしたぜ。

……俺は別にアイドルとか興味なかつたからアレだけじ、もし俺じやなく悠斗が聞いてたら、もう歩けないなこりやあ。

一二次元愛してて良かつた。

階段を上つて扉を開ける。

もしかしたら、優希すちゃんも居るんじゃないかとドキドキしたが、杞憂に終わった。

だつて、もしいたら、理緒ちゃんに煙草がバレるかも知れないからな。

「ちやんと、来てくれましたね」

理緒ちゃんが、コッちに向かつて話し掛けてくれる。

「そりやあ、来てくださいって言われたからな

「そりですね。あつがとうござります」

「で、何のようだ？」

屋上まで呼んだって事は、きっと他の人には聞かれない大事な用なのだろう。

初めて今日出会った俺に、そんな大事な用つて何だろうか？

「すいませんが、こちへ来ていただけますか？」

理緒ちゃんが待っている。

俺は理緒ちゃんのもとへ歩いていく。

そして、理緒ちゃんの隣にやつて来る。

「で、どうした？　俺に用なんだろう？」

「はい。あなたにしか出来ない用です」

俺にしか？

一体、どんな用だつて言うのだろうか？

「……」

理緒ちゃんが近づいてきて、

「……」

押された。

そして、俺は屋上から投げ出される。

そして、走馬灯を見て身体を赤色で染める。

「……っ」

もつ少しで、そんな事になっていた。

だが、一瞬の殺気に気付いたと言つか、感じて理緒ちゃんを避ける。

そのお陰で、死なずに済んだ。

てか、なになにっ！

どうこういひつけ！

俺、なんか殺されるまでの事、何かした！？

「……どうこういひつけ？」

俺はあくまで冷静を保って、理緒ちゃんに問いか質す。

「縁川恭介さん。死んでください」

直で「死んでください」「って言われたよ！

何で何だよ！

理緒ちゃんは何？

暗殺者とかでもやつてるの！？

「……そりゃあ、ビリーハー。」

「あなたが死んで、喜ぶ人が居るんですね」

ハア？

ホントに暗殺者とかやつてるの！？

もしくは何？

裏世界の人間ですか、理緒ちゃんは？

そんな、何の特徴もない普通の高校生のつもりの俺が、殺される程に誰かに恨まれる事などないと思つんだけど。

「なに？ 理緒ちゃんは暗殺者かなにかですか！？」

まあ、黙つていっても仕方ないので、素直に聞いてみる。

これが、悪い冗談ならいいんだけど。

理緒ちゃん、冗談とか言わなそつな子だしね。

いや、でも、やっぱ、殺される程に恨まれる筋合にはないよ。

絶対にッ！

ギャップ萌えになるから、「嘘つぴょーん」とか言つてよー理緒ちゃん……。

「そうですね。あなたにひとつ私はあなたの首を刈る死神ですね」

死神つて……。

「でも、避けてくれてよかつたです。凄く鈍感でそのまま死んでもらつては困りますか?」

殺そうとじといて、次は困るつて支離滅裂じやね?

つて事はわざと氣付かせたの?

よかつたー鈍感じやなくて。

「言つてることが分からないな。死んでとか言つておいて、死なれては困るとか」

「確かにそうですね。さつきのやり方で死なれては困ります。でも、死んで欲しい」

さつきのやり方で死なれては困る?

理緒ちゃんに押されて、屋上から落ちて死ぬのは困るつて事?

まさか、殺害方法も指定されているのかよ。

おいおい。

俺は全く憎まれる理由は思い付かないが、今やつてるエロゲーなら、身体を半分に切断して、姉妹をくつ付けて縫つたり？

え！？

そこまで俺は憎まれてるの！？

恨まれる事など、憎まれる事など、そりや、生きている間に衝突は何回もしてるけど、何度も言つが殺害される程の事はないと思つ。

俺はイジメとかしない奴だったからな。

「どんな残忍の方法で殺害するつもりだ？」

俺は、他人事のように喋る。

「殺害はしません」

は？

殺す殺す言つといて、意味分かんないんだけ。

「私はあなたに望むのは、自殺、して頂くことですけど」

自殺だと？

「あなたには自ら飛び降りて欲しいのです。さつきはいきなりでし
たから怖かったですよね？ でも、自分のタイミングでは怖くない
でしょ？ 少なくともさつきよりは」

いや、怖いって！

てか、それを思わず為に押したのかよ！

自ら飛び降りて死ねとか、ある意味殺されるより酷いね。」
「死ねと言われて「はい、そうですか」って死ねるかよ！

「イヤだ」

「分かってます。あなたは生きたいんですね」

「当たり前だ」

「私の目的はあなたを殺すこと。でも、殺害では喜ぶ人はいません。あなたが、この世界に見切りをつけ、自ら死んでこそ、喜ぶ人がいるのです」

それは、そいつはとてつもなくどうだな！

「俺は死なないからな」

そう言こきつて、俺は理緒ちゃんに背を向けて、階段へ向かう。

「死なせてあげますよ。それだけが私の……あの人の幸せですから」

と、後ろから声がしたが、無視！

……何で俺が殺されなくてはいけないんだよ！

何か、よくよく考えたらスゲエ苟ついてきた。

よしつ！

エロゲーすつか！！

選ばれたのは

様々な理由があるけれど

一番の理由は やっぱり

この世が 群像劇だから

願つたこと 祈つたこと

虹のよつな笑顔が

いつまでも いつまでも

隣に咲かぬつに

「当たり前のことだが、一様言つておひつ」

一時間目。

浜田先生の保健の授業だ。

浜田先生はそう前置きを置いて、喋りだした。

「射精が行われて、精子は卵子を目指す。精子は生まれながらに、生きるための方法、目的を知つてゐるわけだな。卵子への道のりは短いと思つたらそれは間違いだ。精子は小さい。全長は約五十μm だ。もちろん、肉眼ではまったく見ることが出来ない」

前置き通り、当たり前の事を浜田先生は喋つてゐる。

復習のつもりなのだろう。

まあ、万が一、忘れていたら、大変だからな。

だが、この天才校にその程度忘れてゐる奴は……。

「……」

何か、光輝が冷や汗出しながらガン見してゐるな。

もしかして……。

居たな。

忘れてた奴。

ま、度忘れなどよくある事ぞ。

俺も、度忘れが多くて、アルツハイマーかと、驚いたくらいだ。

あ、今は認知症か。

だから、無理矢理病院に連れていかれたしね。

結局、違つてほつとしたけどな。

「腔内に射精された精子は、卵子を目指してひたすら泳ぐ。そのルートは最短でも約十七センチ、人間で言えば、約六キロの距離に相当する。そこを約十時間以上かけて泳ぐ。ただし、道中の環境はとても過酷なため、ほとんどの精子は卵子のところまでたどり着くことが出来ない。まさに、サバイバルだな」

うん。

そして、精子は数日しか生きれない。

だから、辿り着く為に、精子は泳ぎ続けるんだな。

辿り着いても、受精出来るのは、最初に辿り着いた精子のみ。

レースして一位だけと言つ訳だな。

周りは全員敵……まさに、孤独のランナーだな。

「フェルマーの定理……深いな」

一時間目。

鈴木先生の社会の授業だ。

フェルマーの定理……

社会ではなく、数学で教わるものではないのだろつか？

まあ、いいけどね。

「うん。じゃあ、フェルマーの定理は置いといて……

置いとくのか。

なら、何故語った。

「チョリーパイの話でもしようつか

……。

「突っ込めよ！ 欧米かつて！？」

いや……。

つてか、本人たちも最近はあまり、欧米かつて言つてないぞ。

「敏彦なりやんと、歐米かつてシシコンドヘルの」「

いや、やつ言われても……。

なら、敏彦先生と漫才でも組めば良かったじゃん。

タカアンドトシならぬ、カズアンドトシにして、活動すれば良かったじゃん。

「まあいこよ。じゃあ、今日ままで一チパイについてだな……」

……。

「だから突っ込めよ！ 今日までもうアコヤが一ノ瀬一！」

その方が、勉強が捲る氣があるのは氣のせいだにいのかな？

「……仕方ない。では、オッパイの話でも

「……エロかー！」

見事にハモったね。

「ハハ……ハハ……」

鈴木先生、嬉しそのあまり泣こちやつたよ。

「世の中、パソコンはなくてはならないものです。昔は、これがマ

ウスですよー、鼠に似てますねーから入つてましたが、今はそんなことは省いても問題はないですね」

三時間目。

三浦先生の情報の授業だ。

鈴木先生のボケに突つ込む三浦先生だ。

実際に見た訳ではないけどね。

「では、今日から一学期の終わりまでゲームを作つて行きます。プログラミング言語は一般的なC言語を使用します」

ゲームは好きだぜ。

特にRPGは大好きだ。

テイルズシリーズ……まあ、正確にはテイルズオブシリーズか。

版権をテイルズウイーバーに取られたんだよな。

後、ファイアーエムブレムシリーズも好きだ。

よく、ファイアーエンブレムと間違えたもんだぜ。

間違いのエンブレムもファイヤーも版権は持つてるらしいけど。

そう考えると、RPGの代表作のDQとFFは全然やつた事ないな。

DOは、昔の携帯電話のアプリにDO~の前編が入っていたから、少しやつた程度だしね。

あ！

ゲーセンにあつた、百円入れて、カードが出てきて、剣を刺す奴は一回だけやつたな。

小学生の中に大人が一人居る光景は絵になるぜ。

恥ずかしいと言う絵がな。

俺なら絶対なれないね。

FFは、？を友達から借りてやつたくらいだな。

スクエーと言えば、DOやFFをよくリメイクとかしていると言つ印象しかないな。

スクエーのゲームってよくよく考えたら、買った事なかつたし。

ゲームより社長をリメイクしろと言つコメには笑つたけど。

あ、ゲームじゃないけど、ガンガンコミックスの漫画買つてるから、貢いじやつているな。

……打ち切りされたけど。

ふざけるなスクエー！

「では、左上にあるアイコンをクリックしてくれ」

先生の指示通り、左上にあるアイコンをクリックすると、英語の文字列が表示される。

俺、英語苦手なんだよな。

まあ、プログラム作った人が、外国人だから仕方ないけど。

「まずはちょっと練習でP.S3に登場する猫、トロを出現させてみて下さい」

えーと。

```
Load("A", "Toro", ...);
```

よし、キャラクターが表示されたぜ。

「みんな出たかな？ 今日から一人一人にゲームを作つて貰う。作り方は一学期に教えた通りだ。ジャンルは何でもいいが、一学期中に終わるよう」「

どんなゲームを作ろうか？

シナリオを考えなくっちゃな。

「より、高度なゲームを作りたいなら、友達とチームを組んで作つてもいいぞ」

高度なゲームを作ろう。

みんなが神ゲーと称えるような、な。

「じゃあ、ジャンルはテイルズ作品のようなRPGか、Key作品のような泣きゲーのどちらかと言ひ事で、いいな？」

「あ

「あ

「いい

「はい、です

「恭ちゃんがいいなら、私はいいよ

四時間目授業も終わり、今は昼食だ。

俺は、光輝、拓夢、悠斗、優希ちゃん、桜花と一緒にゲームを作ることとなり、ジャンルを決めていた。

香菜ちゃんにも誘ったのだが、断られてしまった。

「やつぱり、優希ちゃんが居るからだらうつか？」

だが、俺は後で首を縦に振るまで誘つてしまつた。

迷惑かもしれないが、それが俺が出来る最初の一歩だと思っているから。

「インフレーション理論によれば宇宙の膨張は光のスピードを超えて加速していくわけだが、光より速く遠ざかる物体という運動は物質は光の速さを超えないとする相対論と矛盾するか恭介、答えてみよ」

五時間目。

担任の智夜先生の数学の授業だ。

俺は、智夜先生に指名されたので、席を立ち答えた。

「相対論とは矛盾しない。なぜなら物体は周りを取り巻く空間に対し相対的に静止しており、光より速く膨張するようになるのは空間そのものってことだ」

完璧な返答をしたぜ。

「うん。 その通り。 流石は…… 天才校に入っただけはありますね

えへへ。

「では、続きをやります」

六時間目。

正治先生の国語の授業だ。

「では続きを……結愛ちゃん。読んでくれ」

「はい」

指名された結愛ちゃんは席を立ち、音読み始めた。

「さて、私は差別について書いたが、それは一例だ。何故差別が起ころのか、それは価値観が違うからだ。もし、君の友達がオタクでファイギュアを集めていたら、そして君がオタクを気持ち悪いと思つていたらどうだろうか?」

「ファイギュアか……。

「そう言ひえば、俺はファイギュアは集めた事がなかつたな。

「ファイギュアは一・五次元だと昔、誰かが言つてたな。

「友達からすれば、ファイギュアは宝物だらう。だが、君にしたらただのガラクタでしかない。これが、価値観の違いだ」

「俺はガラクタとは思わないぞ。

「もつと簡単に言ひえば、好きなものと嫌いなもの。それは人によつて違う。贊否両論と言ひ言葉があるが、これこそまさに、価値観の相違だと言えるだらう」

「終わった……」

六時間目が終わり、今日の授業は全て終了した。

ふと、香菜ちやんの席を見るが、香菜ちやんはすでに教室を去った後のことだ。

「恭介さん……」

顔を前に戻すと、わいこは優希ちやんが居た。

「ん？ どうした？」

「……お姉ちやんを誘うんですか？」

「ああ、やのつもつだ」

「……了解してくれるのでしょうか？」

「じっくりれるまで、粘るださそ」

首を縦に振ってくれるまでな。

「……優希はお姉ちやんに避かれちゃってから、怖くなつて自分からも避けるよつになつてきました」

「……やうか

「はい。でも、優希はまたお姉ちやんと仲良くなつたいたいです。だから優希も頑張ります！」

「ああ

「やつと、今優希がお姉ちゃんと会つても、何も話してくれないと思こますです。だから、優希とお姉ちゃんを繋ぐ架け橋となつて下れこですつー。」

「任せとく」

優希ちやんと話した後、俺は教室を後にして、香菜ひやんが団塊への道を指す。われる演劇部を田指す。

が、途中、悠斗に遭遇する。

「よー、どーこくんだ?」

何処に行くのかと、聞かれたので、

「演劇部」

と、返した。

「それはまたなん? また黒歴史でも刻むのか?」

それはもう、忘れてくれ……。

「違うよ。香菜ちやんを誘つんだ」

「ゲーム制作に?」

「ああ」

「頑張ってね」

と、言われた時、俺のポケットから一円玉が落ちた。

前に、お釣りをポケットに入れて、そのままにしてたのを忘れてたぜ。

「あ……」

一円玉は転がって、悠斗の足元で止まる。

「落とすなよ。一円でもお金なんだからな。一円を笑うと一円に泣くよ」

セツナヒヒ、悠斗は一円玉を拾つて渡してくれた。

「サンキュー」

俺は再び一円玉をポケットへ入れる。

「ちゃんと、財布に入れないとまた落とすよ」

ぶつちやけ、一円程度なんだよな。

俺の場合。

「残念ながら財布は寮だし、よかつたらあげようかってみた。

ま、悠斗も興らな「だらつたび」一円を力説するからそれで言つてみた。

「マジ? いいの? ありがと」

何か、めっちゃ、喜ばれた。

「じやあ、はー」

俺は一円玉を悠斗に渡す。

「あっがとうね」

一円玉で、そんなに喜ぶとは、悠斗は将来、お金に困らないな。

「ここのよ。じや」

「うふ。じや」

悠斗と別れた俺は、漸く演劇部へ辿り着いた。

「……」

だが、今は入れば演劇部の迷惑になるところに来て、そう思って至り、部活の終了時間まで、待つ事にした。

終了時間までは、まだ数時間ある為、俺は情報室でゲームの企画書、プロジェクトを制作する事にした。

まあ、簡単にだけどな。

現在、午後の五時五十分。

部活の終了時間は、午後六時。

「やうそりだな

俺はパソコンで制作した企画書を印刷して、演劇部へと向かった。

「……」

「……」

その道程の途中、今度は理緒ちゃんと出くわした。

昨日、俺は理緒ちゃんに屋上に呼び出されて、自殺しようと囁かれた。

可愛いけど、何考えてるか、分からぬ奴だぜ。

「ひなばんは

黙つていろと、理緒ちゃんの方から話しつけてきた。

うん。

屋上での出来事がなければ、礼儀正しく可愛い子なの。

「ああ

一様、返答する。

挨拶されているのに、無言なのは流石に悪いからね。

「どうですか？ と、聞いても無駄ですね」

質問に自分で答えを出すと、理緒ひやんは去つていった。

「……」

俺は目的地、演劇部へと足を動かした。

「六時……よし、いいな」

俺は部活が終わる時間になつた事を携帯電話で確認すると、演劇部の扉をノックした。

扉をノックした。

大事な事だから一回言いました。

ちゃんと、礼儀を弁えているんだぜ。

「……」

だが、返事がない。

尻になつていろいろ事は、ゲームじゃないんだからな」と思つたび。

「ああっー」

気付いてしまった。

いや、気付かなかつた。

本日、休部の看板が掲げられていた事に。

まさに、やつちまつたなあと状態だぜ。

「クソ…… バーニー……」

演劇部に居ないとなると、もつ何処にいるか分からぬ。

もし、寮に居るなり、入る事も出来ない。

完全に詰んだ。

ツンテレだ！

あ、詰んだ出れないの方ね。

「……あー」

また、気付いてしまつた。

電話すればいい事に。

前に、カラオケの件の時に交換した事を忘れていた。

「……」

俺は携帯電話を開き、リストにある、竹達香菜を選択して、通話ボタンを押す。

呼び出している。

プルルルル……

呼び出し音が俺を焦らす。

十数秒の呼び出し音の後、遂に繋がった。

『なに？』

「話があるんだけど、会えない？」

『今、言えばいいじやん』

『もつともで。

でも、それではダメだ。

俺は口先の魔術師ではないから、電話ではきっと、了解を得られないと。

『会つて話したいんだ』

だから、会つて強引にでも首を縦に振るわせるつもりだ。

『……わかったわ。どこに行けばいいの？』

よしー。

第一関門は突破だ！

「学校の屋上で待ってる」

『……わかった』

そう言って、電話は切れた。

携帯電話をポケットにしまつと、俺は屋上へ歩き出す。

「なんですか？ 屋上に呼び出しじ

「好きだ」

「通報しました」

「変質者じゃないよ俺！」

「冗談言つたために呼び出したんだから、死ね

死ねとはビデッ！

俺、泣いちゃうよッ！

(トロト)えーん！

「こや、ぶつかりやけ、付き合へるなんなら仕合いたいよ。香菜ひや
んは可憐いじ」

「え……。べ、べつに警められても嬉しくなんかないんだからねつ
！」

か、可憐い……。

お持ひ帰りい！

「……おっと、本当に犯罪者になるとひだつた

「……」

ひい！

睨まれたよ！

「で、わざわざ屋上に呼び出しつて、本当の理由は？」

それは勿論、君を誘う為了だから、屋上を選んだのは優秀な香菜ひやんがよ
く使つてこいる屋上こそ、相思したこと強つたからだ。

煙草を吸つ為だけどな。

まあ、香菜ひやんがそれを知つてゐるかは不明だけどな。

それに、口口は誓つた場所だから。

「誘つためだ」

「……それま、断つたはずだナビ

「エーハッシュ?」

「何でもここでしょ?」

「優希ちやんまだない

「……」

香菜ちやんが黙る。

やつぱり、優希ちやんが原因ひこな。

「どうして優希ちやんを無視するんだ?」

「……何でもいいでしょ? — アンタには関係ないーー。」

関係ない?

それ違うよ、香菜ちやん。

「関係ない」とないよ。俺は優希ちやんといいで誓つた。君と優希ちやんを繋げる架け橋になんと

「ハア? 意味わかんないんだだけエ」

香菜ちやんは溜め息を吐く。

「だから俺は手始めとして、君をチームに入れやる」

優希ちやんは勇気を出すと言つた。

だから、俺はその手助けをする。

そう、誓つたのだから。

「…………当事者でもないのに…………部外者は黙つてればいいのよつ……」

つ！

今までも、怒鳴られた事は何回かあった。

でも、今回は、今まで一番本気で怒っている事が空気が読めない奴だつて分かるだろ？

「……」

香菜ちやんが、俺に背を向けて階段の方へ向かつ。

「あ……」

なのに、声がない。

「ゴメン、優希ちやん……。」

詰んだ……無理だった。

その時、

「お姉ちやんがひー。」

廊上の影に隠れていた優希ひちやんが姿を現す。

「な……。」

驚きを表情を隠せないでいる香菜ひきとみ、優希ひちやんの方に顔を向け、硬直してこる。

俺も驚いている。

あつと、間抜けな表情をしていただろう。

ビハビハ、ヒヒヒ。

偶然ヒヒヒして、すりて隠れていたの？

「お姉ちやん……。」

「……。」

「優希は……何か、お姉ちやんの気に触るこじましたのじょうか」

優希ひちやんの瞳から綺麗な粒が溢れる。

見るとい、足が震えている。

怖いんだろう、拒絶される事が。

「…………そんな」と…………ない……」

優希ちゅうやんの言葉にて、めいじちないが確かに香菜ちゅうやは否定した。

「では…………なんで…………ですか…………？」

優希ちゅうやんが、やつ香菜ちゅうやん…………姉に、腹飯を出して聞く。

「…………」

だが、勇氣を出せたのは近方だけだった。

「…………分かったわ。恭介、チームに入るわ。それでいいでしょっー。」

そつ言い放つと、走つて階段を降りて行つてしまつた。

「…………やつぱり」

「優希ちゅうやん。そんなことはない。ちゅうやんと、否定してくれたじゃないか」

「…………はい」

「…………ってか、『ゴメンな。あんな見栄張つたのに、優希ちゅうやんが偶然屋上に居なきや、止められなかつた』

「そんなことはないです。恭介さんちゅうやんと架け橋になつてくれましたです。お姉ちゅうやんを『』まで連れてきてくれたです」

え？

「偶々居たんじやないのか？」

俺がそつぱつと、優希ちゃんは首をかしげた。

「何言つてるんですか？ 教室での会話で架け橋になつてください
と言つたじやないですか？ つまり、屋上まで連れてきてください
と言つ意味だったんですが……伝わらなかつたですか？」

はい。

伝わらませたでした。

屋上に呼び出されなきゃ、優希ちゃんをずっと、待たせる事になつて
たば。

来る筈のない姉を待つて……。

チユツ

「え？」

頬に柔らかい何かが当たる感触がした。

「えへへ、お礼です！」

やつぱりと、優希ちゃんも走つて階段を降りて行ってしまった。

頬を擦つてみる。

きっと、今の俺の顔は、誰もが引く笑みをしているのだろう。

理由は勿論。

優希ちゃんが、可愛いから。

俺は思った。

三次元も素晴らしいと…

Chapter 6 シンヒュ（後書き）

交差点ですれ違った

全ての欠片には

それぞれに歩むべき道

辿り着く終着点がある

何もないなら

それでも よかつた

だけど 何でもあるから

砂の城は波に消えていく

Chapter 7 鈍いのではない、経験がないだけ

「九月か……」

俺は携帯電話の待受画面を見て、そう呟いた。

何故なら、今田から九月だから。

内地……本州なら、八月末迄休みなんだろうから、今日から学校に「だりー」とか言いながら行くんだろうが、北海道の夏休みは八月半ばで終わるからな……。

その分、冬休みが本州より多いからいいけどね。

まあ、休みの日には、北海道でも本州でも同じ五十日と決まっているんだが。

何か、九月始めになると、何で昨日、勉強を受けに行つてなかつたの。うと考へてしまつた。

小学生の時は、そんなの知らないから何とも思つてなかつたのに。

ただ、本州の人たちより早く、八月半ばで学校行きたくない病が始まるだけで。

この学園に通つてゐる生徒でそんな事を考へてゐるのは、多分俺だけだと思つけどな。

まあ、九月かと意識した理由はもう一個あるんだけどな。

「……よく考えれば、北海道を出たことなかつたな」

俺は、そんな事を思い出しながら、携帯電話を弄つて、ブックマークから自分のサイト……ブログを開く。

そして、簡単ログインをクリックして、携帯製造番号を送信して、作者画面に入つて作詞を始める。

テーマは、昨日授業中に閃いた奴を採用。

まあ、テーマは出来ていても、頭の中の想像物……映像を文字に変換するのは結構難しく、打つては消して、打つては消しての繰り返し。

いつもの作詞作業となんら変わらない。

たまに、一発ですんなり、スラスラと書ける時もあるけどね。

‘オタク パラダイス’は、その例だね。

やっぱ、モテルが居ると、書きやすい。

あんまりぎりぎりつづけると、範囲が絞まつて余計書けなくなるから、程々がいいけど。

ピンポーン

部屋のブザーがなつた。

「どうやら、桜花が迎えに来てくれたらしいな。

「今行へ」

そう扉へ……実際にはその後ろに居る桜花へ話し掛ける。

そして、忘れ物がない事を確認して、扉を開ける。

「おはよっ。恭ちゃん」

桜花が俺へ、いつもと変わらず挨拶をしてくる。

「ああ、おはよっ」

だから、俺も返事をして、一緒に並んで歩く。

ぶつぶつやけ、めひめひ恥ずかしいんだけどね。

寮の奴は、上級生も含めてからかってくるし。

俺は桜花の彼女じゃねーよ。

ただの幼馴染なのにな。

桜花だって、迷惑していると黙つからホント止めて頂きたい。

「ん？ どうしかな？ 恭ちゃん？」

「え？ い、いやー、な、なんでもない」

俺は意識せずに桜花の顔を見ていた事に桜花の言葉で気付き、慌てて繕つた。

今日は、九月一日……もつすぐ、桜花の誕生日。

小学生の時は、特別プレゼントをあげた記憶はないが、今回は折角だし、サプライズで渡そつかなと思ったのが、九月を意識したもう一個の理由だ。

「いきなりだが、もうすぐ学祭だ」

担任の智夜先生の言葉にクラス中がざわめく。

ざわ……ざわ……。

なんて擬音は現実には聞こえないが。

まあ、天才校である葉鍵学園の数少ない遊びのイベントだからな。

みんな楽しみなんだろ。

中には、遊びなんて不要だとか思つている奴も少なからず居るだろうが。

俺は、あつて嬉しい。

天才にだつて、休養はいると俺は思ひね。

嫌だつて思つ自分も少なからずいるけどね。

「でだ。知つてゐると思うが、葉鍵学園は必ずクラスで何か出し物をしなければならない」

葉鍵学園は、と言つてはいるけど、大体の学校はそつだと思つので、そんなに特別な事ではない。

ただ、問題は……。

「出し物を何にするかは、後でアンケートをとるから」

担任の智夜先生はそれだけ言つと、遂に問題の言葉を綴つた。

「で、次だ。クラス全員がペアを組んで漫才をしてもらひ

これが、問題一。

何でも、創立した時から続く伝統らしい。

何故、漫才が伝統になつたかは知らないけど。

しかも、プロの芸人が来て採点までしてくれる涙が出る仕様だ。

「最後に、男子代表五名と、女子代表五名は

言わなくとも分かっている。

問題一。

男子は女装、女子は男装しなくてはならない。

他の学校でも、女装や男装はあるだろ？が、殆どの学校はやりたい奴だけの自由参加だろ？

だが、この学園は、やりたい奴がいなくても、必ずクラスから男女五名ずつ出場しなくてはならない。

体育館の舞台で、全校生徒が見ている中で男子は女装を、女子は男装をしないとならない。

これは恥ずかしい……。

選ばれた女子生徒は、水着コンテストもしなければならないから、女子よりは気が軽いかもしけないが、女装だけで何か大切なものを失うのは確定だ。

バンドとかは自由参加なのに、漫才とコレだけは強制参加なのだ。

生徒会の決めたイベントにも強制参加だが、そつちは毎年大した事はないので、別に大丈夫だろ？

「つてなわけで、まずは女装、男装する奴を決める。やりたい奴はいるか？」

智夜先生が挙手を求めるが、当然の如く

「　「　……」「　」

誰も、手を挙げたりはしなかった。

「どううな

智夜先生も、こうなる事が予想付いていた様な反応を見せる。

「では、ジャンケンだな」

ジャンケンだと……！

慌てるな俺……当たり前だが選ばれる確率は、選ばれない確率より
断然低い。

大丈夫……大丈夫……。

漫才はみんなやるから、諦めも付くし、どうせ大体のペアはしつん
となるんだろうから、そんなに嫌ではない。

嫌ではあるけどね。

白けるのが分かっているのに、舞台にあがるなんて、公開処刑以外
の何物でもない。

でも、みんなやるから、諦めは付く。

だが、女装は別だ。

恥ずかしいし、人生の黒歴史になる事はまず間違いない。

そんなものに出たくなど当然ない！

だから、俺は勝つ！

大丈夫……アイドルグループのメンバーが、センターを獲得する為にジャンケンをして、見事センターを獲得する確率よりは、確かに高い確率で選ばれてしまう。

だけど、大丈夫だ、問題ない。

Aクラスの生徒は全員で四十四名。

その内、男子生徒は二十一名。

選ばれる確率は、クラスの男子生徒二十一名の中の五人。

つまり、二十一分の五。

四人に一人当たってしまう計算だ。

「……」

そう考えてしまうと、かなりの高確率だ。

でも、確かに宝くじとかに比べるのならかなりの高確率だが、選ばれる確率は、選ばれない確率を下回る。

四人中、三人は外れるのだから。

まあ、実際にこの確率論は使えないが、選ばれる確率より、選ばれない確率の方が高い。

大丈夫だ、問題ない……。

そう、大丈夫だ、問題ない

「……」

大丈夫では……なかつた。

選ばれてしまつた……。

まさか、こんなに俺がジャンケンに弱いとは……。

いや、焦つて深読みし過ぎたのかもしれない。

俺の精神力は、どこかの王様のよう、「豆腐メンタル」のようだ。

でも、気は少し晴れた。

何故なら……。

「じゃあ、出でもらいうのは、恭介、光輝、悠斗、拓夢、智紀、桜花、
優希、香菜、結愛、理緒に決まった」

そう。

光輝たちも一緒に出る事になつたから。

クラス全員、……と言つても、選ばれてしまつた俺たち以外が拍手をしてくる。

安堵しながら拍手をしている奴、憐れみの目を向けながら拍手をしながらしている奴等バラバラだが、みんな選ばれなくて良かつたと心から思つてゐる事だけは、心が読めない俺だつて分かる。

拍手が、生け贋を差し出す儀式に感じるぜ。

つてか、俺たちみんなジャンケン弱いんだね……。

そのお陰で、発狂しなくて済みそうだが。

「……」

「？ ……どうかしましたか？」

そつと、田の前に座る理緒ちゃんが頭を傾げる。

「いや、まだか理緒けやんとペアになるなんてな、と思つただけだ」

女装なんかしなくてはならなくなつて気が参つてゐるの、次の漫才のペアを籤引きで決める事になり、その結果、理緒ちゃんとになつてしまつた。

いや、別に理緒ちゃんが嫌いな訳では断じてない。

ぶつむやけるなら、可憐にし、嬉しい。

だが、それは前の屋上での件がなければの話だ。

屋上での件があるから、嬉しがつてもいられない。

またいつ、殺されかけるか、分からぬし。

「別に殺しませんよ」

理緒ちゃんは、俺の心でも読んだみたいに、そう俺に返してくれる。

「私がして欲しいのは、望むのは、自殺、であつて、‘他殺’や、
事故死、ではありますん」

そう、話を続けた。

周りのクラスメイトにも理解ちゃんの声は届いてはいるはずだが、
漫才のネタ合わせだとでも思っているんだろう。

ツッコミをくれたのは、誰もいなかつた。

「はい。そろそろ時間だから、話し合には放課後にして、席に着いてくれ

智夜先生の命令圖に、クラス全員が席へと戻る。

「では最後だ。うちのクラスの出し物を決める

出し物か……もつ向でもいいよ。

女装に比べたら、もう向だつてするや。

智夜先生が、生徒に小さい紙を渡し始めた。

「それに、自分がやりたい出し物を書いてくれ

前の席の生徒から送られてきた紙を受け取り、一枚を自分のテープルに置いて、残りを後ろの席の生徒に渡す。

「多数決にするつもりだから、そのつもりでな

多数決か……なら、フザケて書いてもいいだろ。」

多数決なら、フザケて書いたものが当たる確率なんて、それこそ歴史の選ばれてしまふ確率よりも低いから。

「よしー。」

俺は書いた。

「コスプレ喫茶」と

放課後、俺は談話室に部活のやつていない悠斗と拓夢の一人を連れだしやつてきた。

「何だ？ ゲームのことなら全員が揃っているときに決めた方がいいんじゃないのか？」

「でも、部活もあるから、全員が揃えるのは土日だけだよ？ 平日じゃ、六時からになるし」

拓夢の提案に悠斗が返事を返す。

明確には言つてはいないが、その言葉には否定が入っている。

悠斗は、俺だけで決めてもいいと思つてこるようだな。

「別に六時からでもいいだろ」

拓夢が喰いかかる。

「それは、そうだけど……」

悠斗が折れる。

拓夢はみんなで決めたいんだな……。

「なら話は终わりだな。俺はゲーム……じゃなく、ちょっと用事が
あつて……」

と思つたけど、違つたみたいだ。

拓夢は単に話を早く切り上げて、ゲームをしたいだけだ。

「実は……」

でも、今回悠斗と拓夢を誘つて談話室に呼んだのは、ゲームではない事を告げる。

「違つのか？ じゃあ、他になにがあるの？」

「用がなかつたら呼ばないって」

「……そうだな」

俺の言葉に拓夢が賛成する。

拓夢は早く切り上げたいみたいだ。

「どんなやうなの？」

悠斗が聞く準備が出来てないのだ。

「もうすぐ九月五日だが、五日は桜花の誕生日なんだ

俺は拓夢と悠斗を連れ出した理由を述べる。

「せうなんだ……なんかプレゼントしないとな」

拓夢は誕生日だと分かると、せうきよつけは帰りたい症候群から抜け出したみたいだ。

「僕もプレゼント用意するよ」

悠斗もプレゼントを用意してくれると喜んでくれた。

「ありがとう。実は俺もプレゼントを渡したいんだが、なにを渡せばいいのか分からなくてさ」

「ああ……お前、そういうの钝感覺だもんな

俺の言葉に拓夢が何か納得している。

別に鈍い気なんかないんだけどね。

ただ、確かに女子にプレゼントなんて渡した記憶がなく、何を渡したらいいか分からぬから、アドバイスを聞こうと思つて一人を連れ出しただけだ。

つまり、鈍いのではなく、経験がないだけ。

俺は凄いテクニシャン……嘘です、すいません。

ただの、草食系男子です。

「プレゼントは気持ちが込もつていたら、なんだつて嬉しいと思うよ？」

悠斗のアドバイス……気持ち。

なるほど、物ではなく、気持ちか……なるほど。

「だからって要らない物を贈つても邪魔になるだけだよ

確かに……拓夢の言つ事にも一理ある。

「やっぱ、桜花の好きな物でいいんじゃね」

拓夢のアドバイス……桜花の好きな物。

なるほど、好きな物を貰つて嬉しくないはずはないからな。

「まあ、不安なら他の奴に聞いてみたらどうだ？」

そうだな……。

六時過ぎ。

— 恽介？ どうしたんだ？」

ケテヤントでサッカリの部活が終わってた直後の光輝に尋ねた。

「さうか、桜花が……」

たへて、西山にはかにかいにかくからなかへて

「やへたなあ……キイ、キイ、女中ちりむき女中立體くのか一羅シヤ
ね?」

光輝のアドバイス……女子に聞く

なるほど、確かに女子の方が好きな物を知っている可能性が高い。

俺にアクセサリーとかぬいぐるみって言われても、よく分からぬ
しね。

「なるほど、参考にあらむ」

「おひー！俺もプレゼントするから、被るなよ」

俺は光輝に手を降り、別れた。

「プレゼントですか？」

俺はゲーム部にやつてきた。

優希ちゃんに意見を聞く為だ。

「うん。ってか、ゲーム部ってなにやつているの？」

こんな部活が、部活として成り立つのだらうか？

いや、もしかしたら、凄い何か……。そう何か世間に貢献しているのかもしぬないし、ゲーム部と言つ名前だけで判断するのはいけない事だ。

それこそ、オタク差別と何も変わらない。

「見てみますですか？ もう、誰も居ないので入つても大丈夫ですよ？」

「そう？ それじゃあ、お邪魔されようかな」

俺は優希ちゃんの好意を有り難く受け取り、部屋に入つてみた。

「おお」

無意識に声が漏れたね。

「どうですか？ まさに地上最後の楽園ですっ」

優希ちゃんが力説するのも頷ける。

部室は決して広いとは言えない……いや、パソコン等の機材があるから狭く見えるだけで、実際には教室くらいはありそなうだが。

中には、あらゆるゲーム機が置いてあった。

Wiiやファミリーコンピューター、メガドライブ等のゲームをしない人でも知っている有名なゲーム機から、ビデオカセットディ・ロックやカセットビジョン、ピュウ太等のマイナーなゲーム機もある。

「すうい……」

まさに、楽園！

ヤベホ、入りたくなつてきた……。

「しかもですっ！ なんとゲーム開発も可能なのですっ！ 授業のゲーム開発など田じやないのですっ！」

「……」

圧巻だった。

確かに、ここはパラダイスだ。

部室が輝いて見えるぜ。

「……あ

「どうしかしましたか？」

俺の眩暈で、優希ちゃんはおもとことじてこちらを見ていた。

「圧巻をされて居たのと同じだった。プレゼントの話で来たんだよ」
すっかり、ゲーム部が羨ましくて居られる所……いや、実際に居れてたが。

「ゴメン桜花……不覚にも俺の頭が、ゲーム 桜花になつてたよ。

「やひぱつ、ヨウ」ですか……是非、モードルに……」

「こやこやー あげるの桜花だからー そんなのあげられないよ
！」

「……やつでした。確かに優希の誕生日は、八月十八日でしたです

八月十八日……もう、過ぎてしまったのか……。

「悪いな、祝つてやれなくて。知つていれば、プレゼントを贈つた
んだが」

「べ、別にいいです」

優希ちゃん……やっぱ、いい奴だなあ。

来年こそは必ずプレゼントを渡そ。

香菜ちやん「でも、一人一緒に。」

「プレゼント……健全な女子ならアクセサリーとかが、いいんじゃないですか？」

「優希ちやん……自分が健全じゃないと自覚あるんだ……。」

「アクセサリーなら、当たり外れないと悪いりますです」

「優希ちやんのアドバイス……アクセサリー。」

「なるほど、確かにアクセサリーなら、当たり外れはないか……。」

「ありがとうございます。参考にするよ」

「はい」

「はあ？」

優希ちやんと別れた俺は、部室から帰宅途中の香菜ちやんに出会つ。

まあ、実際には待ち伏せしてたんだけど。

「プレゼント? なにがいいかな?」

「……」

香菜ちやん……機嫌悪いみたいだ。

「なんか……俺、悪いことしちゃった?」

「そんなことないわ。あたしが、自分自身が悪いだけよ。オーディション落ちたの」

あー……カラオケの時の、落ちてしまつたんだ……。

「プレゼントだっけ? そうね。あんたを裸体にして、リボン巻いて、自分がプレゼントだつて贈つたら?」

香菜ちゃんのアドバイス……俺が裸体になつてリボン巻いて……。

なるほど、……つて。

「却下だああああつー!」

叫んだね!

何だよ、Hロゲーの女の子みたいな事はツ!

「嘘よ。叫ばないで頂戴……本人に聞けばいいじゃない。今は、本人に好きな物を聞くつて普通よ?」

そつなんだ……。

「よし! 分かった、ありがとつ

「ふん……」

香菜ちゃんが、帰路に着いたとき、歩を出したので、背中に向かって一言、

「来年は、お祝いするから」

と書いて、俺も歩き出した。

後ろから、「ふああ…………ありがとう…………」と小さく聞こえたが、恐らく氣のせいだら。

「さよ、さよ、恭ちゃん！ プレゼントつけてー。」

「ああ、桜花の誕生日にサプライズプレゼントするから、好きな物……」

気付いてしまった……。

サプライズプレゼント……本人に聞いたら、無意味じゃないか！

俺、馬鹿だ……。

いや、仕方ない……。

やつ、仕方ない……。

いつの間に俺はアレなんだ。

鈍いのではない、経験がないだけ。

知りたくないから

幸せでいたいから

僕は 行動を起こした

扉に鍵を掛けた

Chapter 8 プレゼント（前書き）

僕に贈られたプレゼント

それに僕は気付けなくて

こんなに近くにいるのに

ああ 僕は盲目の少年

Chapter 8 プレゼント

「九月四日……」

俺は数日前のよつに携帯電話の待ち受け画面を見ながらそつ呟いた。

いよいよ明日は桜花の誕生日だ。

本当ならサプライズプレゼントのはずだったが、経験がないばかりにみんなにプレゼントは何がいいのかを聞いているうちに、経験がないばかりに本人に、桜花にも聞いてしまった。

……まあ、香菜ちゃんのアドバイスを実行しただけだから、俺の過失……ミスでは断じてない。

結局、ばれたのでサプライズではなくなってしまったが、みんなもプレゼントを用意して一緒にすることになった。

一緒に祝うつてだけで、プレゼントをみんなも用意している事は言つてないけど。

桜花は「そんなん悪いよ」とか「気持ちだけでうれしいから」と謙遜していたが、無理矢理押し通した。

だが、桜花にサプライズプレゼントがばれる原因となつた香菜ちゃんのアドバイスは失敗したと言わざるを得ないだろつ。

何故なら、桜花にプレゼント何がいいかと聞いても、「恭ちゃんの選んでくれるものならなんでもうれしいから……」と言つて、教え

てくれないからだ。

いつもから余り主張しない桜花の性格が裏田に出てしまったと言つていい。

余り主張しないなら優希ちゃんもそつだが、優希ちゃんはアツチ系になると饒舌になるからな……。

「桜花にもそつこいつもの、あるのかな……」

そんな事を考へてみると、またいつものように、扉を叩く音が聞こえた。

噂すればなんとかいつて奴だな。

「恭ひやん、起きあがみへ。」

「ああ。今、行く」

あー、フレゼンバーグ……向としてでも今日中に聞かせ出せないと、間に合わない。

店の時間もあるから今日の午後六時がタイムリミットだ。

今は七時三十五分。

扉を開けたり、田の前に居る敵と勝負だ。

必ず、勝利してやるが。

俺は決意を胸に扉を開けた。

「おはよつ恭ちゃん」

桜花の笑顔が現れた。

ミッションスタートだ！

残り時間 十時二十五分四十九秒

一時間目。

「では、続きからだ。ページを開け」

浜田先生の保健の授業だ。

……授業中には桜花にプレゼントは何がいいか、聞き出す事が出来ない。

かなりのタイムロスになる。

「く……」

授業は六時間目であり、一時間分の授業は五十分……これは、十分休憩もアタックしないと厳しいな。

まさか、授業中にメールを送るなんて芸当は俺には出来ないし、万が一にも先生にバレたら携帯電話は放課後まで没収されてしまう。

もし、俺ではなく桜花がバレたら迷惑以外の何物でもない。

「人体における全水分量はビツになつてゐるか……理緒、答えてみよ」

浜田先生に描かれた理緒ちゃんは、席を立ち答える。

「男性六十%、女性五十%、乳児七十五%です」

「正解だ」

理緒ちゃんは難なく、完璧に答えて席に座る。

よく考へると、席立つて外したらめつちや恥ずかしいな。

「では正常血圧値を、光輝答えろ」

「えー、えつと……」

指名された光輝は席を立つが、理緒ちゃんと違に直ぐには答へず、考へている。

「どうした? 」Jの程度、常識ではないか

いや、常識ではないと思つが……案外知らない人も多いんぢやね?

「確か……最高値百三十三mmHg未満、最低値八十五mmHg未満
だつける」

光輝は自信なさげに答える。

「なぜ疑問系なんだ。並んではいるがな」

「よかつた……」

光輝は安堵して席に座る。

「じゃあ次は

」

キンゴーンカンゴーン

ずっと聞き慣れているチャイムがなつた。

ゲームじゃないんだから、チャイムの音がどんどん歪んでいつたりはしない。

やつと、一時間田が終わった。

だが、漸く本番だ。

「よしー。」

俺は桜花と戦う為、勢いよく席を立つた……立つたはずなのに、その勢いはすぐに収まる事になってしまった。

「恭介、お前はどんなプレゼントにしたんだ?」

今からそれを決めようと出陣しようとしていたのに、それを殺した光輝が話し掛けてくる。

「貴様が……プレゼントを遠退かしたんじゃあー。」

「うおー、どうしたんだよー!？」

「……間違えて、笑らわれればいいのに」

「リアルトーンでヒドツ！」

そう言って、光輝は自分の席に戻つていった。

キンコーンカンコーン

「チツ……時間か……」

残り時間 八時一分三十三秒

一時間目。

「数学を始める。教科書を開いてくれ」

担任の智夜先生による数学の授業だ。

「微分・積分の問題だ。 $\cos(x) dx$ を、では恭介、求めよ

……あ、俺が呼ばれたのか。

俺は席を立ち答える。

「sin(X)+C」

「正解だ」

よし！

俺は心の中でガツツポーズを決め、席に座る。

間違つたら恥ずかしいもんな。

まあ、女装に比べれば何ともないが。

「あ、そうそう。クラスの出し物が決まった

決まつたんだ……俺は何て書いたんだっけ？

……あ、コスプレ喫茶だ……今思つと先生見たんだよな……恥ずかしいぜ。

名前を書いた訳じゃないから、自分でってバレないのが唯一の救いだな。

「多数決の結果、コスプレ喫茶になつた」

「「「……」「」」

え……。

クラス中が静寂に包まれた。

いや、授業中に喋っている奴なんていないからもとから静かではあるんだけど……その、なんだ、凍り付いた静寂つて言つか……そんなものだ。

「……どうした？ 半数以上がコスプレ喫茶をやりたいのだひつへ。先生としては同じ趣味を持つことほっこりだと思つや」

「」「」「……」「」「」

半数以上って……俺はふざけて書いただけなのに……マジかよ……。

キンゴーンカンゴーン

先生の衝撃的な発言からあつとこつ間に時は流れ、再び十分休みとなつた。

動搖してばかりはいられない。

俺には時間がないからな。

俺は勢いよく席を立ち上がる……はずだった。

「なあ……恭介、話があるんだ」

「拓夢……」

「え？ なんで睨んでるのー？」

「別に、睨んでねえよ。で、なんのよつ?」

「いやいや、明らかに睨んでるだろ」

しつけな……。

「睨んでないーャン! そんなことないピヨン! なんのよつで!」
わすか?」

「……まあ、スルーをせてもうつよ。昼食の時に話すよ、じゅ」

そいつ聞いて、拓夢は自分の席に戻つて行つた。

キンゴーンカンゴーン

「……」

また、ダメだつた……。

でも、まだチャンスはある!

アクティブに考えるならまだ、一回邪魔が入つて失敗しただけで、
まだ一回以上出陣するチャンスが残つていてる。

大丈夫だ、問題ない。

残り時間 六時五十九分五十二秒

二時間目。

「パソコンはみんな立ち上げましたか？」

敏彦先生による情報の授業だ。

「では、ゲームを開始してください」

お、そうだ！

ゲーム制作なら、同じグループの桜花に近付ける。

好きな物を聞き出すチャンスだ！

「よし……」

俺は席を立とうとした瞬間、敏彦先生の非情な宣言が。

「なあ、グループを作っている人もいるでしょうが、今日は自分が作った企画を書いてもらおうので、自分の席でお願いします」

なに一つ！

自分の席でじやあ、近付けないじやないか。

「く……」

俺は仕方なく、企画書の作成に乗り出す。

「グループで作る人は企画書に、その胸を書いといてください」

昨日、みんなと話しあつて結局、KeY作品のような泣きゲーを作ることになった。

まあ、読みゲーになるから文章量は増えるだろうが、比較的簡単に出来るので、質の良い物が完成出来ると見込んでの事だ。

悠斗が作ればプロ顔負けのCGが作れるだろうし、拓夢が作ればネットで神曲と呼ばれるようなBGMを作れるだろうしね。

キンコーンカンコーン

よし！

今回こそは桜花のもとへと行へど、俺は席を立つ……立つたのだが……。

「……」

非常にトイレに行きたい。

ああー、今日は一時間目も二時間目も邪魔が入つて動けなかつたら、トイレにも行つていなかつた。

「……」

桜花は自分の席にいる……居るけど……

俺は……向かつた。

トイレへ。

大丈夫だ、昼休みに話し掛ければ問題ない。

キンローンカンローン

残り時間 六時零分八秒

四時間目。

「国語を始めますよ」

正治先生による国語の授業だ。

では前回の続きから誰かに読んでもいいよしそうかな」

正治先生はそう言うと、生徒たちを見渡す。

一瞬、先生と目が合つた気がしたが、当てられた事はなくほつとす
る。

別に、当てられても困る事はないけど、やっぱり朗読はちょっと恥ずかしかったりする。

間違える事はないだろ？ けど、噛んでしまつたりしたら赤面だね。

「じゃあ……智紀くんに読んでもいいつかな」

「はい……」

呼ばれた智紀は、俺たちとは別に仲が良い訳ではないが、一つ共通点がある。

何を隠そう俺たちと同じ、黒歴史……女装しなければならないメンバーに選ばれた憐れな一人だ。

智紀は席を立つて、朗読をし始めた。

「さて、前の章で私は価値観の相違についての例をあげた。では

「

キンコーンカンコーン

四時間目の授業が終わった。

昼休みだ……つまり、漸く接触のチャンスが生まれた訳だ。

「何食べるんですか？」

そう言って、優希ちゃんが俺が持っている食券を覗いてくる。

「牛丼、玉ねぎ抜き

「玉ねぎ、嫌いなんですか？」

「嫌いだね」

「その気持ち、分かるぜ」

拓夢が俺の言葉に入ってきて、賛成してくれる。

「やっぱ、野菜は邪道だ。野菜は身体に良いって言つけど、別に食わなくとも死なねえし！ プロスポーツ選手だつて偏食でも活躍している人もいるし、声優だつて偏食でも活躍している人もいるんだから！」

「うん……別に野菜全てが嫌いな訳でもないんだけど……まあ、好きではないけどね。」

「ほひ、リオンだつて野菜嫌いだけど、人気じやん」

「一次元キャラを一緒にしなくても……絶対野菜嫌いは関係ないと思うよ？」

大体は見た目と声優のお陰なのだと思いますが。

「そういえば、桜花は？」

周りを見渡しても、桜花が居ない事に気付く。

いつもみんなと一緒に食べている訳ではないが、桜花とは絶対一緒に食べていたのだが……。

「桜花？ 桜花なら用事があつて、今日は来ないらしいよ」

なん……だと……。

それでは、欲しいプレゼントを聞けないじゃないか。
それでは、欲しいプレゼントを聞けないじゃないか。

……大事な事なので、一回書きました。

「……」

何でようつにょつて今日と明日の日を残なつんだよ……。

あー、時間だけが、無情にて、非情に過ぎて行く……。

結局、俺は拓夢と優希ちゃんと二人で昼食をとつてこる。

「恭介さん！ 拓夢さん！」

いきなり、優希ちゃんが俺と拓夢の名前を呼んだ。

「な、なに？」

「どうした？」

俺と拓夢は吃驚しながらも、優希ちゃんの方を見て、優希ちゃんの言葉を待つ。

「恭介さんと拓夢さんさ、一回動で投稿して凄い再生数跨つてます
ねつ」

「聞いたの？」

「はい！ いい曲だと思いますです！」

「そうか……ふふ」

拓夢が喜ぶ。

コメントで「好きだ」とか書かれていても、やっぱりいつやって実際に言われる方が断然嬉しいね。

「そこ」で……相談なんんですけど……」

優希ちゃんが相談……何だらうか？

「二人を題材とした同人誌を描かせて貰えませんか？」

「同人誌？」

拓夢が首を傾げる。

同人誌……アレだろ、コミケとかで売られてる……え？

「優希ちゃんは同人誌描いてるの？」

「はいですっ！ 優希はコミケで同人誌を売っているのです

マジか……絶対人混みとか苦手そうなのに。

つてか、行つた事ないから詳しくは知らないけど、めっちゃくっち

や暑いらしいね。

熱氣で。

でもまあ、一度くらいは行つて見たいものだな。

オタクの端くれとして。

「なんで俺らの同人誌を？」

「人気Pだからじゃないですかっ！ しかも一人でっ！」

「……」

ん……何か、嫌な予感がブンブンとするんだが。

「その二人が一生懸命熱く、時にぶつかり、抱擁しながらも、一緒に作りあげる……素晴らしいじゃないですかっ！」

優希ちゃんが目を輝かせながら語る。

「……」

拓夢が呆気にとられている。

そう言えば、優希ちゃんが腐女子だつて知つてるのは、俺と悠斗だけだつたな。

「で、どっちが攻めでどっちが受けなんですかっ？」

優希ちゃんが質問責めをしてくる。

攻めとか受けつて……メイド喫茶で悠斗と決闘してた時の攻めと受けつて、あの時はじつちが攻撃側か守備側かって事かと思つていたけど、違つたんだ……。

「……優希つて、二重人格？」

拓夢が戸惑つていた。

「優希ちゃん。俺たちを同人誌に載せるのは、やめてもらひえるかな？」

俺がそつまつと、優希ちゃんは凄く残念そつて引き下がつてくれた。

「一回押は回こと思つたのに……残念です」

「……そつだ、拓夢。なんか、俺に話があるんじやなかつたっけ？」

「ああ、そつそつ。忘れてたよ」

忘れてたのかよー

拓夢が話し掛けて来なかつたら、桜花に接触出来たのにー！

あ……一様後でメールしとくかな。

じつせ、無駄だらうけだ。

「楽曲のことだけじや……」

「楽曲？ 三作目行く？ 今作ってるのはまだ完成しないから、昔作った奴でよければ……」

「三作目も出したいけど、違うよ」

「じゃあ、なに？」

「俺らの楽曲をカラオケに配信したい」

「……な、に……。」

「マジで？」

「マジで」

「素晴らしい提案だと思いますです！」

「でも確かに……カラオケ配信されれば印税がどっかんどっかん付いてくる」

歌われば歌われる程、金が降つてくるーー！

「恭介さん。残念ですけど、印税は入ってきませんです」

「なん……だと……」

「大体のことはもう聞いてませんです。恭介さんたちがもういる確率はないに等しいです」

「マジで」

「マジです」

……まあ、入るかどうかはも分かんねえけど、取り敢えずリクエストだけはしてみる事にした。

どうなるかは分からぬけどね。

残り時間 四時一十九分三十三秒

昼休みが終わり、午後の授業……も流れ星のように流れて終わった。

結局、話し掛けれずにな。

メールの返信は着たけど、やつぱりの文面だったし。

「……ここからが勝負か」

残り時間は、約三時間三十分。

聞き出すには十分な量が残つてゐる。

明日と言う大切な日に、俺だけ何も準備しない訳にはいかない。

何としても聞き出さなければ……。

「よし!」

今度こそと、俺は桜花の方を見るが、桜花はすでに居なかつた。
いつもなら、向こうから来てくれるのだが、今日に限つてなかなか会
えない。

朝の迎えに来てくれた時は、教えてくれなかつたし……。

だが、必ず聞き出して見せる！

俺は席を立ち、桜花を探し始めた。

残り時間 零時十七分四秒

「……」

一言で言ひなら、桜花が見つからない。

そのまま、質のない時間だけが、無情にて、非情に流れていく。

電話をしても、メールをしても返信が来ない。

「…………」

本当にどうして……いつもなら、呼び出したらすぐ出てくれるのに、
に、今日に限つて俺を焦らす。

「ねえねえ。ちょっと……」

俺が意氣消沈して廊下に寄り掛かっていると、香菜ちゃんが話し掛けてくる。

「なに？」

「あんた……プレゼントは置いたの？」

「まだ……」

「なにやつてるのー、バカじやなーのーー。」

「いや……『メン』

何か……押されて謝ってしまった。

「せ、早く話しかけてきなよ」

「あ、ああ……でも……」

その桜花が見つからないんだよ。

「まさかと思つたけど桜花がどこにいるか、知らないわけじゃないよ
ね？」

「……知つてゐるの？」

俺の言葉に香菜ちゃんが呆れたように溜め息を吐く。

「はあ……こーい？ 桜花はクラス委員長よ？ 知らないわけないよ

ね？」

クラス委員長？

あ……セーフティエスコットだつたな……すっかり忘れてたよ。

「ちよつと、会議も終わつた頃じゃない？ 呼び出しておこてあげるから、屋上に行きなさい」

「あ……あつがと」

「べ、別に……たいしたことじやないわ」

残り時間 零時六分四十一秒

「……相変わらず、綺麗な景色だな……」

会議か……だからメールも電話も通じなかつた訳か……桜花は礼儀正しいからな、マナーモードじゃなく電源自体を落としているんだろ？。

……香菜ちゃん……俺がプレゼントまだだつて気付いて話し掛けてくれたのかな……。

ガチャ

「恭ちゃん……」

俺が考へていりうつむき、屋上に桜花がやつて來た。

「桜花……」

「恭ちゃん、話つてなに?」

「プレゼントの」となんだけ……」

「プレゼントなんてそんな悪こつて。本當に貯持ちだけで嬉しいか
「ひ

まあ、その返事は予想済みや。

だから、今日は違つて一手を打つて、見事桜花を討ち果たそうと思つ。

「実は……みんなもプレゼントを用意してくれていいんだ」

「ええー!？」

俺の言葉に桜花は驚く。

今だ! 意義有り的な勢いで押しきるー

「だから……俺だけ渡さないわけにはいかない。ね? 俺を助ける
と思って欲しいもの教えて?」

「……」

桜花が口ごもる。

そして、暫しの静寂の後、桜花が口を開く。

「本当に、その気持ちだけで嬉しいんだよ？」

それじゃあ、意味ないと喧嘩をしたが、先に桜花がまた文字を紡ぐ。

「だつて、私にとつては本当に今、この時間こそがプレゼントみたいなもので……恭ちゃんと一緒にいれるだけで、本当に本当に嬉しい、それ以上なんて要らないよ……」

「桜花……」

「それ以上はもう我が儘になる

我が儘なんて……ただ、俺と居るだけでいいなんて……。

本当に桜花は、いい奴だなあ……。

「でも、明日は鼓動が始まった口、じやん。その口ぐらには子供みたいに我が儘になつてもいいと思つよ」「みつ」

「じゃあ、今日は我が儘は言えないの？」

「えー？ いや……」

俺がテンパると、桜花は笑いだした。

「ふふ。じゃあ、恭ちゃんに甘えて今だけ我が儘になるね」

「お、なにがいい？」

「今度……今度でいいから、一緒に水族館に行きたいな」

「そんなことでいいなら、もちろんオバだよ」

俺は桜花にそう呟く。

「嬉しく……」

「ミッションクリア！」

残り時間 零時零分零秒

「景色、綺麗だな」

「ホント……昔みたい……」

俺たちは暫く、屋上からの景色を眺めていた。

Chapter 8 プrezent（後書き）

大人になれる場所

綺麗な景色が見える場所

僕だけのモノだから

証を建てよう

二人の間の中で

腕を引っ張られて

一人は腕を放して

一人は腕を切り落とす

Chapter 9 一人

今日は狭間の日だ。

一週間前には桜花の誕生日と言いつ、大きなビッグイベントの日があった。

そんなビッグイベントも無事成功し、一息つけると思つたら大間違いだ。

一週間後には学祭と言いつ、またまた大きなビッグイベントが待つている。

俺の生涯の黒歴史になるであろう、女装と言いつ公開処刑の日が。

『大丈夫だよ～お兄ちゃんなら絶対大丈夫っ～』

目の前に居る、俺の妹が応援してくれる。

まあ、俺の声は届かないんだけどね。

俺と妹の間には次元と言う壁が存在していて、誠に残念ながら、その存在を見る事しか出来ない。

あー、タイムマシンで未来に行けたなら、二次元へのパスポートとか売つてないかな……なんて夢見ながら、俺はマウスをクリックした。

『絶対っ！ お兄ちゃんは笑われるよ～！』

そりですねっ！

笑われると俺も思つよ……嘲笑の意味でねっ！

「……妹が悪いんじやない。妹は応援してくれているんだから。違う意味で」

悪いのはそり、全てシナリオライターのせいに決まつてている。

『高く高く、手を伸ばしたら、お兄ちゃんなら星だつて掴めるよつ』

いやいや、無理だから。

例え、東京タワーから手を伸ばしても届かないって。

まあ、単なる比喩表現なんだろつけど。

「星……夢の跡地……」

『お兄ちゃんつー！ 頑張つてね』

ああ、妹よ、任せとおけ。

……俺と心境が被るから、感情移入しやすいと思つて買ったけど、実際どうすべきかな、漫才……。

『行つてらっしゃい』

このゲームの主人公恭介が可愛い妹の見送りを背に玄関の扉を開け

る。

すると、家の門の所に、三人の少女が待っていた。

『さ、恭介さんっ！ わ、私を相方に選んでくださいっ！』

そう言つて最初に口を開いたのは、左に居る眼鏡を掛けたいつも大
人しい図書委員……と言つ設定の同級生だ。

『恭介先輩 うちと一緒に漫才せえへん？ てか、しましょ～』

そう言つて次に口を開いたのは……まあ、CGだから口動いてない
けど……右に居る髪をポニー テールにしていつも元気な一年後輩の
少女だ。

『べ、べつに嬉しくなんかないんだけどっ！ 仕方ないからアタシ
が特別に相方になつてあげるわ！ 感謝しなさいっ！』

そう言つて最後に口を開いたのは、真ん中に居る勝ち気な……テン
プレ的なツンデレの幼馴染みだ。

……つわ、選択肢が出た。

- ・ 同級生と漫才をする
- ・ 後輩と漫才をする
- ・ 幼馴染みと漫才をする

「……」

羨ましいけど、漫才大会当日に相方を選ぶのはどうよ？

『お兄ちゃん！ いたつ！ よかつた……』

『アレ？

さつきまで玄関で見送りをしてくれていた可愛い妹が外にまで出て来てくれた。

わざわざなんだらう？

『はいお兄ちゃん。お弁当忘れてたよ』

そう言つて天使の笑顔でお弁当を渡してくれた。

マジ天使や……リアルで居ないのがめっちゃ残念だ（涙）。

「……」

あー、俺、理緒ちゃんとだもんなあ……真面目そうな理緒ちゃんとな、正担当才かな……それともギャップを狙つて理緒ちゃんには犠牲になつて貰おうか？

俺を殺そつと……死んで欲しいと望んでこる罰としては、そのくらいは許されるべきだ。

『早く選びなさいよつー』

『恭介さん……お願いしますつー』

『恭介先輩 ついと一緒に頑張る？』

考えに耽つていたら、ゲームに催促されてしまつた。

つてか、選択肢を押さないでいると台詞吐くんだ……知らなかつた。

「……押さなかつたら、他の台詞も吐くのかな？」

と思い至つた俺は、敢えて選択肢をクリックしないで放置してみる。

すると

『まさか、寝落ちじゃないでしょうねー。』

幼馴染みに怒られてしまつた。

と言つたが、ゲーム内的には朝なのだから、完全にメタ発言じゃない
イカ？

おっと、ツッコミを入れたら、イカ娘みたいな語尾になつてしまつ
たでゲソ。

『分かつていて思つんやけど、この作品の登場人物はすべて十八
歳以上やで』

……じゃあ後輩よ、お前は留年してるんか？

『早く選べよチキン野郎！』

つ！

絶対お前そんな事言つキャリじゃないじゃん！

制作者の遊び心つて怖いぜ。

『グフフ……早く押すんだね』

つー？

だ、誰だ！？

誰の声なんだ……！」の気持ち悪いキモオタのよつな声はー！

制作者の遊び心と喧嘩の悪戯か？

いや……制作者からの「早く選べよ、クソ野郎」と心の声だろ
う。

「……」

まあ、これ以上待つのはなんか怖いので素直に真ん中のキャラクタ
ーを選んだ。

『ア、アタシ？……ありが……当然よねー』

勿論、当然だよ。

俺は眼鏡に萌えないで論外だし、元気な女の子は嫌いじゃないけ
ど、シンデレには勝てないに決まっている。

でも、属性の頂点はヤンデレに決まっているけど。

そつと言えば、CGには映つてないけど、主人公の後ろに妹が居るんだよな？

ずっと天使の笑顔で、この長い沈黙を見ているのかな？

リアルだつたら絶対に「早く行けよ、『ミミカス』と心の中で思われてしまうんだろうな。

一次元のキャラクターに心がなくてよかつたぜ。

『つ……』

あ、同級生が目頭に涙を浮かべながら走つてどつか行つてしまつた。

『まあ、恭介先輩がうちを選ばないのは、分かっていたんですけど、やつぱ諦めきれなくて……し、幸せにな』

後輩も走つてどつかに行つてしまつた。

「グフフ……」

あ……キモオタのよつた台詞を吐いてしまつた……誰も聞いてなくてよかつたぜ。

一次元へ声が届かないつて、いつもは悲しいけど……万が一、もし聞こえていたのならどうなるんだろうか？

一次元の彼女がもしも、もしも「いつの世界を見る事が出来たなら彼氏の顔とか見て、「下手こいたー」とか言うのかな？

まあ、俺はブサイクじゃないから、「下手にこたー」とせざわせねえよ！

パソコン

桜花が来たようだな。

俺はパソコンの電源を落とし、玄関へと向かつ。

あ……セーブしてねえ！

「……下手にこたー」

昼休み。

俺は今、更衣室に居る。

理由は泣きたくなる程、簡単だ。

服装の寸法があつてゐるかどつかの確認である。

当たり前だが、男子用の更衣室だから女子は居ない。

まあ、隣に壁の奥には居るんだけどな。

「チツ……なんで僕がこんな屈辱的なことをしなければならない

そう俺たちの気持ちを代弁して口に出したのは、同じクラスの被害

者の一人“陣内智紀”。

「やつだよなー。はあ……まったく一週後が辛いぜ……」

光輝がそつ吐くと溜め息を吐いた。

「僕なんて考えるだけで高熱で倒れそつだよ」

悠斗はそつ言いながら、制服を脱いでいく。

あー、女の子だつたら間違いなくCG有りの萌えシーンになるんだ
るつなー。

「いや、実際高熱に魔された方がマシかもしねえぜ？ そしたら、
学祭は寝てるだけでいいんだからな。それで、気が付いたら黒歴史
は他の生徒が犠牲になつてくれてるわ」

確かに……高熱出たなら、ルート分岐出来るかもな。

夢覚めたら、なにもなく、まるで悪い夢だつたみたい」。

「まつたく……学祭なんて僕は要らないと想つね」

智紀が愚痴を吐く。

学祭……選ばれなかつたなら、めつちやめつちや楽しめたんだろう
けど、女装している奴を嘲笑つて……本当に当事者になつて分かる
つて奴だな……本人たちはこんなにも辛いつて。

「まあ、負けたんだから仕方ないよ。諦めきれないけど、諦めて晒

し者のモルモットを演じよ! づぜ

俺は嘲笑氣味にそう呟きながら、俺用に用意された服を意を決して袖を通した。

「大体、なんでこんなことをしなくてはならないんだ！ 僕の人生の汚点にしかならない！」

うん。

それには、素直に賛成だよ。

「人の価値は頭なんだ。どれだけ賢いか、知力があるか。こんなことは腕力しか脳のない塵芥にでもやらせておけばいいものを……。それこそ、嘲笑つてやつたものを！ 無能にはそんなバカなことがお似合いとねつ！」

智紀が力説している。

人の価値は知力か……どうなんだろ？

そんなはずないとと思う自分と、そうだとと思う自分が居るな。

まあ、どっちにしろ……女装しなければならない事に変わりはないんだけどな。

「はあ……」

寸法はあつてゐるみたいで、ピッタリだつた。

「コスプレする人たちによく恥ずかしくないな

不意に光輝が、独り言のよつよつ呟いた。

「確かに、コスプレイヤーの人たちのことなんてなんとも思つていなかつたけど、今なら良くてテレビに姿を映せたと賞賛を贈りたいね」

「だな。俺なら恥ずかしくて、例え普通の姿でも避けちゃうな」

拓夢の言葉に俺はそう返事した。

今思えば、凄い勇気の持ち主たちだぜ。

無謀とも思える絶対似合わないアニメキャラクター やゲームキャラクターのコスプレをして、堂々と人前に出る事が恥ずかしくないのはマジでスゲェとしか言ひようがない。

寧ろ、見せびらかしているさまは最早、神の所業！

心臓に毛が百本……いや、百兆本は刺さつていっても決して可笑しくなど断じてないし、寧ろ当然と驚かないくらいだ。

「まつたく……ブフッ」

「おこー……ひー」

ヤバい……吐き気ついた。

キメエ！

友達を見てキメハとか思つのは、友達として失格だと思つけど、これは仕方ないって！

「……メイドガイ？」

「悠斗！ それ禁句！」

「あ……ゴメン」

ダメだ！

誰の目も見れねえよ！

見たら、笑つてしまつ！

みんなも同じらしく、ロッカーを見ている。

「……ってか、ちょっとといいか？」

目を合わせないで、ロッカーに向けたまま、光輝が話し掛けってきた。

「どうした？」

「クラスの出し物、ゴスプレ喫茶だよな？ まさかとは思つけど、クラスでもこの格好じゃないよな？」

「 「 「 「 「

長い沈黙が訪れる。

「だ、大丈夫だつて！ 誰もメイドガイなんて見たくないんだからさ！ 男子は男子のコスプレだよ！」

そんな沈黙を破つて、悠斗が声を発する。

その声は震えている。

「やうだな！ やうに決まつていい！」

拓夢が悠斗に賛同し、みんなも賛成し始める。

‘ そうだ’ ではなく、‘ そうであつて欲しい’ と言ひの意味で、願望が入つてゐるが。

だつて、この女装は……言わなくとも分かると思つが、一言で表すならこの言葉がやはりピッタリだつ。

黒歴史

午後の授業……五時間田は、情報だ。

「さて、じゃあ一週間ぶりの授業ですが、今日から本格的に作業に入つてもらいます」

敏彦先生が話している。

「では、席を移動して構わないでの制作を開始してください」

漸く、ゲーム作りが、紙の上から画面の中へ移行する時がやつてき

た。

昼休みの事を忘れる為にも集中しなければ。

「……」

そんな事を考へていると、メンバーアリのみんなが、俺の席へとやつてくる。

なんか、知らない間にリーダーにされていたんだよな……拓夢は策士だよ、まったく。

お前は作曲だろ。

心中で「あ、今俺、上手い」と言つた」と思いつつ、みんなで周りの席をくつけて、それぞれパソコンを立ち上げる。

「じゃあ、始めようか」

一様は俺がリーダーなので、リーダーらしく、開始の宣言を行つ。

だが、みんな手が動く事はなく、光輝が「リーダー、何すればいいですか~」と意地悪っぽく言つてくる。

確かに、KeY作品のよつな泣きゲーを制作する事には決ましたが、シナリオやキャラクター等は全く出来ていなかつた。

「……下手こいたー」

「ふざけてるの」

香菜ちゃんに睨まれちゃったよ（ ）！

「決して心からだけではございませんー。」

「ぐ、別にそこまで力説しなくともいいわよ……」

じつや、香菜ちゃんに俺の誠意が伝わったみたいだ。

「ぐ、実際じつかんだ？」

拓夢め……俺に責任を任せ、逃げやがってー。

「恭ちゃん何でも言つてこよ。私、頑張るから」

桜花は本当にいい奴だな。

そんな桜花に好きな奴が居るかは分からぬけど、もし西野ならち
いつがめつちや羨ましいぜー。

まあ、それはわいねがするか……。

ゲームに必要なのは、シナリオとグラフィックとサウンドだ。

少なくとも、この原則が出来ていなければ、何も始まらない。

「じゃあ、とりあえず拓夢には」

ゲームなら、いやリアルでも重要な選択肢だ。

- ・シナリオを頼む
 - ・グラフィックを頼む
 - ・サウンドを頼む

間違えたら、
い。 駄作……クソゲーになつてしまつのは、
まず間違いな

さて、拓夢に頼むのは

歌入りのは後で一緒に制作するとして、拓夢には作曲の力をフルに活用してもらって、BGMを手掛けてもらう事にしよう。

「BGMを頼むよ」

「全部神曲にしてやる。」

「分かつたよ。残り一つは良曲にしよう」

まあ、一つも神曲にしろとか、残り一つはとか、色々シッコリビン
るはあるけど、とうあえずは……。

「じやあ、悠斗は

「え！
スルー！？」

拓夢が何かほざいていたけど無視！

- ## ・シナリオを頼む

- ・グラフィックを頼む
- ・サウンドを頼む

サウンドは拓夢に頼んだから、悠斗には神の腕を見込んで

「キャラクターを描いてくれ」

「いいナビ……どんなキャラ描けばいいの?」

た、確かに……サウンドとは違つて細かく決めてじやなれば、最悪使えなくなつてしまつ。

「まあ、それは後で決めよつ。今は、背景を描いてくれ。学校を中心」

「分かったよ」

よしー。

背景で学校なら、キャラクターとは違い癖がないから、多少はイメージが違つても使う事が出来るし、普通のさえ描いてくれれば大丈夫だ。

いや、悠斗の腕なら普通なんかじゃないか。

「最後にシナリオは……」

- ・優希ちゃんに頼む
- ・香菜ちゃんに頼む
- ・桜花に頼む

・光輝に頼む

「ワクワクテカテカ」

「優希ちやんは……ないとして」

「じつじですかっ……」

優希ちやんが珍しく、声を張り上げて抗議してくれる。

「うん……その声も新鮮で可愛い。」

チヤラ男風に言つながら「君、かわつこいね～」かな。

ま、関係ないけど。

「優希ちやん。どんなシナリオを書いてつもつ？」

「やつですね。まずは主人公の男性にあると、実の兄を名乗るイケメンが現れるんですね？」

優希ちやんが力説しているけど……やつぱり、嫌な予感が……。

「そして許されざるフォーリング！」

あー、やつぱり……だから、ダメなんだよ。

「じつですかー！ ネット上では神と呼ばれる優希のシナリオは？」

うん。

きっと、真冬ちゃんが実在したら、優希ちゃん見たいな人になるんだろうな……。

「ダメ

「どうしてですかー。」

「優希ちゃんのシナリオは乙女ゲーのシナリオなんだよ」

「どうしてダメですかー？」

優希ちゃんが上田遣いで見つめてくる。

ヤベホ、変わった声の芸人みたく「いいよーーー」と言つたくなつてしまつた。

が、口を固く閉じてベッド我慢する。

「……仕方ないですね」

我慢していると、優希ちゃんが折れてくれた。

良かつた良かつた。

優希ちゃんがダメとなると、次の選択肢は

- ・ 優希ちゃんに頼む (NG)
- ・ 香菜ちゃんに頼む
- ・ 桜花に頼む

・光輝に頼む

一番上はNGだったから

「香菜ちゃんできる?」

香菜ちゃんなら、台本とかで色々なシナリオとか見ていてるだらうし、適任だと思うのだが。

「そんなのやつたことないんだから、分かるわけないじゃない!
あんたバカじゃないの? 死ぬの?」

「いやいや! 死なねえから! まあ、とりあえず書いてきてよ

「し、仕方ないわね……」

それでシナリオは大丈夫……ではないな。

シナリオは一人に付き、一つのシナリオを担当してより深いシナリオを書いてもらおう。

- ・優希ちゃんに頼む (NG)
- ・香菜ちゃんに頼む (OK)
- ・桜花に頼む
- ・光輝に頼む

優希ちゃんはダメで、香菜ちゃんは大丈夫と……。

姉妹なのに、二人は右端と左端に座つている。

」のゲームが完成している頃には、姉妹揃って隣の席に座れているといいな。

「桜花はできる?」

「わかったよ。恭ちゃんが望むものを書いてみせるよ」

「頼もしい」

「えへへ」

- ・優希ちゃんに頼む（NG）
- ・香菜ちゃんに頼む（OK）
- ・桜花に頼む（OK）
- ・光輝に頼む

えーと、最後は唯一まだ余っている……残っている

「光輝も作ってきなね」

「俺だけなんで命令形なんだよ!」

光輝がなんかわめいているけど無視!

「よし、後は俺もシナリオ書けば……」

「あの……優希は何をすればいいのですか?」

あ……忘れてた。

「優希ちゅあさんはプログラマやつよ。パソコン得意でしょ~。」

「わかつたです」

よしー。

これで完璧

「ちゅうとこい?」

「どうしたの香菜ちゃん?」

「シナリオって言つたつて、全体の構図とか、キャラクターとか分かんないと書けないわよ」

た、確かに……。

「下手こいたー」

「うーー」

なんか、魔女の惨劇が起こりそつた作品に登場するキャラクターの口癖みたくなつてしまつたが、別に真似した訳ではない。

前の授業で香菜ちゃんに殴られた後頭部が痛くて、唸つてただけさ。

「はい席に着いてくれ」

担任の智夜先生がそう言いながら教室に現れる。

だが、この六時間目の授業は数学ではない。

一週間後に迫った学祭に向けて、漫才のネタを作る時間である。

「漫才の前に報告がある。気付いている者もいるかもしれないが、女子生徒一名が転校した」

「え……言われて席を見てみると、確かに空席となっていた。

意外と、気付かないものだなあ。

まあ、人の目は節穴つてよく言つしね。

「で、その一人の漫才の相方は、もう片方の転校した相の方の方と組んでくれ」

ま、普通に考えたら、それが妥当だな。

わざわざ、全員をまたシャッフルするのは面倒だしね。

「転校した相方の生徒は立つてくれ」

「そう担任に言われて立つたのは

「……」

「……」

俺の友達の姉妹だった。

真ん中を通して

二人は出会った

一人は笑つて

一人は泣いた

約束は破るためにある

誰の言葉だつただろうか？

ああ そつだつた

弱い者の言い訳だつた

「はあ……」

俺は溜め息を吐いた。

理由は言わずもがな。

明日はビッグイベント……学祭の事だ。

学祭の事を考へると、それだけで辛い。

本当に、氷風呂にでも浸かって、高熱でもだそうかな。

それもかなり辛いだろうけれど。

肉体的な苦痛か、精神的な苦痛か……。

「はあ……」

俺は再び溜め息を吐いた。

『どうしたの？ 考えごとく？』

幼馴染みが心配してくれる。

違う次元の住人だが。

「現実逃避はやめたりどうでしょうか？」

そつ俺に話しかけてきたのは、隣に居るリアル住人の理緒ちゃん。

「べ、べつに現実逃避なんかしてないんだからねつ！ 勘違いするなよなーー！」

俺はそつ言にながら、携帯ゲーム機の電源を切つて、ポケットへしまう。

勿論、セーブ済みだ。

もつ、下手はこかねえぜー！

「せつかく、個室が『えらべて』いるんです。さつそとやつちやいまじゅう

「誰も殺さねえよー！」

「何、言つているんですか？ バカなの？ 死ぬの？」

「死なねえよー！」

「やる」というのは、殺める事じゃなく、勿論、アツチの事でもない事は分かっていたが、理緒ちゃんが「やる」というと、どうしても屋上での出来事が脳内再生されるんだよ。

つまりは

「悪いのは、理緒ちゃんだよ」

「？ 何が悪いのかは分かりかねますが、とりあえずすいません」

なんか、大人の対応された！

謝られたら、こいつが悪いみたいじゃないか！

「……」めん

「？ デリして謝るんですか？」

「気にしないで」

うん。

「気にしないで、本来の「やる」の意味を全うしよう。

その為に、クラス全員に個室が与えられているのだから。

「じゃあ、漫才の練習でもするか」

「？ 私は最初からやつていていますが？」

「……」

「ううですね！」

「でも、いいんですか？ 漫才のネタ、まだ完成してませんよ？」

「そうですね！」

「分かっているぞ。一時間目にネタを完成させ、一時間目にネタの練習をすれば、三時間目からのクラスの出し物のセッティングに余裕で間に合つぜ」

俺はそう言い放ち、理緒ちゃんに親指を立てて見せた。

「ふ……決まつていいぜ！」

「今日までずっと、ネタが作れていないので、僅か五十分程度で作れるのですか？」

「そ……そつですね！」

「絶望した！ 止まつてくれない時間に絶望した！！」

「あ、死んでくれるんですね。嬉しいです」

「死なねえよ！」

「死なないのですか？ 死んでやる—— と、叫びながら首を吊つてくれたらありがたいのですが」

「いやいや！ あの人、実際死ぬ気ないから！ てか、俺も死ぬ気ねえから！」

「では、ネタを完成させてください」

「く…… そうですね！」

確かに、ネタを俺たちだけ完成させてないなんて事は許されない。

体育館の舞台の上で、冷たい視線を向けられ、死ぬ程恥ずかしい事になつてしまつ。

冷たい視線を向けられない為には

「理緒ちゃんを犯せばいいんだ」

「死にますよ？ 社会的に？」

「じょ、〔冗談だつて！」

まあ、ネタを見せるのはしなくて済むだらうが、社会的に死んでしまつな。

そんな事しないけど。

「あ、ネタを一つ浮かびました」

「え？ マジ？ どんなネタ？」

理緒ちゃんが考えたネタ、どんなのだろう？

めっちゃ期待。

「」のネタをすれば、確実に生徒全員が驚いて言葉を失うでしょう

驚かすの？

てか、言葉を失わせちゃダメでしょ？

笑わせて、大爆笑してくれないと。

でも、確かに最近の芸人は手品とかで笑わせるより驚かせてくる芸人もいるしな。

掴みとしては、悪くはないかも。

まあ、最近の若手芸人のネタで笑う事なんて、そういうわけだ。

寧ろ、トークで笑う事が多いな俺は。

「ど」見てるんですか？ 白い快樂でもしてるんですか？

「やつてねえよ！」

「あれは、身体の中で漆黒に変わりますからね。止めることをオススメします。でも、一度使つてしまつたら、雪のように溶ける快樂が忘れないなくて、繰り返すのでしょうか？」

「だから、やつてねえよ！ 俺は酒も飲んでねえし、煙草も吸つてねえ健全な高校生活を謳歌している模範的な高校生だよ！」

お酒と煙草は二十歳から！

……一回だけセブンスターを吸つた事はあるけど。

一回ぐらいは許容範囲だぜ！

タモリの番組の相槌が俺の言葉に対して聞こえてくるぜ！

そうですね！

「話が逸れました」

「理緒ちやんが逸らしたんでしょうね？」

「俺が違う事を想えていたのも、少しほ悪いと思つたんだ」

「話を戻します。まず、あなたが舌を噛みます」

「痛い」

「血が流れ出します」

「痛い」

「死にます」

「殺すなよ！ そんなことしたら確かに生徒全員、言葉失つわ！ 生徒だけじゃなく先生たちも含めてな！」

「ダメですか？」

「ダメに決まっているでしょ！」

「では、首を搔き廻るのはどうじよつか？」

「オヤシロ様なんて俺、見えねえから！ まずここ離見沢じやないから！ 離見沢症候群に完成しねえから！ 第一に梨花ちゃんは存

「在しないから！　あの声は世界一かわいいゆかりんですからー！」

「ハアハア……ってか、理緒ちゃんサブカルチャーに詳しいね！」

「ちょっと俺の好感度上がったよー！」

「わづでした。黄金の魔女に呪い殺されるとこいつのはー？」

「ベアトリーチェも存在しないからー。」

「残念です。最高のネタだと思ったのですが

「どうやら、理緒ちゃんの無駄な引き出しは終わつたらしい。

でも、これからどうするか……。」

「私たちではダメならば、誰かに来ていただいて、指南を仰げばいいのではないかでしょうか」

「な、なるほど……それは盲点だった。」

「確かに、ネタをする奴がネタを作らなければならないなんて規則なんてありはしない。」

「じゃあ、拓夢に電話してみるよ」

「そう言って、俺は携帯電話をポケットから取り出し、リダイヤルの欄から拓夢にポインターを合わせ、クリックする。」

「プルル

数回の呼び出し音の後、拓夢が電話に出た。

『恭介か。どうした?』

「ああ、実はネタが浮かばない」

俺がそう言つと、拓夢は驚いたように話し返してきた。

『え? まだ出来てなかつたのか?』

「うん」

『あー、…………うん。アンマイ』

『だから、ちよつと来て、指南して欲しいんだが』

俺は目的を拓夢に伝える。

『恭介。俺だつて、ネタの練習中なんだ。それは無理だ』

あ……忘れていた。

今、クラス全員がネタの練習の時間だった。

『あ、そりやう。お前に伝えておかなければならぬ』ことがあったんだ

「なに?」

ネタのアドバイスか？

『前に、二コ二コ動画に投稿した楽曲一つをカラオケに入れたいって話しだろ？』

あー、そんな事もあつたな。

「どうなつたの？」

『今、リクエスト投票中になつていて、上位二百位に入ると配信されるから』

「りょーかい

そつ返事をして電話を切つた。

どれくらいの楽曲がリクエスト投票中になつているかなんて知らな
いけど、上位二百位なんて無理だうから、あんまり期待はしない
方がいいな。

なんて考えてみると、なぜか急に理緒ちゃんが「すいません」と謝
つてきた。

「え？」

「他の生徒も練習中だといふことを、忘れていました

「別にいいって。忘れなんて誰だつてするんだから」

でも、理緒ちゃんも度忘れする事があるんだな……可愛いといふも

あるじゃないか。

好感度アップだぜ！

「では、緑川恭介。あなたはよく忘れるのですか？」

「まあ、そうだな。昨日の晩飯が何を吃了たとか、忘れてしまつことは結構多いな。あと、フルネームじゃなく、名前だけで呼んでよ」

「分かりました。以後、恭介と呼びます」

「それでいいよ」

「話を戻しますが、それは若年性アルツハイマーでは？ 若いのに可哀想……」

「違うから！ 可哀想なものを見る目で見ないでえーーー！」

「あ、今は認知症でしたね。私としたことが、すいません」

そう言いつと、理緒ちゃんはペコと頭を下げた。

「どうちでも違うからなーーってか理緒ちゃんは俺のことバカにしてない？」

「はー」

「はいって……」

好感度ダウンだぜ……。

「嘘です」

「ホント?」

俺が疑いの目で理緒ちゃんを見ると、理緒ちゃんは俺の言葉に「そんな疑う人、嫌いです」と返事されてしまった！

「……振り出しに戻りましたね」

「大丈夫だ！」

「? なにか、策でも?」

「もちろんだ！」の作戦を使えば、嫌でも来てしまうぜー。言わば、条件反射だな

「なにか分かりませんが、期待しています」

「おつ！ 泥船に乗つたつもりで待つていてくれ

「沈みます」

俺は理緒ちゃんのツッコミに華麗にスルーを決めると、再び携帯電話で今度はリダイヤルではなく着信履歴から光輝の電話番号に合わせて、ボタンを押した。

プルル

拓夢より数回長い呼び出し音の後、光輝の声が聞こえた。

『おつはー』

「古つー！」

『ネタだよ、ネタ。で、なに?』

「そうそう。よく聞けよ?』

『? ああ』

「来てくれるかな?』

『いいと……いや、行かねえからー…』

な……バカな。

誰でも知っている国民的番組の定番の、あの誘い文句を拒否するだと！

一種の刷り込みと言つても過言ではない「来てくれるかな?」とタモリが言つたら「いいとも」と返すのが自然反射！

それを逆らうだと！

「ま、まさか……異邦人！?』

『いや、歴とした純粋な日本人ですから！ 日本人過ぎて困るくら
いに！-!』

「日本人で困るなんてやつぱり……スパイ！」

『だから日本人だつていつてんだろ！？ てか、異邦人とかじやなく普通に外人つていえよ』

「ふふ。外人つてネットで言つたら、差別用語だつて罵られてしまう」

『それは……可哀想に』

「来てくれるかな？」

『いいと……どうせそれに紛れて言わすなよ！ 行かねえよー。』

「来てくれるかな？」

『いいと……行かねえつていつてんだろー。』

「チツ」

『あ！ お前舌打ちしたな！ 切つてやるー。切つてやるんだからなー！』

ガチャ

あ、本当に光輝の奴、切りやがった。

「どうでしたか？」

「奴は、光輝はサイボーグだった。だから、洗脳が効かなかつた」

「サイボーグ？ あ、恭介の妄想ですね。乙」

理緒ちゃん……つめてえ！

これが、噂でも聞かないクールシンシンですか！

キンコーンカンコーン

「な……！」

「一時間目が終わってしまいましたね。結局、ネタは完成しませんでしたが」

……。

「絶望した！ 時報のような邪魔物のチャイムに絶望した……」

「あ、死んでくれるのですね」

「死なねえよ！」

全く……さつきも回じやり取りをした気がするぜ。

「でも、今だけは時が止まって欲しいぜ」

「女子トイレを覗くのですね。犯罪者乙です」

「除かねえよ！ 一次元の女子トイレしか除かねえよー。」

「ロッコの罪で逮捕します」

「ロッコは罪じゃねえ！俺は紳士だよ！」

「変態とこうな紳士ですね。分かります」

「分からなくていいから！」

「分からぬ？ やはり認知症」

「違うから！」

「では、白血病」

「健全な健康体だよ！ あえて俺に病を付けるなら釘盲病くらいだ
よ！」

「言つてて、恥ずかしくないんですか？」

「……」

「そうですね！」

「恥ずかしいに決まっているじゃないか！ バーロー

キンコーンカンコーン

六時間目も終わり、漸く放課後となつた。

漸く……じゃない、俺にとつては死へのカウントダウンだな。

「恭ちゃん。漫才の出来はどう? 大爆笑?」

俺が教室の席……と言つても、コスプレ喫茶の為に配置移動してい
るから、俺のいつもの席ではないが、席から立とうとした時、桜花
が後ろから話しかけてきた。

「なんとか、出来たよ」

そう。

一時間目の五十分で試行錯誤の末、なんとか、ネタは出来た。

ただ、練習する時間はなかつたから、明日のぶつけ本番になつてしまつたけど。

「楽しみにしているね」

桜花が満面の笑みで話している。

作り笑顔じゃなく、本当に期待している笑顔だ。

「まあ、まんまり期待はするなよ」

「恭ちゃんが作ったネタだよ? 大爆笑必死だよ」

いやいや、そんなにハードルを上げないでくれ。

「あ、私、委員の集まりあるから行くね

「ああ、頑張れよ」

「うん」

桜花は俺に手を振りながら、教室を出て行った。

今、俺は屋上を田描している。

理由はメールしたら優希ちゃんが屋上に居ると返信があつたから。俺なんかが力になれるかなんて分からないが、少しでも力になれたらい。

そう思つて俺は約束したからな。

必ず、一人を昔みたく仲良くさせてあげる。

「そのためにはやつぱり香菜ちゃんから理由を……」

「なにブツブツ咳正在の? キモいよ?」

気が付けば、田の前に話題ちやんが居た。

キツい言葉を言われてしまつたが、話しかけてくれただけ、少しは仲良くなれたと田負しておいた。

「はは、少し考え」として。話題ちやんは明日の学祭は楽しみ?」

「正直、ここまで来て、また舞台上にあがらないうけないなんて苦痛です。」

「まあ、そうだね!」

「結愛ちゃんはアイドルを休業して……本人は辞めたつもりでこの学園に来たのに男装とか、コスプレとか、水着とかしないといけないもんな。」

「まあ、これは仕事じゃないんだからさ、気楽にやつたらいいよ。」

エロゲーの押し売りだが、他に言葉が見つからなかつたのだから仕方ない。

それで、結愛ちゃんが少しでも気楽になつてくれたら嬉しい。

「ちゅー作つてさ、めつちやぶつ子しつて、テキトーーー、相槌つって、笑つて、びくつしどけば、男の人つて、喜ぶぜやん」

「え?」

「でもね、それつて私なのかな……」

「結愛ちゃん?」

「みんな、つくれられた存在のゆあゆあのファンであつて、本当の私のファンはいなー」

.....。

「好きな食べ物は、イチゴ。好きな動物は、犬。バカじゃないのー。」

「結愛ちゃんーー?」

「みんなバカよ！ 騙されて！ 本当に好きなのは肉よ肉ー。犬なんて嫌いよ、嫌いー！」

「結愛ちゃん。落ち着いて」

俺はどうしたらいつか分からず、とつあえず落ち着いてと叫んしかなかつた。

でも、それが正解だつたのか、結愛ちゃんは冷静さを取り戻した。

「……」めぐなさー。今は忘れて。じやあ

そう言つて、結愛は去つて行つた。

だけど

「ねえ

俺は、その足を止められた。

「……なこ？」

結愛ちゃんが、じぶん振り返る。

「もし、よかつたらやー一緒にゲーム作らなー？」

なぜ、誘つたのか、それは自分でも分からなかつた。

「え?」

「どうかな?」

でも、あつと、俺は結愛ちゃんにも笑つて欲しかつたのだと想つ。
未だ、優希ちゃん一人笑わせられない自分だけ、だからつて、だから結愛ちゃんが笑わないでいいなんて間違つているから。

「……いいの? 今からなんて迷惑じゃない?」

結愛ちゃんがそう質問してくるが、その口調は明らかに一緒にやりたいといつ口調ではない。

否定されてもいいみたいな……だが、俺は否定は決してせずに答え
る。

「俺、リーダーだから、俺がOKと言えばOKだよ。まあ、みんな
反対しないだろ?」
「うん」

と、わざと軽く感じで言った。

「……わ?。じゃあお願ひするわ」

そう言つと、結愛は再び歩き出して消えて行つた。

なんと、予想外な事に結愛ちゃんが一緒にゲームを制作する事を了承してくれた。

案外あつさつしていくビックリしたが、嬉しい方向に転んだのだから、〇〇と叫ぶ事に変わりはない。

「よかつた、よかつた

あ、早く屋上行かないと。

屋上。

優希ちゃんが待っていた。

「「めん、待たせた？」

「ナニなことないですよ」

そつ言つて、優希ちゃんが屈託のない天使の笑顔を見せてくれる。

優希ちゃんマジ天使

「……話つて、お姉ちゃんのことですか？」

「ああ

俺は結婚ちゃんから、優希ちゃんの双子の姉である香菜ちゃんに、理由は分からぬが避けられないと教えられた。

俺は一緒にゲームをつくる事をキッカケに自然に「アレ、取つて」「はい、アレです」みたいに話せねばと思つていた。

だが、ゲーム制作の時間も、一緒につくりはするが……まだ企画段階だが、お互に離れた席に座つて会話もない。

つまり、まだ実りは叶つてなくこれからだ。

そんな中、クラスから一人の女子が転校した。

まあ、先生に言われるまで気付きもしなかつたが。

そして、その転校した一人の女子はそれぞれ、優希ちゃんと香菜ちゃんの漫才の相方で

「その……どう? 話せてる? ネタをつくるにまだじつも話すとは思つんけど?」

経緯はどうあれ、優希ちゃんと香菜ちゃんは漫才のコンビとなつた。

これが、上手くいつてゐるのならそれに越した事はないが、もし上手くいつていなこのならかなり気まずい空気が流れているはずだ。

特に今日の一時間目と一時間目の個室での漫才の練習は。

「恭介さんの想像通りだと思います」

と言つ事は、残念ながら上手くは進まなかつたか……。

「やうか……」

「せこ……」

「……」

「……」

「……」

「……ネタはどうだ？ 出来たの？」

沈黙に耐えられず質問してみたが、すぐに愚問な質問をしてしまつたと気付く。

話だつてまともに出来ないのに、会話主体の漫才なんて出来ているはずがない。

「ネタは出来たのです」

「え？」

意外だ……間違つて以外と心の中で変換しそうになつてしまつた。

「それはよかつたな。でも、どうやつて？」

「お姉ちゃんが、作つてくれてたです」

「でも練習は？」

「お互ひに無言です。優希も沈黙に耐えきれなくてケータイに逃げてしまつたのです」

まあ、俺でも逃げちやつただらうな……カラオケの時みたい。

「…………」めぐな

「え？ こきなつどうじて謝るんですか？」

「だつて、俺、全然役に立つてないからや……」

「そんなことはないです！ 恭介さんがこの屋上で手伝ってくれるつて誓つてくれたから、優希も頑張ろうつて思つてたんです！！」

誓つて……。

「ぶつちやけ優希、諦めてたんですね。お姉ちゃんが優希を嫌いになつたなら嫌だけどそれでもいいつて。ぶつかるのが怖かつたから……」

「…………俺、どれだけ役に立つか分かんないけど、手伝つからー。頑張りつねー。」

「はーいですー。」

優希は強く頷いた。

それにしても、どうして香菜ちゃんが優希ちゃんを避けるのだろうか。

結局、聞けてないんだよなー。

嫌いではないって言つていたけど……じゃあ、どうしてなんだろ？

ただの愛情の裏返し？

不器用な愛情表現みたいな……だつたらいいのに。

「明日の女装、楽しみにしますね」

「うぐう」

そ、そりだつた……。

勿論、優希ちゃんの件も大事だけど、明日のビッグイベントも大事だよな。

「明日、来てくれるかな……？」

「いいともー」

見に来なくていいのにい！

どこか。

周りはコンクリート剥き出しの部屋に高校生くらいの少年と少女が居る。

「明日は学祭だな」

「そうね」

少年は学祭を楽しみのよひに語る。

一方、少女の方はそれほどでもなによつた。

「学祭の本番はいいだ

そつぱつて、少年が手を広げる。

「明日、ここはモルモットの聖地となる。萌えと燃えが融合した楽しい楽しい愉快な学祭がな

少年は饒舌に、尚田つ愉快そつて顔を歪ませながら笑つ。

「それは傍観者が、でしょ。当事者の女の子たちとは、違つて意味で顔を歪ますでしょつね」

少女は対照的に、声優だつたら棒読みと言われるよひな抑揚のない声で淡々と話す。

「それがいいんじゃないか。誰だつてやつてていわれて少女の処女を奪つても楽しくないだろ？ 止めてつて懇願する泣き叫ぶ少女を無理矢理壊すのだ。それが愉悦といつもの」

少年は明日の事を考へては顔を歪ます。

「……」

少女は無表情で顔を歪ませ笑つ少年を見る。

「演技じゃないリアルの悲鳴、ありもしない出口へ向かって足を進める憐れな道化。所詮、この手を出ないことも知らずに。いや、知つても願わずにはいられない。なぜならそれが唯一の希望だからだ」

「ないと思つてもしかしたらと願い、それがそうなるはずと願望に変わる」

「わかつてゐるじゃないか。さて、明日はここに何個の棺桶がいるのかな?」

少年は高らかに笑う。

その笑いは嘲笑。

憐れな女の子たちを嘲笑つ愉快そうな笑い。

その高笑いとは対照的な少女のよつと、元田と書ひ口は暗い静寂に飲まれていく。

一人きりの暗い部屋の中で

扉など見向きもせずに

君だけのために命を削るよ

本当は一人きりだと知るときまで

真っ白いキャンバスを
染めていくけれど
結局真っ黒になるから
また真っ白く塗り潰す

「へへへ」

「コンクリートに囲まれた部屋で少年の笑い声が反響する。

「つまらない表の学祭は終わりだ。今から楽しい裏の学祭が始まる

「……準備できたわよ？」

無表情な少女が楽しそうに独り言を呟く少年に話しかける。

「そうか。では始めよう。表の学祭ではモルモットになってしまつたが、ここでは恐怖し有りもしない光を求めるモルモットを嘲笑う支配者だ」

「結構、笑えたわよ。普段しないであろう人の女装」

そう話す少女だったが、その口振りは昨日のよつて棒読みで決して笑っている感じではない。

「一生の不覚だよ。来年からは裏から手を回さないとな。こんなことが一 度二度もあつたら、生まれ変わつてもこの黒歴史を覚えたままでいてしまはず」

「プリニーとして使われている姿は、ちょっと見てみたいかも」

少女はそう少年に話を返すが、やはり抑揚のない棒読みで気持ちが入ってはいけない。

「生まれ変わりなどフィクション。ゲームや漫画、所詮は一次元のモノであって存在などしない」

そんな少女の喋り方には慣れているのか、少年はそんな事など無視して語り続ける。

「だが、人類最大の夢、まだ誰もなしえていない究極の夢、不老不死、……必ず、必ず成し遂げてみせる」

「……」

少女は黙つて少年の一人語りを聞いている。

まるで、そこに誰も居ないかのよう。

ただ、少年の居るであらう方を向いているだけで本当は壁を見ているみたいに。

「さあ、つまらない話は終わりだ。今から萌える愉悦の時間が始まる。それに比べれば、黒歴史など今は酒の肴にでもなるさ」

「お酒は二十歳から……」

少女は再び少年に話しかけるが少年は「お前、よく一緒に居れるな」と少女の言葉を返す。

「肩を嘲笑うのは天才の権利だ。お前はルールに縛られ過ぎなんだよ。さあ、背徳の気持など消し去つてモルモットを嘲笑いに行こうぜ」

そつとつて薄ら笑いを浮かべつつ奥の部屋へ歩く少年だったが、急に立ち止まり持っていた飲み終えた缶コーヒーの空き缶をグシャリと握り潰して後ろへ放り投げた。

「……」

少女は首を出して転がつていく空き缶などには目もくれず、ただ少年の方を無表情で見る。

「ちつ……思い出してしまつたぜ。表の学祭をよ」

そう言つた少年はなんだ笑みを消し、少しイライラした表情をみせた。

「……」

遂にビッグイベントの学祭が始まつてしまつた。

いや、俺は学祭には肯定派だし、めっちゃ楽しみで嬉しい事には勿論変わりない……ないはずだつたのだが、生贊の一人に選ばれてしまつた時点で全て終わつてしまつた。

「ああ、なぜ現実にはセーブがないのでしょうか。あー神よ、もし時が戻るなら、あの時グーを出した自分を殺したい。見習い天使フロンよ、俺を導きたまえー」

「大丈夫ですよ、愛があればネタがつまらなくとも笑つてくれます」

そう俺の独り言にシジ「//」をいれて来たのは、本当に天使みたいな可愛い可愛い優希ちゃん。

優希ちゃんマジ天使！

てか、優希ちゃん……知つてて「愛」って言つてくれたのかな？

優希ちゃんなら、ゲームに詳しきてもおかしくないけど、偶然だつたらなりませ、優希ちゃんはイノセントチャームだぜ。

一部はイノセントじやねえけどな（笑）。

「優希ちゃんおはよー」

「おはよー」やります。恭介さん

ペコリと頭を下げる優希ちゃん……可愛い過ぎる…

まさに歩く萌え要素だぜ！

「あー、優希ちゃんが本当に天使ならいいのにー。でも所詮生まれ変わりとか、天使とかはフイクションだもんねー」

「そうですね……つて！ 天使なんじうどいいんです！ 恭介さん！ 一大事ですつー！」

え！？

い、一体どうしたツス？

あ……プリニーみたいになってしまったツス！

俺は犯罪などしない健全な男児だから、プリニーなどにはなりはないツス！

「一体どうしたツス……どうしたんだ？」

優希ちゃんの言葉には焦りが見える。

「お、お……お姉ちゃんが、早退しました……」

え……早退？

「……学祭を？」

「はいです。……声優のオーディションに行つたみたいですね」

今日は土曜日だから、本来ならば学校が休みだ。

そして、普段学生で勉学に励まなくてはならない香菜ちゃんが、役を掴む為にオーディションに行く日は土曜日と日曜日しかない。

放課後なら行けなくもないが、午前中とかなら学校と言つ拘束がある香菜ちゃんはオーディションに行く事が出来ない。

学校を休んで行くと言う方法もなくもないが、この学園はレベルの非常に高い学園で一回の休みが致命傷となるし、そもそも高校には単位があるからなかなかそうはいかないだろ？

まあ、声優のオーディションが何曜日でやっているかなんて俺には

分からぬが、もし平田にもオーディションが開催されてゐるんだ
としたら、土田と祝日しか行けない香菜ちゃんにとつてはかなりの
痛手だわ。

だから、今日オーディションがあるのなれば、行きたい気持ちは確
かに分かる。

俺の知つてゐる限りだと、香菜ちゃんが声の仕事をしてゐるゲーム
は「つべりこしか知らない」。

俺が知らないだけで、もう少し「つべりこ」は出でてはいるのだろうが、少
なくとも全てパソコンソフトのゲーム……所謂エロゲーにしか出で
はいなはづだ。

テレビアニメとかには一切出た事はないはず……まあ前にオーディ
ションに受けに行つていてたのだから出れるのなら出たいのだろうが。

「……でも、今日は学祭だぞ」

そう、今日は確かに土曜日だ。

だけど、学園は休みではない。

勉強はないけど、ないがビッグイベント学祭が開催されてゐるんだ
ぞ。

「やはり、優希とは漫才を……一緒に居たくなこと」「うんなんで
しうつか……」

「……そんなはずはない。そんなはずはないよ。だつて一緒に漫才

をしたくなかったら、ネタなんて考えて来ないよ

そうだ。

昨日、優希ちゃんを心配して屋上で話した時、優希ちゃんはお姉ちゃんの番菜ちゃんが漫才のネタを作ってきてくれたと言った。

本来ならば一緒に作るべきだが、それはともかく置いても、本当に一緒に漫才をしたくなかったら、そもそも漫才のネタなんて作ってこないはずだ。

「でも、オーディションって当日に分かるものじゃないですよね？
前々から行くことを決めてたとか……？」

「……それは分からぬけど……」

元々オーディションに行く気だったのなら、漫才のネタを作つてこなくてもいいはず……つまり今日行く事を急に決めた？

でも、恐らくだけど、飛び入り参加とか有り得ないよな……ならやはり最初から……。

「で、恭介さん！ お願いがありますー！」

「な、なに？」

「優希の……優希の相方になつてくださいー！」

優希ちゃんがそう言った時、俺は午前中の事を思い出した。

午前がクラスの出し物、そして午後からは……。

……。

「恭ちゃん？ どうしたの？ 顔暗いよ？」

午後からの事を考えて意氣消沈していると、桜花が顔を覗き込んできて心配してくれる。

めっちゃ、嬉しい……嬉しいけど、どんなに心配してたって黒歴史へのカウントダウンは止まらないよー

「ちよっと午後からのことを想像してただけだよ」

俺がそう教えると、桜花は「ああ……」って口を漏らす。

そりやあ、俺は自分の事……午後からのコンテスト、女装の事で頭が一杯で深く考えていなかつたが、桜花も不幸な生け贋に選ばれた犠牲者の一人。

俺からすれば、男子の女装と違つて、女子の男装は恥ずかしいかもしないが、決して黒歴史ではないはずだ。

まあ、俺が男性だからで女性視点から見れば、全く逆の結論が導き出されるのもしれないけどね。

「男装はいいけど、水着は恥ずかしい……」

そうだ。

女子には男装の他に水着も着なればならない。

実際に行つてゐる学校がどのくらいあるのかはしらないけど、ゲームなどによくある水着コンテスト……俗に言つて「スコンだ。

「……私も頑張るから恭ちゃんも今は、今を頑張ろつ

そつと、桜花が両手を前に出して、胸の前で手をグーにしてガンバのポーズを取る。

うん。

めぢやくぢや可愛い！

「ね？」

更に笑顔でウイink！

「ぐはつ……

死んだ！

はい！

俺、死んだ！

「え？ 恭ちゃんー？」

桜花が焦つたように俺の名前を呼ぶ。

「ああ、大丈夫だよ。そうだな、頑張ろっ」

「うん…」

話が一段落したちょうどその時、校内アナウンスが流れる。

『これより学祭を始めます』

それを念頭に三年生が教室を出始めているだろ？

こここの学園は一年生と一年生がクラスの出し物を出して、三年生がそれを見て回ると言う感じらしい。

俺も昨日、昼休みに知った。

因みに俺のクラスは、勿論コスプレ喫茶……ではなくメイド喫茶だ。

桜花たち女子はメイド服を、俺たち男子は執事のよつな服を着ている。

でも、メイド服も執事服もコスプレ用のレンタル物だから、そう言う意味ではコスプレ喫茶と言えなくもないかもしれない……ないか。

何故こうなったか……理由は簡単だ。

大人の都合……大体の事に使える魔法のようなこの言葉ではなくて、もつと現実的な都合、そう予算の都合、所謂金の問題である。

一クラスに与えられる予算は勿論、無尽蔵……無限ではなく決めら

れている。

で、足りなかつた。

それだけの話。

ただ、メイド服と執事服だけなら、大量注文の為、多少は安くないでギリギリ予算に足りた……のでも、メイド喫茶となつた訳である。まあ、執事も居るので執事喫茶と言えるか……女子の方にも来てもらえて、まさに一石二鳥とはこの事だな。

俺が自分の考えに感心してくると、横からシッコニが入った。

「なーにラブラブやつてるんだよー」

そう俺と桜花に向かつてシッコンで来たのは、見た目は決して悪くないのに彼女とかいないエロゲーなどにおける悪友みたいな奴。

「む……恭介、今失礼なこと考えてただらー……いや、絶対そうだー！怒つてやるー！」

うん。

なんか、昨日と少しデジャブを感じさせる台詞を紡ぐね。

「そんなことないさ。寧ろ、誉めてたんだよ。光輝の！」

「え？ マジで？ それは悪い！」

「

「光輝は童貞で素晴らしいって」

「『じ』が誉めてんだよー。」

「こやせやまわに童貞の帝王、童帝だぜー。」

俺がそつ警め讃えてやつてこるのに、光輝は怒りをあらわす。

「意味わからねえよー。」

確かに、文字にしなければ同じ言葉を言つてこるだけだもんね。

光輝にはこの高いギャグセンスが理解できない事を計算に入れれなかつたぜ……。

恭介、一生の不覚！

「確かに悔しいことに否定は出来ねえけどさー、俺はしたいのに出来ないんじやなくて、別にしたくないからしてないだけだー。」

「ぐす……分かるよ、光輝。それが男の言い訳……じゃなかつた。それが男の勲章だよな。うん。お前は汚れていない。綺麗な光輝だよ」

「今、めつちやお前に汚されたけどねー、俺は妹一筋なんだよー。」

「なん……だと……。まさかのシスコン発言」

「やついつ意味じやねー！ ただ兄として妹が好きってだけだ！ 変な意味とかねえよ！ 勘違いすんなー！」

光輝、ちょっとアグツボにな……流石に悪乗りしかねたみたいだ。

「ま、気にすんなよな！」

と俺が大人の発言をした所で、この話し合いは終了。

まだ光輝がガミガミ言つてゐるが無視！

そして辺りを見渡す。

メイド服に赤いカチューシャを付けたレベルの高い女の子たちが目に映る。

見た目はいい奴は頭が悪いって思つていた事を反省しないとな……
だってジュルリと音を立ててしまいそつなくらいみんな可愛い

ジュルリ

え？

俺は音を立ててないぞ？

でも今、確かに音が……？

「なんとなんと。まさに描者のための空間！ 萌えですね。ジュルリ」

「……こりっしゃいませ！」

擬音の正体は客だった。

……キメH。

凄く、キモい。

アニメや漫画に出るようなキモオタだ。

接客を担当している結愛ちゃんも最初一瞬、顔を引きつったのが、見てとれた。

でも、流石はプロのトップアイドル。

すぐに笑顔を見せて接客をしている。

営業スマイルだと分かっていても、あれは堪らないね！

俺が顔を引きつらせていると、隣に悠斗がやってきて、耳元に語りかけてきた。

（ねえ、あの人。前にゆあゆあが転校してることを証明するために話した人じゃない？）

（でも、確かに似てるけど、あのキモオタは一年生のはずだよ？ だったらここにいるはずはないよ）

（そりだよな……気のせいかな？）

（キモいから同じに見えるだけだよ、きっと）

（そうだね！ そう言えば、キモオタの次の人も凄かつたよね）

ああ、確かに。

あのオネエ系の男子には、流石にビビったぜー

オネエ系なんて、テレビでしか見た事なんなかつたからね。

「あら~ん。いい男たちねえ」

.....

俺たち固まつたね。

いや、クラス全体が。

よくよく考えれば、その人は確かに三年生だつたけど。

数分後には、メイド喫茶は満席状態の大盛況となつた。

その分、忙しいけど。

「アーニー、お持ちしました」

俺は、最初のお客さんのキモオタヘコーヒーを差し出す。

「なんでえゆあゆあたんが持つてこないんだお？」

結愛ちゃんは大人気なんだよ！

キモオタ一人を相手になんか出来ねえよ！

「すいませんお客様。当店はこの通り混んでおりまして、『』ア承く
ださい」

心の声は勿論、心に留めて、俺は紳士的に店員のよう、やつぱり書つ
てキモオタへ頭を下げた。

なんか、スゲエ負けた気がするのは、気のせいだと思いたい。

「初めてあつたヤローになんか興味ないお

初めて？

やつぱり似ているだけ？

でも、こつちは逆に興味が出てきて、聞いてみる事にした。

「ウヒヨー！ まさか弟の言つたのはお前？ 奇跡展開キター！」

弟……だから似ていたのか……。

「では、失礼します」

「ちよつと待つお

俺はキモオタから一秒でも早く離れたかったので、去りうとしたが、
呼び止められてしまった。

「なんでしょうか？」

だが、不満などは決して口にださず、クールに紳士的に接客する。

「なんか、話すお？」

え……うぜえー！

忙しい時に絡んでくるんじゃねえよー。

……とは言えないよな。

俺の発言一つで、満席状態が全て空席に変わるかもしれないからね。
まあ、アニメの事をちょっと言ひて、気分を舞い上がりさせて、せつ
れとおらせてもうつとすのか。

「お密様は涼宮ハルヒのキャラで誰が好きでしょうか？」

「オウフwwwいわゆるストレートな質問キタコレですねwww」

キメエー！

「おつとつとwww拙者キタコレなどといネット用語がwwwま
あ拙者の場合ハルヒ好きとは言ひても、いわゆるラノベとしてのハ
ルヒでなくメタSF作品として見ているちょっと変わり者ですので
wwwダン・シモンズの影響がですねwwwドップフオwwwつい
マニアックな知識が出てしましたwwwいや失敬失敬www」

.....。

「まあ萌えのメタファーとしての長門は純粋によく書けてるなと賞賛できますがwww私みたいに一歩引いた見方をするとですねwwwポストエヴァのメタファーと商業主義のキッチュさを引き継いだキャラとしてのですねwww朝比奈みくるの文学性はですねwwwwwwフォカヌポウwww拙者これではまるでオタクみたいwww拙者はオタクでは」せりんのwww「ポボオ」

いやいや、百対零でお前オタクだから！

意味わかんねえよ！

深いんだか、浅いんだか全然わからない話しゃがつて！

まあ、お前のお陰で一つだけわかつたよ。

……俺は健全だと。

キンコンカンローン

『聞もなくお昼になります。三年生は教室に戻つてください』

この校内放送が流れ、あんなに大盛況だったメイド喫茶は気付けば、クラスメイトだけになつていた。

いつもはこの数のはずなのに、さつきの大人数を見たら、めつちや少なく感じてしまう。

まあ、俺は大人数とか苦手だし、会話とかも正直苦手だから、店員とかはあんまりやりたくないねえな。

「ねえ

「ん?」

最後の客を見送った香菜ちゃんが俺に話しかけてきた。

「頼むね

ただ、それだけ言つと、香菜ちゃんは教室を出て行く。

「……」

今、思えばアレはこの事を指していたのだろうか?

だとするならば、やつぱり最初っから……。

「恭介さんしか頼れないのですーー お願ひしますーー!」

そう言つて、再び頭を下げる優希ちゃん。

その姿は必死さを感じさせる。

「わかったよ

俺がそう言つと、優希ちゃんは頭を上げて、自然と出たであろう笑顔で「あいがとうです」と再び頭を下げた。

「いいよ。屋上で誓つたからな。優希ちゃんを助けるつて。香菜ちゃんが関係しているなら、俺は関係者だ」

「恭介さん……」

「それに、優希ちゃんを他の奴と一人きりになんかさせたくないしな！」

半分は冗談だったのだが、この言葉を優希ちゃんは、顔を赤くして小さく「はいです」を呟いた。

本人は普通だと思っていた
周りは異常だと思っていた
それに気付いているのって
幸せ？ それとも不幸？

誰のせいでも少女は落ちる

ああ そうだった

僕のせいだった

「優希の……優希の相方になつてください。」

これから体育館で行われる漫才の相方になつてくれと優希ちゃんに頼まれた。

理由は、相方の香菜ちゃんが早退したから。

俺は優希ちゃんと漫才をする事にしたが、結果的には俺は優希ちゃんと香菜ちゃんを仲直りさせてなこと言つ事で……。

まあ、優希ちゃんと一緒にになれるとか、めっちゃ嬉しい出来事だけじね。

「じゃあ、ネタを教えて」

「はいです！」

優希ちゃんが、制服のポケットから香菜ちゃんがメモ帳を出して渡してくれる。

「あつがと」

俺は優希ちゃんにお礼を言つて、そのメモ帳を貰つ。

「やんなつ！ お礼を言つのは優希の方ですか？」

と、優希ちゃんが慌てて頭を下げるのと、上げさせてメモ帳を開く。

メモ帳には手書きで漫才のネタが書いてあった。

優希ちゃんが、香菜ちゃんが漫才のネタを作ってくれたと言つていたので、この手書きの文字は香菜ちゃんのだらつ。

綺麗な文字で、漫才のネタが書かれている。

文字の下にこうつすらと違つ文字が見えるので、何回も書いては消して、書いては消して、を繰り返したみたいだ。

「……」

正直言つて、香菜ちゃんの書いた漫才のネタは、俺と理緒ちゃんがない頭と知恵をフルに使って考えた漫才のネタより面白かった。

あの時は、本当に学力は笑いには全く持つて役に立たない事を思い知つたね。

頭が良くなると、どんどん頭が固くなつて、柔軟な発想が出来なくなるとか聞くけど、本当にそれを体験したようなもんだからな。

「……どうですか？」

優希ちゃんが不安そうに聞いてくるので、素直に「面白」と言えた。

「えへへ。自慢のお姉ちゃんです」

香菜ちゃんの書いた漫才のネタが好評で嬉しいのか、優希ちゃんは

照れ臭そつにしている。

ま、あくまで俺が「面白」と感じただけで、実際に受けたかどうかは別問題だけ。

テレビとは違つて、面白くなくても笑い声を足したり出来ないし、見ている人が田の前に居るから、笑ってくれなきゃ地獄だよな。

「……ホントに香菜ちゃんのことが好きなんだね」

「はいです！　田畠のお姉ちゃんです！」

「なら、絶対にまた一緒に話せるよ！」なら」とね

「やうやうです！　また一緒に……」

優希ちゃんは本当に香菜ちゃんが好きなんだな……姉妹ってみんなこんなモノなのかな？

よくよく考えると、双子って結構珍しいはず。

今までの記憶を辿つても、エロゲーとか一次元の中でしか、出合つた事がない。

杏と涼とか、佳奈多と葉留佳とかね。

「やう言えば、恭介さんには兄弟とかいるんですか？」

「兄弟？　残念ながら、兄も弟も居ないよ」

「じゃあ、一人っ子なんですか？ 少子化に貢献してませんね」

「それは親に言えよ！ ってか、人口を増やすんなら三人以上必要だから、優希ちゃんも貢献してないぜ」

「あ……気付きました」

おいおい。

でも、最初の頃は全然話してくれなかつたからな……結愛ちゃんみたいに」。

そう考へたなら、「うやつてギャグを言へる関係になつたのは、優希ちゃんの秘密を知つたのが始まりとはい、凄い事だよね。

うん。

この関係を、この関係以上であつたはずの香菜ちゃんとも言へるようになれば……。

「でも、一人っ子って寂しくないですか？」

「うーん。考へたことないな。でも、一人のときは欲しいと思つても、結局兄弟が出来たときには、やつぱり一人がよかつたつて聞くしね……どうなんだろ？ あ、ごめんな。答えになつてないや」

「別に構いませんです。でも、優希はお姉ちゃんが居て、本当によかつたと思ってますです」

お姉ちゃんか……お兄ちゃんでもいいけど、もし居たら可愛いがつ

て貰えたのかな？

逆に、俺がお兄ちゃんだったなら、可愛いがったのかな？

「……何やつてるんだ？」

そんな事を考えていたら、担任の智夜先生に話しかけられた。

「いえ、ちょっと兄弟が居たら、どうなつていたかなつて、考えて
いまして」

「……兄弟、居ないのか？」

「はい。居ません」

「……上にも、下にもか？」

「？　はい。一人っ子です」

「……そが。夏とはいえ、屋上は冷えるから中に入りなさい」

確かに、午後になつた事もあつて、少し肌寒いと感じていたところ
だ。

太陽も雲に隠れているしね。

優希ちゃんは眩しいくらいに輝いているけど。

優希ちゃんは教室に忘れ物したと言つて、教室へ行つてしまつたの

で、俺は体育館に一人で向かっていた。

「……」

俺、廊下でよく結愛ちゃんと出会つよな。

「結愛ちゃんも体育館へ？」

「……他にいる？」

「え？ いやあ、まあ、その、テンプレみたいなもので……深い意味はなくて……」

「そうです。体育館です」

「なら、一緒に行くか？」

「どうしてですか？」

「え？ 友達だからじゃダメなのか？」

「友達！？ 私と？」

なんか、凄く驚かれた。

俺となんかと友達では嫌つて事？

そんなのは涙田だよ。

「だ、だって、一緒にゲームを作る仲間じゃん！」

「……仲間って、友達って意味なの？」

「え？」

友達＝仲間かつて言われば、それは分からぬ。

言葉の意味的な事で言えば、仲間は一緒に何かをする者同士の事で、友達とは親しくしている人って事だから、そう言う意味で言うのなら、仲間は同じ仕事をしているみたいな事で、友達＝仲間になるけど……。

「同じ意味だろ！ それこそ、友達と親友みたいに、言葉は違うけど、同じ意味みたいなもんだって！」

「……私の周りって、芸能界に入ると、沢山出来るんだ。でも、それは仕事だけ。プライベートになると周りは誰も居ないの。ねえ！ 友達つていくら払つたらなつてくれる？」

物議を醸す発言をするね。

「……無料だよ。でも、無料で無量の数の友達は作れる。その中の一人に、俺はなれないかな？」

「……プライベートの友達？」

「もちろん！」

「……仕方ないわね！ 一人言の多い変態だけど、特別に友達になつてあげるわ！」

「ありがとう。……俺つて一人言多いの？」

「気付いていないんだー。まあ、自分じゃ気付かない」とつて沢山あるけどね。さあ、体育館行きましょ！……恭介君」

体育館に着くと、すでにほとんどの生徒が集まっていた。

『それでは、漫才大会を始めさせて頂きます』

俺が席に着いた丁度に、アナウンスが漫才大会の開始を告げた。

『今日は、漫才のプロとして、‘ダウンタウン’と‘タカアンドトシ’の方々に来て頂きました』

体育館の左手にある先生たちの席の隣に、ダウンタウンの二人と、タカアンドトシの二人が座っている。

めっちゃ生で見れて、スゲエ嬉しいけど、これから漫才を見られると考えると、めっちゃ辛いな。

芸人目指している奴なら、めっちゃ嬉しいだろうけど、この学園に芸人目指している奴なんて居るとも思えないし、ただの緊張感を更に増すだけの存在だよ。

『では、一年生は準備を開始してください』

漫才は一年生から順番に行われる。

決まつてこるのは一年生から二年生だけで、あとは籠引めだ。

本来の相方、理緒ちゃんとの漫才は「十一番なので、二十一番田」と漫才を行つ。

理緒ちゃんは「十一番だと云えた時は「ロココノハシタリ」な番号ですね」と言われたが、恥ずかしい事に確かにロコ派の俺はぐうの音も出なかつたぜ。

体育館の舞台の裏で、俺は周囲と回りよつて漫才のネタを練習していた。

ただし、本来の相方とではなく、優希ちゃんど。

理由は番町にある。

なんと、優希ちゃんの番町は「二十一番で、俺たちのすぐ後だと云つ事が判明された為だ。

漫才のネタは、長くても四分程度……それでは練習など出来ない。なので、理緒ちゃんに許可を貰い、優希ちゃんと練習してくるのである。

理緒ちゃんとは、昨日何度かは行つたからね。

まあ、始まる前には理緒ちゃんとも練習しないといけないだらうか。ど。

『続いて、九番です』

舞台裏なので、嫌でも舞台で漫才をやっている声が丸丸聞こえてくる。

だが、それを聞いている生徒の声は聞こえない……。

「大丈夫でしょうか」

優希ちゃんが自信なわけに聞いてくる。

「「」のネタを。お姉ちゃんを信じられないのか？」

「そんなことはないです！　お姉ちゃんはいつも優希を守ってくれましたです！！」

「なら、大丈夫だ、問題ない」

「はいです！」

俺たちは限りある短い時間で、必死に漫才の練習をした。

どんなに受けない奴が居るからって、漫才のネタ帳を見ながら漫才をやっている奴は居ない。

まずは、覚えないと。

『続いて、十四番です』

「おー、練習してんな

「拓夢か、十四番なのか？」

「あ

「恭ひやんー、見ててねー！」

「こや、見れはしなこやび、聞こひるよ」

「恭ひやんのために頑張るよー。」

なんで俺の為？

なんて考へるにこねど、拓夢と桜花は舞台へと上がつてこつた。

「拓夢わざと桜花さん。笑いを取れるでしょ？」

「ああ。聞いてみれば分かるさ」

そつまに言つたが、俺も氣にならぬのと、何もしなくても聞いとくと
舞台へ耳を傾ける。

すると、拓夢と桜花の声が聞こえてきた。

『煙草吸つてもよひしこですか？』

いや、ダメだ。

『いいや。とこひでー田口向本へりこお吸こひへー。』

『いりおでー』

『ふた箱べりこですね』

『桜花も吸つてんのー?』

『喫煙年数はどれべりこですか?』

『三十九年ですね』

『なんだ、ネタの話か……そりだよな』

『隣に喫煙者がいるから、止めてしまつたぜ。』

『なるほど。あそこベンツが停まつてますね』

『停まつてますね』

『もしあなたが煙草を吸わなければ、あれべりこ買えたんですよ』

『あれは私のベンツですけど』

『……』

『えー?』

『終わりー?』

『あーごめんへやー』

……でも、客の笑い声もちらほら聞こえてくるし、まあ成功な方だ
る。

ちょっと、俺も笑ってしまったしな。

「面白かったですね」

優希ちゃんが舞台から帰ってきた拓夢と桜花に素直な感想を述べて
いる。

「だろ?」

拓夢はなんか、誇りしげだ。

「どうだった? 恭ちゃん?」

桜花は俺に感想を求めてくるので、素直に「面白かった」と伝える
と、照れて舞台裏を出でていってしまった。

「仲良いね」

「からかうなよ」

「じゃあ、頑張れよ」

やつらつと、拓夢も舞台裏を出でていった。

『続いて十五番です』

アナウンスに入る。

「恭介！ 優希ちゃん！ 聞いてくれよなー！ 俺たちの素晴らしい漫才をー！」

そう俺の前に現れたのは自信満々のバカ、光輝。

そして、その隣に居るのは光輝の相方、結愛ちゃん。

「……また、会ってしまったわ」

「そりゃあ、出会ひだら」

俺が結愛ちゃんにツッコミを入れる隣で、光輝は熱弁している。

「恭介！ 大爆笑をその耳をかっぽじって聞いてー！」

そう言い放った光輝とそれを冷めた目で見つめている結愛ちゃんが舞台へ上がつていった。

「不安ですね」

「ああ、俺もだ。」

大爆笑じゃなく、大爆死にならない事を祈るぜ。

『突然ですが、結愛ちゃんに話があります』

『はい。なんですかあ？』

流石、トップアイドル！

さつきの冷めた表情が嘘のよう、見事な笑顔を見せている。

魅せられるぜ。

『サッカー部つて薄荷が好きなハッカーが多いんだよね』

『はつ？』

.....。

『ネコが寝転ぶと、どう叫ぶか知ってる？』

『キヤツ！ ト、でしょ』

.....。

（・。・。）・*・・、ブツ

「.....お、面白かったです.....」

優希ちゃんが舞台から帰ってきた光輝と結愛ちゃんに必死にお世辞を述べている。

「.....素直につまらなかつたつて言つてくれた方がいいよ

「スベリ倒しだったね」

「お前はもう少し傷付いた人に優しく出来ないのか！」

なんだよ、素直に感想を述べてやったのに。

「……予想内の結果だったわ」

そつぱつて、詰めちやんは舞台裏から去っていった。

『二十番の方です』

ついに次になってしまった。

「恭介、優希ちやん。僕、頑張るよ。」

「頑張ってください」

悠斗の隣に居る相方は、確か“中村遙香”と言つた前だつたはずだ。
黒髪のショートで、見た目としては、アイマスの天海春香みたいな
感じだ。

でも、性格は初期の千早のよう無口で、可愛いのだが寡黙なので、
俺も全然話した事はないな。

「じゃあ、行つてくるよ

悠斗は俺と優希ちやんに手を振つて、遙香ちやんと一緒に舞台上に上
がつていった。

「優希ちやん。次、順番だから俺は理緒ちやんのところに行つて
ね

「分かりましたです」

そう言つと、俺は理緒ちゃんのもとへと足を進めた。

「よー、理緒ちゃん。ごめんな」

俺は、俺の我が儘に付き合つてくれた理緒ちゃんに謝罪した。

本当なら理緒ちゃんと漫才の練習をしないといけないのに。

「なら、自殺してください」

「だが、断る」

理緒ちゃんには感謝しているが、だからと言つて死ぬ訳にはいかない。

つてか、死にたくない。

そう言えど、淀川長治つて人が、死は人間卒業、自殺は人間廃業です、と言つ名言と言つたが、格言を残したらしい。

俺は自殺を肯定するつもりはないが、止める義務はないと思つている。

何故なら、それがその人の人生の選択だからだ。

「……一人言、好きですね？」

「え？」

ヤベヒ、口に出てた？

わつかぬ遊びやんにも言われたばかりだし、気よけないと。

『次、二十一番です』

あ、呼ばれた……。

「なんか、緊張するね」

「緊張を解く方法をお伝えしましょうか？」

「え？ じゃあ、お願ひ教えて」

俺がパツと思い付くのは、掌に入つて漢字を二回書けつて奴だな。

「舌噛んでください」

「死ぬわー！」

「はー」

はいって……。

「大丈夫ですよ、密すべて一次元のキャラだと思えば」

た、確かに……よく野菜だと思えとか言つしね。

「すべて幻想。そう思えれば、変わらぬはずです」

「ああー、そう思つたら気持ちも楽になつたよー。ありがとー。」

「どう致しまして」

「よし、行くぞ！」

「通報しました」

「犯罪なんか犯さねえよ！」

と、理緒ちゃんにジジコロながり、俺たちは舞台の上へとやつて來た。

そして、舞台の真ん中に一つ置いてあるマイクを中心にして、左側にマイクから見
て俺はマイクから左側に、理緒ちゃんは右側に着く。

足が震えてきやがつた。

みんなロツキヤラロツキヤラロツキヤラロツキヤラロツキヤラロツキヤラ
キャラロツキヤラロツキヤラロツキヤラロツキヤラロツキヤラ

意を決して理緒ちゃんの方を見ると、いつも冷静沈着な理緒ちゃんでさえ足が少し震えている事に気が付いた。

でも、必死に堪えようとしている姿を見て、ギャップ萌えと言つの

だろうか、いつもにまして可愛いらしく感じて少し緊張が和らいだ。

理緒ちゃんも「ひらりを見たので、アイコンタクトをして漫才を始める。

俺と理緒ちゃんが必死に擦り出した渾身のネタを。

「始まりは中学一年生のときだ。覚醒が始まったのは。それから、人間がゴミクズにしか見えなくなつて、今では人間が死んでも何も感じない。そう、蟻を踏み潰しても何も感じないよつこ

「……アナタのやつたのはキセルです。どうしてキセルなんか、やつたのですか？」

「右手が疼くからです」

「……恥ずかしくないんですか？」

「恥ずかしい？ 確かに初めは咎めた。だが、第三の目が開化する頃には何も感じなくなつた。そう、蟻を踏み潰しても何も感じないよつこ」

「……ダメだ「イツ、早くなんとかしないと」

「いいですか、人間は三種類に分かれるんだ。神に選ばれた者、そうでない者。あと一つ何か分かるか？」

「いえ、分からないです」

「フツ……神に選ばれた者ですよ

「……ソレ、一種類」

「ま、人間なんてそんなものですね」

「……ドコ行くんですか？」

「あつち

「あつちってドコですか？ 行つちりやダメです」

「秋葉原……なんですか？ 一体、この僕をいつまで拘束するんだ！」

「キセル、よくない。調書とる。名前は？」

「名前？ 名前だと？ フハハハハハ！ 愚かな質問だ。僕に名前なんてあると思つてないんですか？」

「思ひます」

「……」

「名前は？」

「ヨハン」

「……はい？」

「ヨハン・リーベルト」

「……名前は？」

「言つてこるじゃないですか。ヨハン・リーベルトだと

「ナ・マ・ヒ・ハ？」

「恭介」

「名前は何ですか？」

「恭介リーベルト」

「名前は？」

「だから、恭介リーベルト」

「ハ・ヨ・ウ・ジ・ハ・？」

「高坂」

「高坂恭介さんですね。……ヨハン・リーベルトみたいな名前ですね」

「違う

「仕事は何ですか？」

「世界の支配者」

「仕事は？」

「世界の……」

「シ・ゴ・ト」

「カラオケ店員」

「最初から言つてください」

「完全なるカラオケ店員」

「イリフですか？」

「千葉の墮天使が舞い降りる」

「……とつあえずキセルはドコからしたのですか？」

「約束の地」

「それはドコですか？」

「血に染められた羽がある場所だ」

「赤羽ですね。……では、三倍の料金を頂きます。はい、もうしないでくださいね」

「……」

「? どうしました?」

「『スプレ代金、貸して貰おう」

「……」

「あの……『スプレ……」

「……」

「なにと、払えなに……」の、肉の衣装……」

「……一つここでですか？」

「はい」

「恭介さん、はがなこですかよね？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「あいつはいったい何がなこですか？」

「今のオチだぞ！」

「オイ！」

笑いは？

ねえー？

「恭介」

「なーに……理緒ちゃん？」

「落ち込んですね」

「そりゃあ、笑い声一つ起きなかつたからね」

はあ……滑つた光輝を大笑いしたのに、とんだP.H.O.D.だよー。

「でも、落ち込んではかりもこられませんよー。」

あ……そりだ。

俺こは、優希ちゃんとの漫才も残つてこいるんだつたな。

でも、でも、それさえ越えれば

「忘れてこますか？ 女装コンテストを」

「あ」

「……。」

「」

「…………ぶつちやけありえない！」

「はがない……、僕は友達が少ない、の略だって、分かる人はこの学園に多くは居ないと思います」

「そうだな……それが敗因だな。ガリ勉バカにラノベとかイミフだよな……。やっぱり、‘いとこい’のネタをパクるべきだったな」

「はがない……、僕達は爆笑が少ない、の略になつてしましましたね」

誰が上手い事を言えと！

暗い闇を照らす光に

もしも願いが届くなら

流れ星に祈りを捧げるよ

「めんなさい

- 1 -

まさか……まさか俺の力作ネタが失笑すらしない無音で終わるなんて……。

そんなの嘘たゞ！

おの...
】

「す、すゞく面白かつたですっ」

[REDACTED]

落ち込んでいる俺に、優希ちゃんは健気に優しい嘘をかけてくれる。

……………ありかと がんじ優希ちゃんは優しいれ

「そ、そんなことないのですっ！」優しいと言つたら、恭介さんの

「かす」と優しくてすー！」

読送なんかしなくてモテいのは
なんだよな。

「ありがとう」

だから素直に受け取っておく事にする。お互に譲り合っていたら、終わらないだろうからね。

「さあ、最後にひとつ、一回練習といふか」

優希ちゃんが笑顔で返事をしてくれる。

せ
！

それに、一度も無音なんて、流石に今度こそ優希ちゃんの言葉も届かないほどに、心が壊れてしまう。

俺の心は何処かの王様と同じで豆腐メンタルだからな。

『次は一十三番です』

ついに俺たちの番号が呼ばれてしまった。

だが、大丈夫だ。今やつた練習と同じようにやれば。

「き、緊張しますです」

「俺もだよ」

まあ、俺の場合は、緊張より恐怖の方が大きいんだけれど。

「…………恭介さん…………」

優希ちゃんの身体が震えている。

「…………行こう。成功させるために」

俺は震えている優希ちゃんの手を握る。

優希ちゃんが一度目を閉じて、そして何かを決心したののように「はいっ」と力強い返事を聞かせてくれた。

そして、俺は一度目の、優希ちゃんは初めての舞台へと歩き出す。舞台の袖から出てきた時、俺を見て誰かが笑った気がするが気のせいだろう。目の前の客の一人から、金髪の生徒から発せられる笑われるオーラなんて。……笑わせてあげるよ、お前の嘲笑い顔を、本当の笑い顔にな。

そんな金髪の横には、素直に頑張つてという気持ちが伝わる少し不安顔の桜花が応援してくれている。何処かの金髪とは違つて、理緒ちゃんはどうだろう？ 顔では想像もつかないが、応援してくれているのかな？ 分かんないなら、ポジティブに応援してくれていると考えておこう。

「…………」

今回も俺は、客から見てマイクの右側に立つていて。左側には優

希ちゃんが。

そう言えば、テキトーにわざと同じ左側……俺からすれば右側

だが、ボケはこっち側、ツツコミはあっち側とかつて決まっているのかな？ もし決まっているのなら、逆ならばプロの目線から見たら、それだけで減点？

うわー。漫才とかコントとか好きだからよく見るけど、どっちがボケでどっちがツツコミとかなんて一々見ないからなあ。

えーと、確かフットボールアワーは、岩尾望が左側で後藤輝基が右側だよな？ 後藤がツツコミなんだから、俺はボケの位置か？ オードリーの春日やタカアンドトシのタカもダウンタウンの松本人志も左側なんだから、正解だよな？ 俺はさつきも今回もボケ担当だし。

まあ、世代が世代だけにダウンタウンが漫才やっている姿は見た事ないけど。もひ、司会者レベル行っちゃつてたからね。

「……」

優希ちゃんが不安そうにこっちを見る。

俺は大丈夫だと田でコントクトして、漫才を始めた。

うん、大丈夫。香菜ちゃんのネタは面白かった。つまりは、あとは俺と優希ちゃんの腕の問題。

でも、大丈夫。さつきの通りにやれば。

「はい、どうも」

「どうもです」

「まず、自己紹介をしましょうか」

「そうですね。凄くいいアイデアだと思いますです」

「でも普通に自己紹介をするのでは面白くないので、キャッチフレーズを付けて紹介するのはどう？」

「恭介さん！」

「あ、はい」

「凄くいいですね！」

「ありがとうございます。じゃあ、まずは俺からいへよ」

「はいです」

「二次元代表、緑川恭介です」

「……」

「……」

「……」

「……いや、シッコンですよ。」（）「次元でしょ」

「いえ、恭介さんの顔のレベルは、（）画素レベルなので合ってないと
思つてしましましたです」

「いやいや、ハイクオリティでしょ」

「ノンスタイル井上ですね。分かれます」

「お願いだから分からいで」

「次は優希が自己紹介しますです」

「もう、名前言つちやつたけどね」

「（）引きこもり協会名誉会員の竹達優希です」

「嫌な協会だね！ しかも名誉会員なんだ！」 優希ちゃん…

「はいです！ 名誉です！」

「そんな力強く言つ」とじやないでしょ！ そんな引きこもつて何
してゐの？」

「放送禁止用語が飛び出でピーピーと音が鳴りますが、いいですか？」

「え？ 放送禁止用語つて優希ちゃん何やつてるの…？」

「優希は勇気を持つて、のりピーピーのよつて口に快樂に溺れています
す」

「うん。なんか色々シッコリと音が多くて困るナビ、上手いこと
言つてゐるし、確かにピーピーへつたけど、絶対違つてゐるに必要だった
よねとか、でかやつちやダメだよ…。」（）

「……やつてないよ

「なんで一瞬黙るんだよ…」

「いや、もうこいつやん。放送禁止用語、ピーマンの話なんて

「いやいや… ピーマンの話なんてしてないから…」

「あ、引きこもり協会のことだったね、ゴメンです」

「話、戻しそぎだよ…」

「ノンノン、ノンノン。こつまで引をひもつてゐるですかつ…」

「続けるの！ てか、俺が引きこもってたの…？ 逆じゃね？ あと俺、ツツ「ミになつてるよね…？」

「緑川！ いつまで自宅警備員をしてるですか…？」

「名字で呼ぶの…？ 親なら名前で呼べよ

「優希は先生です」

「あ、そなんだ…」

「緑川！ いつまで自室警備員をしてるですか…？」

「自宅から自室にレベルアップした！」

「早く開けなさいです！」

「うるせえよ！ 先公は帰れよ…」

「いつまでウサギ小屋に引きこもつてるですか…？」

「え？ 俺、家じゃなくウサギ小屋に引きこもつてるの…？」

「居心地ですか？ 居心地が良いのですか？」

「居心地の問題じゃねえよ！ そつじやなくて家に来ている前提で頼むよ」

「それもありですね」

「それしかねえだろ、大概は」

「コンコン、コンコン。グリーンリバー出て来なさいです」

「何故英語…？ 嫌だよ、もう学校になんかに行きたくねえんだよ！」

「何で学校に行きたくないですか。理由を百個述べるです」

「そんなにはねえよ！ どんだけ俺は抱え込んでるんだよ。今は誰とも話したくないんだよ、帰つてくれよ」

「どうして誰とも話したくないんだ？」

「会うのが億劫だからだよ」

「どうして会うのが億劫なんですか？」

「気分が乗らないからだよ」

「どうして気分が乗らないんですか？」

「会話下手か！ 何でオウム返しの言葉ばっかりなんだよ」

「どうしてなんですか、理由だけでも教えてくださいです」

「……イジメられてるんだよ！」

「……それだけの理由で、ですか？」

「充分過ぎるだろ！ 同じクラスの奴にイジメられてるんだよ！」

「よく聞くのです。イジメと言うのは、イジメている人は楽しんです。イジメている人の楽しみを快楽とすれば……いいんじゃないですか？」

「最後尻つぼみ過ぎるだろ！ てか可笑しいだろ！ 僕にMになつてか！」

「とにかく学校に来てくださいです。頼むです！」

「嫌だね、行きたくねえ」

「お前が来ないと……先生の評判が下がるんだ」

「結局自分のためかよ！ もういいよ」

「「ありがとうございました」」

ネタが終わつて舞台裏へと戻る。

『次は二十四番です』

アナウンス担当の生徒がそう放送し、二十四番の人たちが、ガチガチになりながら俺と優希ちゃんの横を通る。横目で睨まれた気がするが、それは仕方ないと思つ。

「恭介さん！ ありがとうございます！」

優希ちゃんが満面の笑顔で、俺にお礼を言つてくる。

「俺だけの力じゃないよ。優希ちゃんの力があつてこそだ。それに

……香菜ちゃんもね」

「……はいっ」

大爆笑。一言で語るのなら、この言葉が適切だろう。今日始まって以来の大爆笑。これを聞いてしまつたら、次の人への足取りが重くなる事は仕方のない事だろう。

「人前で喋るのは、凄く凄く緊張して……怖かつたけど、すべてすべて恭介さんのおかげですっ！」

優希ちゃんが再び、俺を言つてくる。今度はお辞儀も一緒に。

「あげてよ、さつきも言つたけど、俺じゃなくとも

「いえ！ 恭介さんだから頑張れたんですよー！」

「え……て、照れるじゃないか。優希ちゃんにそんな事言わると。

「ふふ。恭介さん、顔赤いですよ？」

「え？」

「マジ？……恥ずかしい。

「……でも、本当に本当にありがとうございました」

「もういいって」

でも、本当に大成功してよかったです。光輝の悔しがる顔が面白かった。まあ、光輝もすぐに笑つてたけど。本当の意味で。

「これで爆死なら優希ちゃんには申し訳ないし、もちろん理緒ちゃんにも。」

「……」

結果的にはよかったですけど、香菜ちゃんのネタ……多少はアレンジしたけど、まるで最初から俺が相方みたいに書いてあつた。香菜ちゃんの台詞の一部は、男言葉になつていたし。

……やっぱり、最初から

「恭介さんのおかげで、あのコンテストも頑張れそうです」

「え？」

「女装、楽しみにしますね」

……。女装、コンテスト……。

また、忘れていた……。まだ、黒歴史は終わつてなかつたあああああー！

『それでは、一年A組によりますコンテストを開始します』

ついに、地獄の時間が訪れてしまつた。

一生忘れる事の出来ない人生の一欠片になり、黒歴史と言つタイトルで一ページを飾るだろう。

「恭介、面白かった。……また滑れと思つてすまなかつた」
光輝が謝りに来た。俺が感じていた事に気付いていたんだな。

「なら焼きそばパン買って来いよ、パン工場行つて」

「すみません。購買で許してもらえませんか」

ふむ……どう料理してくれるか？

「……そうだ。今度、手紙の相手紹介しろよ。どうせ女だろ」

「お前、超能力者か！」

「毎週、手紙受け取つてんの知つてるんだぞ？ 彼女なのか？」

「……まあ、大切な子かな」

「リア充爆発しろ！」

羨ましいなあ……光輝には彼女がいるのか……リアルに充実しているのか……爆発しろ！

まあ、俺には愛花ちゃんが、高嶺愛花ちゃんがいるからいいけどね！ 画面の中から出てくれないけど。

「早く、着替えろよ。袖から女子の男装と水着、見ようぜ」

そう提案してきたのは拓夢。すでに女装し終えている。前に見た事あるとはいえ、こんな姿を生徒に見せると考へると……「うう！ 恥ずかしいよ！ 分かつっていたつもりなのに！」

「僕は着替え終わつたよ」

悠斗も着替え終わつて、いっしにやつて來た。

……着替えるか。

着替え終わつて、舞台の袖で、俺と拓夢、光輝、悠斗の四名は今から反対の袖から登場する女の子を今か今かと待つていた。

智紀は残念ながら、いや正しい選択だが、下らないとか言つて舞台裏の更衣室に残つている。紳士だね。

俺たちも紳士だけだね。変態と言つ名の。

『では、準備が整いましたので、今から開始致します。ただしその前に報告があります。登場予定でした竹達香菜さんは欠場になりま

す』

香菜ちゃん……今頃はオーディション会場かな。

『では始めます。最初の生徒は、植田桜花さんです』

最初は桜花か。

俺たちは、女子がどんな姿なのかは知らないからな。初めての『ご対面だぜ。

「……」

桜花の格好は、まさかの遊戯。遊戯王の主人公、武藤遊戯。あの独特の三色の髪の毛を見事に表現している。

「腕にシルバー巻くとかさ」と桜花はいつもより低い声で遊戯の台詞を言う。似てはいなけれど。当時は棒読みとか、まったく気にしてなかつたな。

『次は、竹達優希さんです』

次は優希さんか……『ブツ！』

笑つてしまつたのは優希ちゃんに悪いけど、だつて優希ちゃんには絶対に似合わないキャラなんだもん。

「力力ロットー！」

優希ちゃんが、恥ずかしそうに、役の台詞……ドラゴンボールのベジータの台詞を叫ぶ。

『次は、堀江理緒さんです』

理緒ちゃんには、あとでもう一度謝らなことな。

「筋肉筋肉～」

ふはつ！ これは笑うつて！ あの理緒ちゃんがリトルバスターズの井ノ原真人の台詞を！

普段、絶対言わないだろう言葉だけに……ふはつ！

『ラストは釘宮結愛さんです』

結愛ちゃん……。そう言えばあとでゲーム一緒に作る事になつたつてみんなに言つてなかつたな。明日にでもメールしとくか。

『海賊王に俺はなる！』

結愛ちゃんの格好は、原作漫画が超売れてるワンピースの主人公、

モンキー・D・ルフ。声は似てないけど、流石アイドル。見事に自分のモノにしてる。

『では次は男性の方々です』

つ、ついにキター！ 暗黒の時間が！

『まずは、大野光輝さんです』

「俺かよ」と隣で呟いた光輝は、拳を握り締めて意を決したように舞台へ歩き出した。

「東中出身涼宮ハルヒ。ただの人間には興味ありません。この中で宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居たらあたしのところへ来なさい！ 以上！」

痛い。痛すぎる。人気ラノベ、涼宮ハルヒの憂鬱のヒロイン、涼宮ハルヒの格好をして、声が太く棒読みで涼宮ハルヒの台詞を言った光輝。

勇気は認めるけど、声優の平野綾への冒頭だよ、これは。

『次は、笠原悠斗さんです』

「ぼ、僕の番か……」

「頑張れ」

「うん」

恥ずかしそうに、悠斗は舞台へ歩き出す。Sの女とかは、こういうの見て、笑みを浮かべるのかな？

「うるさいうるさいうるさい！」

声優オタクならば、この台詞だけで誰の真似か分かるんだろうなあ。ニコニコ動画とかだったら、「ぐぎゅうううう」ってコメントの弾幕が流れるだろう。

うん。でも実際、声は仕方ないとしても、光輝と違って、悠斗は元々女の子っぽいし、背も小さいからルイズのコスプレに違和感がない。素晴らしい。

『次は、黒羽拓夢さんです』

「来てしまつたか……」

そう呟き、拓夢は舞台へ歩を進めた。

今、桜花たちは水着に着替えてるんだらうな。

「うんたん うんたん」

拓夢は、平沢唯の格好。やはり、アニメや漫画の実写化と並びの
は、黒歴史にしかならないと思いつく。思い知らされる。

『次は、陣内智紀さんです』

「ちつ……屈辱的だ」

まったくだ。秋葉原見たいに、周りにコスプレした人がいるなら
まだしも、一人きりのコスプレとか、拷問以外に何がある。

『マルマルモリモリ』

まさかの一人だけ一次元キャラじゃなく実在する人物！ 芦田愛
菜の「コスプレ！」

小学生を高校生が演じる……キモい。その言葉以外の言葉が俺に
は見つからない。

『ラストは、緑川恭介さんです』

来たか……ええい！ もうどうにでもなれ！

舞台の真ん中まで歩いて来た俺は、見ている生徒たちに向かって
台詞を叫ぶ。

「光の使者キュアプラック、光の使者キュアホワイト、二人はプリ
キュア！ 間の力のしもべたちよ、とつととおうかに帰りなさい！」

初代のプリキュア！ 僕、プリキュアの衣装だよ！

秋葉原でさえ、プリキュアのコスプレしている奴なんて居ねえん
じゃね！

「……オワタ」

色々な意味で。

「まあ、よく頑張ったよ」

拓夢がそう言つてくれる。

「拓夢、一言いいか？」

「え？ なに？」

さつきの唯の感想を言ってやる。

分かる人には分かるだろう。拓夢が分かるかは知らないが。

「あんまり上手くないですね」

「いやああああ……」

中学生か高校生か、可愛い少女が少年たちに無理矢理連れてこさせられたのは、六畳程の小さい部屋であった。

「た、助けて……」

少女が弱々しく少年たちに向かつて喋るが、そんな言葉が実る事はない。

部屋はコンクリート剥き出しで、長方形の形になつていて、天井には一般的な蛍光灯があるだけである。ただ、一点を除いては。

「ほら、服を脱げ」

少年の一人が、少女にそう命令する。

「いやあああ……助け……て……」

だが当然少女は脱いだとはしない。その事にイライラしたのか、少年の一人は少女の顔の目の前に刃物を向けた。

「ひつ……や、やめて……殺さないで……」

「だつたら、早く脱げ」

「ぐすつ……」

「死にてえのか！」

恐怖で涙を浮かべる少女に、少年は短気なのが怒りをぶつける。

「止めないか。怖がつているじゃないか。コイツはすぐに怒るんだ。気にしないでくれ」

「ハア！？」

自分をバカにされたと思ったのか、少女を慰める少年に短気な少年が食つてかかる。

「時間がないんだ。学祭は一週間後に迫つていいんだ。お前は設備の方をやつておいてくれ」

「チツ……命拾いしたな」

短気な少年は少女にそれだけ言つと、部屋を出でいく。

「さあ、服を脱いでくれるかな?」

「……助けて……」

「うーん。ゴメンねー。君は売られたんだよ?両親に。だから君を助けてくれる人はもう居ないんだ」

「……」

少女の両親は、事業が失敗して多額の借金を迫つてしまつた。その借金を返すのに普通の金ではどうしても足りない。ドラマとかならここでヤクザに金を借りるんだろうけど、今はヤクザに金を借りるリスクーな事をする人はほとんどない。

その代わり増えてきたのが、子供を売る事。もちろん合法ではなく違法ではあるが、ヤクザとは違ひ金を返す必要がない。何故なら代わりに子供を貰うから。金の返済が出来ずに利子で返済額だけ増えている、毎日取り立てられるなんて事がないこの方法は、最近借錢してしまつた人の最後の道として、よく使われている。

子供を貰う方も奪うのではなくて、あくまでも金との交換なので、両親に訴えられる事がなく、警察に捕まつてしまつ確率も低くなり十分なメリットがある。

そんな取引の犠牲の一人が、今泣きながらピンクのひらひらがついた可愛い服を脱いでいる少女だ。

「ひっく……」

「うん……じゃあ、あそこに座つてもらえるかな?」

そう言つて少年が指さした場所は、何もないこの空間で唯一存在している物体が置かれている。

見た目的には椅子だが、ただの椅子ではない事が、見ただけでもく分かる。明らかに座つた瞬間に、椅子に拘束されるであろうと思わせる手枷と足枷がついていた。しかも座る部分の真ん中が便器のようにな、穴が開いていた。

「……」

「大丈夫だよ、別に死んだりするわけじゃないんだから」

そう少年は言うが、少女は震えが止まらないらしく足がガクガク

揺れている。痺れを切らした他の少年が少女を椅子に座らす。

「きやつ！」

その瞬間、予想通りに少女は手枷と足枷を椅子に固定させられた。少女もそれには予想していたが、それでも拘束され身動き取れなくなると、余計に恐怖を感じる。

「たす……ああっ！」

少女の身体が一瞬ビクンとなる。Bしかない胸では大きく揺れる事はなかつたが。

「お、お尻が……」

少女がそう呟く。そう少女の身体が、一瞬ビクンとなつたのは、お尻に何かが入つてきたからだ。

「浣腸つて知つてる？ 意味はお尻に薬を入れることなんだけど、市販されている薬の効能は排便作用でしょ？ それと同じものだよ。君は商品なんだから綺麗にしないとね。中にはスカトロが好きな変態さんもいるけど、それは、よく一部。売るにはスタンダードが一番なのさ」

そう語る少年の笑みは、短気な少年が怒鳴つた時よりも、少女は恐怖した。

「あ……あああつ……」

少女が恐怖している間にも薬の効能が出始め、少女の身体は排便しようとする。が、少女は必死に我慢する。それはそうだ。男たちの前で排便を見られるなんて、恥ずかしいに決まっているから。

「我慢はよくないよ？ この程度で恥ずかしがつてじゃ学祭じゃ死んじやうよ？」

「……あ、あああつ」

排便という生理現象に耐えていた少女だったが、ついに耐えかねて音を出して排便が実行されていく。

「……うう」

裸姿で、さらに排便の姿まで見られた少女の双眸には、涙が溢れかえつっていた。

排便が終わった後、少女は再び少年たちに連れられて裸姿で歩かされる。

廊下もコンクリートで固められていて、光は全て蛍光灯からで、外からの光は一切届いていない。目隠しされ連れてこさせられた少女は、恐らくここは地下なのだと思った。

「ここが目的地だよ」

そう少年が少女に告げると、他の少年が扉を開ける。

そこはさつきの六畳程の小さい部屋とは違い、学校の体育館くらいはある大広間だった。

「ああ……」

少女が小さく呟く。部屋に入った少女の目に飛び込んできたのは、数十人は居る拘束された他の少女たちだった。ここは少女たちを拘束している部屋なのだと、そして自分もここに拘束されるのだと、少女は思った。

「まあ、予想通りだとは思つが、一週間後の学祭までみんなと同じようにここで拘束されてでもらつ」

「……」

「大丈夫。君たちは大切な商品なんだ。傷なんかつけたら売れないもん。大切に、大切に、保管するから。裸でも寒くないよう室内温度もバツチリさ」

そう少年が笑みを浮かべながら少女を他の少女の間へと歩かせる。少女たちは、縦一列に何列にもなつて拘束されている。

「じゃあ、拘束するから動かないでね。動くと痛い目みちやうからね」

「うう……助け……て……」

「じゃあ、まずは口を開けてもらえるかな?」

「うう……」

少女は泣きながらも、少年の指示に従い口を開ける。少年の話を

信じるならば、従つておけば殺される事はないと考えたから。

「では、入れるからね」

少年はそう言つて少女の口に、ボールギャグを加えさせる。ずれなくように頭上を縦にベルトを通しているうえ、下側もしつかりと顎にかかるベルトが付いているから簡単に外れない本格使用だ。ボールギャグとはSMグッズなどでよく使われる穴の空いたボールである。それを加えさせる事によつて、装着者はしゃべれなくなり、さらにずっと口を開けている状況になり、穴から唾液が滴り落ちてくる人気グッズである。

「次は目隠しするね」

目隠しは結構本格的なもので十分な大きさがあり、きつちりと目を覆つて漆黒の暗闇を装着者に与えてくれる。これで少女は盲目になつたも同義だ。

「……ああ……」

少女は喋ろうとするが、ボールギャグのせいで、唸るくらいしか出来ない。

「大丈夫大丈夫。次は足を拘束するからねえ。少し足を広げてくれるから」

少女が言われた通りに足を幅を少し広げると、少年は少女の足首に拘束棒の付いた足枷を装着する。これで少女は足の幅を変える事が出来ない。

「次は手を拘束するかな。手を後ろを出してくれる?」

最早、抵抗など出来るはずもない少女は言われた通りに両手を後ろへ回す。少年はその両手にアームバインダーを被せる。アームバインダーとは簡単に言えば、手の自由を奪う袋である。袋には手首、肘、袋の口の二の腕の分にそれぞれベルトが装備されて後ろ手に締め上げるようになつていて、肘のベルト部分から斜めにショルダーベルトが出ていて左右クロスする形で袋の口に繋がつていてこれを肩にかけて使う。袋の先にはリングが取り付けられていてチェーンなどを繋ぐことが出来る。実際、チェーンが繋げられていてる。こ

れで少女は腕を動かす事も出来なくなつた。

「大詰めだ」

少年が少女にボディハーネスを装着する。亀甲タイプの普通のハーネスで大きな特徴はないが、アソコに日本のバイブを装着できるダブルのバイブホルダーが取り付けられるようになつていてる。

「う……うう

実際、一本のバイブが取り付けられており、少女の一つの穴へと入れられてしまつた。

「あとは、オマケと」

少年が少女に革製で赤色の首輪をつける。

「最後にヘッドフォンつけるね。これつけたら何も聞こえないけど、何かあるとにはヘッドフォンに放送かけるから」

そう言つて、少年が少女へヘッドフォンを装着させる。

「あ、食事の心配は要らないよ。鼻からチューブで栄養送るから」

「……」

「ああ、もう聞こえてなかつたね」

そうだつたそうだつたと平手打ちして、少年は両隣の少女と鎖で繋いで、バイブのスイッチを入れた。

「開発、開発つと

「うううううううう

「泣くねえ。くくくつ

目隠しされて見えない少女に、初めて少年が言葉にし難い歪な笑みを浮かべた。

学祭も終わり、静寂に包まれる葉鍵学園。

だが、その下ではまだ学祭は終わつていなかつた。

「……どうしたの？」

無口な少女が、止まつたまま動かない少年に話しかける。

「……ああ、悪い。学祭を思い返していた」

「……」

「さあ、宴は整っている。行こう。主催者が遅れては、客に失礼だからね」

「……」

今度こそ、少年は止まりもせず奥の部屋へと歩いていく。少女も少年の後を付いていく。

アイドルオークション

コンクリートの大部屋の正面に、看板が掲げられている。その下からの扉からは、少年と少女が出てきた。

左右には沢山の男子が、まるで野球観戦のように満員御礼で犇めき合っている。

真ん中は本当に野球場みたく、左右と正面によりかなり低くなっている。なので、真ん中の唯一の出入口は後ろの扉しかないようになっていた。

「みなさん、お待たせ致しました。アイドルオークションの開催です」

司会者の少年の言葉に会場が盛り上がる。

「みなさん、今回は沢山の質のいいアイドルが揃っています。必ずや、みなさんに合ったIDOL……自分での人形が見付かることでしょう」

「「「ウオオオオ」」

「IDOLしたちによる様々なパフォーマスもぶつつけ本番で見もので。もちろんパフォーマスには敗者が必要です。敗者には……」

「「「死あるのみ」」

「そうです。死というパフォーマスをしてもらいましょう。死に方も様々。必ず楽しんで頂けると自信していますよ」

少年は指をパチンと鳴らすと、後ろの扉が開いて五人の少女が出てきた。だが扉から少し出た所で足を止める。いや、止めさせられ

たと言つていいだろ？

五人の少女は、全員スクール水着姿で、小学生見たく前に大きくマジックで名前が書かれている。平仮名で。

客たちがみんな五人の姿に気付いた事を見図つて同会者の少年が喋り出す。

「最初のパフオーマスは、王道中の王道、綱渡りです」

「「「ウオオオオ」」」

よく見ると、少女たちの股の下にはピンと張つたロープが、正面の壁まで続いている。もちろんロープは股を擦る感じに設置されている。

「少女たちは、ビリには罰ゲームを与えると言つています。これで命懸けのレースが見られるでしょう。どんどん安全面が強化されてハラハラ感が感じないテレビなんかより凄い場面が沢山あると思いますよ」

少年の横に居る少女が、自分の役目なのか、五人の少女の名前を紹介している。

「気に入つた子が居たなら、名前を忘れずに」では……スタート……少年の開始の合図の言葉にスクール水着姿の五人の少女が、ゴー！ 目指して走り出す。……出そうとするが、アソコにロープが当たつて走る事が出来ない。

「針金なら血が見れるんですが、残念ながら少女たちが傷付いてしまいますからね」

少年がそうな事を言つている間にも、少女たちはビリにはならまいと、必死に前へと足を進める。

ゆつくりながらも、トップの少女が真ん中まで進んだ時だつた。

「んあつ！」

小さい声で「あんつ」とか「んんつ」とかはみんな呟いているが、突然トップだつた少女が大声で叫んだ。

「みなさん。真ん中からはロープに結び目を作つてあります。余計に歪む表情と声を聞くことが出来ると思います」

「「「ウオオオオオ」」

少年の言葉に会場のボルテージも一気に上がる。ここにはそれを止める人はいない。みんな欲望の限りに自分に合ったペットを探している。

「かはあ」「うぐぐ」「はあ……はあ……」

いろんな声が飛び交う繩渡りも、ついに終わりを迎えるとしていた。

「あつ……はあ」「くつはあつ」

五人中三人が「ゴールして、残り一人によるビリ対決となっている。互いにビリだけにはならま」と、必死に前へと前へと足を進める。少しリードしているのが、金髪ツインテールで気の強そうな少女。少し遅れをとっているのが、金髪の少女。こっちも金髪だがこちらは、サイドテールで本来なら元気そうな少女だ。

「さて、そろそろビリが決定しますよ」

少年がそう言った時、リードしていたツインテールの少女が結び目にアソコが当たつて一瞬足が止まる。その隙に遅れていたサイドテールの少女が抜き去り「ゴールを決めた。

「はあ……はあ……やつ……たあ……」

ゴールしたサイドテールの少女は安堵した瞬間に、意識が飛んで気絶してしまう。

「そ、そんな……！」

先にゴールされてしまつて呆然と立ち尽くす、ツインテールの少女。

「罰ゲームを受けるモノが決定致しました」

「や、やめろ！ あたしに触るな！」

司会者の少年がそう言つと、ビリの少女を数人の少年が取り押さえる。そしてスタジアムの真ん中が開いて、奈落のようにそこからが透明な箱が現れる。

「今から行う罰ゲームは、リッサの鉄板です。ただし、今回は特別に中が見えるように透明になつています」

リッサの鉄板とは名前の通りの板で、犠牲者を中に入れた後にゆっくりと蓋をネジで押し下げていく。やがては犠牲者は押し潰され死ぬ事となる。昔に本当に処刑道具として使われていた時には、圧死までに数日間かかるほどゆっくりと蓋は下げられた。当然その間は食料も水も与えられず、飢餓に苦しむ事になる。

箱の大きさも、身体を縮めてやっと入れるぐらいで、やはり手足を動かす余地はない。また、ネジ式であるためにある一定の負荷を維持する事が非常に容易であり、折り畳む形の拘束具とも似たような使いかたをする事も出来る。

「ふざけるんじゃないわよ！ 離しなさいよ…」

ツインテールの少女は抵抗するが、少年の力には敵はずもなく、少女は箱に入れられてしまう。

「本来なら、数日間をかけてじっくりを圧死させるわけですが、残念ながらそんな時間はないので一気にいかせて頂きます。その代わりに箱の下に蛇口が付いているのが見えるでしょうか？ 少女から出た血が流れる仕組みです。飲みたい方は一杯千円で販売します。量には限りがありますので」注意下さい

司会者の少年がそう言つと、客から「買つた」の声が響き渡る。
「やめなさいよね！ ふざけるんじゃないわ！ 今すぐ解放しなさい…」

棺桶見たく寝かされている少女の罵声が聞こえる。硝子は特別製の物で、外からは中が見えるが、中からは何も見えなくなつていた。
「それでは開始します」

少年の言葉を合図に、蓋が下がつていく。あまり大きくない胸だが、それでも最初に当たるのは胸なので胸が圧迫されしていく。
「や、やめなさい…」

少女の言葉などに聞く耳を持つものなど居るはずもなく、客に至んな笑みを浮かべさせるに過ぎない。

「や……やめて……あたしが悪かつたから…」

もう氣の強そうな姿はなく、涙を浮かべている。それでも蓋はど

んどん下がつていき、ついに身体全体を潰しにかかる。

「う……う……ああ……う」

箱の中から漏れてくる呻きは逆に、客は静かに箱の中の少女を覗いている。

「うう……うあああ……ぐううううええ」

引きつった苦悶の声。その声が大きく高まつた次の瞬間、骨の砕ける音が響いた。

「きい……ひい……きや……う……」

骨の砕ける音と、少女の断末魔の声が響く。箱の中に見えるのは、どろりとした赤い液体が溢れ出した搾り出された血に、碎かれた骨の欠片やら皮膚の断片、脳味噌などが混じり合つたものだ。

「……ウオオオオオ」

少女の悲鳴が途絶えた瞬間、今度は客から盛大な喚声が響き渡る。「それでは、人形とワインの販売を開始します

その後もパフォーマスと罰ゲーム続いた。

頭蓋骨粉碎器、伸張拷問台、ガロット、ギロチン、拷問車輪、鉄の処女などで殺されていく少女。

運よく勝ち残つても、オーフショットで落札され、連れていかれていく。こんな闇オークションで貰われた少女たちが、普通に生活など出来るわけがない。死んだ方がマシだ、死にたいと思う生活が待つていてるだけである。

「残念なお知らせです。ついに最後のパフォーマスとなつてしましました」

少年の言葉に客たちがブーイング。だが、そんな事は予想済みと少年はと言葉を続ける。

「最後ですが、もちろん一番盛り上がるのも最後なのです。よつて、最も素材のいい五人が登場します。どうぞ」

後ろの扉から五人の少女が現れると、ブーイングは一気に大歓声

と変わった。

少女たちは手足を枷で拘束されていて、枷のせいで少女たちは四つん這いとなっている。首にはそれぞれ、黒、白、青、赤、ピンクの首輪を付けられている。

「最後の競技は、人間便器です。肉便器という言葉を聞いたことはありませんか？ 抜きゲーのエロゲーなんかでよく登場する言葉ですね。文字通り人間を便器にしてしまうといったものです。無理矢理に。ですが、今回は無理矢理ではなく自主的に飲んで貰おうと思います」

少女たちをスタジアムの真ん中で固定すると、少女たちの目の前に猫用の餌皿が置かれた。ただし、通常の餌皿より大きく、風呂桶くらいある。中には白い液体が入っていた。

「ルールはいたって簡単。最後まで残っていた人の負け、まああまり待たせても飽きてしまうので制限時間は一時間としましょう。では、スタート！」

確かに目の前に置かれた白い液体を飲む、飲まないは少女たちの自由だ。だが、それは飲まなければ罰ゲームが待っている。つまり強制されているのと同じだ。

「うう……」「うえっ」「マズッ」

少女たちは自分が死なないために、餌皿に注がれた白い液体……精液を嘔せながらも飲んでいく。

「そこまで。試合は決した」

「あつ……！」

少年の言葉に赤色の首輪を付けた少女が動搖して、周りを見渡す。……自分以外の少女の餌皿に白い液体がもう残っていない事に気付いて青ざめている。

「最後の罰ゲームの少女が決まりました。そして最後の罰ゲームは、……これです！」

スタジアムの真ん中が開いて、出てきた処刑道具に客たちは「ついに来た」と喜び合っている。

出てきたのは、ファラリスの雄牛。歴史上もつとも残酷な処刑道具と言われた代物。シチリアの君主ファラリスが芸術家ペリロスに命じて考案させたという伝承から一人の名を冠して呼ばれている。そのためペリロスの雄牛とも呼ばれる。その拷問結果から吠える雄牛と呼ばれたりもする。

名称からも分かる通り、外見は巨大な金属製の雄牛である。内部には人が入れるぐらいの空洞があり、犠牲者は胴体に設けられた扉から内部へと閉じ込められる。その後、雄牛全体を炎で炙つて内部にいる犠牲者を焼き殺すわけだが、その際に犠牲者があげる悲鳴が内部で反響し、まるで牛が吠えているように聞こえるのだ。

「や、やめて……」

もちろんそんな少女の言葉など認められず、少女は裸一貫で中に入れられてしまう。

火を付けられ、金属が熱くなりだす。

「オ……オオ……オオオオ……」

と、牛の鳴き声に似たくぐもった音が響き渡つた。灼熱地獄となつた内部で、少女が叫んでいるのだ。

「……ウオオ……オオオオ……」

どんどん音は大きくなる。

「……ウオオ……オオオオオオ……」

牛の鳴き声が部屋中に響き渡るが、暫くすると音がしなくなる。それを確認すると、火を消して、少女を中から取り出す。

少女の皮膚は全て剥がれ落ちて、肉も無惨に焼け爛れています。火刑と違つて死体が直接火に炙られるのではなく、焼けた鉄板によつて焼かれたせいで、きちんと全身のパーセンの判別が付く。

「では、オーフショーンに入らせて頂きます。少女たちと、その焼き物を」

「……気分転換に夜景でも見に行くかな」

やう思つた俺は、パソコンの電源を切つて部屋を出た。ずっとパソコンを使つてゐると、目に負担がかかるしね。

「……！」

俺は寮の屋上へ行くつもりだつたが、知らない先輩が居たので、校舎の方の屋上へやつて來た。……まあ知つてる先輩なんていないんだが。

だが、そのおかげで俺は今一番会いたい人に会つ事が出来た。

「……」

向ひのまゝには氣付いておらず、星空を見ている。

「……星屑、手を伸ばしても、決して届かない。……人の夢は儚い

「……香菜ちゃん」

「！」

俺が話しかけた事で、こひらに氣付いた香菜ちゃんは驚きの表情を一瞬したが、すぐいつもの表情へと戻つた。

「なにかよう？」

「ああ、用がある。どうしてお前は優希ちゃんを避けるんだ！」「つい溜まつていた感情を思い切りぶつけてしまう。女の子に對してお前と言つてしまつた。でも、そのくらい言つたかったんだ。

「……それは……あんたには関係ないでしょ……」

「関係ない……」

「つ！」

「優希ちゃんは、引っ込み思案なのに、前にこひらで興味を出して香菜ちゃんに思いをぶつけたんだぞ！なのに、姉である香菜ちゃんが逃げてどうするんだよ！」

「……」

香菜ちゃんは黙つてゐるが、俺は止まらない。心に仕舞い込んで

いた思いの丈を香菜ちゃんへとぶつける。

「香菜ちゃんが書いた漫才のネタ、面白かったよ。消した跡も沢山あつた」

「……」

「優希ちゃんのために書いたんだろ！俺の所も最初は女言葉で書いてあつた。本当は一緒にしたかったんだろ！ そんなに……そんなに妹より声優の方が大事なのかよッ！」

「……ええ、ええそうよ！ あたしには、あたしには優希より声優としての方がツ！ 方が……ツ！」

香菜ちゃんが言葉に詰まる。……それはやっぱり

「大事なんだろ？ 優希ちゃんのことが、なによりも。だから、恥を書かないように頑張つて、頑張つてネタを書いたんだろ？ だからあんなに面白いネタを書けたんだろ？」

「……ツそんだけ！ 大好きだよ！ ずっと一緒に居たいよッ！」

「なら……！」

「でもダメなの！ あたしが優しくしちゃ！..」

「どうして！」

「あたしは……もう優希とは一緒に居れないの！ 優希には黙つているけど、あたしは末期の癌なの！」

「え……」

「もう、この学園を卒業するまで生きれないのツ！」

……末期の癌……卒業まで生きれない……香菜ちゃんが……。

「なんで！ どうして！」

「あたしに聞かないでよッ！ あたしだって、あたしだって死にたくないわよッ！」

香菜ちゃんが死ぬ。優希ちゃんを残して？ みんなと一緒に卒業出来ずに？

「そんな……」

「優希はあたしなじじゃ生きれない。だけど、そんなことはもう許されないので！ だから優希は一人立ちしないといけないので！ でも、

そんなことは出来ない。優希は一人じゃ生きていけない。なのに優希は自分から人に話しかけれなくて友達なんか作れない。頑張って話しかけて、ようやく友達になりかけても腐女子だとバレたらイジメの対象となり、余計作れなくなる

「……」

だから、本をなくした時、一生懸命探していたんだ。そして見せるのを躊躇つたんだ。また、イジメられると思つて。

「だけど、あんたは違つた。優希は珍しく人になつたの。どうやつたかは知らないけど」

煙草を黙つていたからかな？

「だからお願ひ！ あたしの代わりになつて！ あたしの代わりに優希を……優希を守つて！」

「……」

あのいつも強気な香菜ちゃんが、俺に頭を下げる。言葉を失う俺に、香菜ちゃんは頭を下げ続ける。

「お姉ちゃん」

「優希ちゃん！」

「優希……」

後ろを振り向くと、階段のから、優希ちゃんが姿を現す。どうしてここに……？

「お姉ちゃん……」

「……」

香菜ちゃんが、身体を震わせている。その姿は驚きで言葉にならないといった様子だ。

「知らなかつたです。優希は、優希はいつもお姉ちゃんに迷惑をかけて……」

「ち、違う……！ 迷惑なんて……！」

「優希……弱虫で、二次元のキャラにしか話しかけれなくて……腐

女子とバレてイジメられて、上靴に「ゴミ」が入っていたり、教科書に死ねと書かれていたり、水をぶっかけられたときも、いつもいつもお姉ちゃんは自分を犠牲にしてまで、優希を……優希を守ってくれたです

そんな事が……優希ちゃんの過去に……なんて酷い事をするんだ。優希ちゃんがどんな趣味を持つていたっていいじゃないか！ 少数派だからって、批判するなんて……批判する権利なんて誰にもないのに！

「……優希、いつもお姉ちゃんに守ってもらいました。だから今度は優希がお姉ちゃんを守る番です」

「……優希……」

「だからッ！ だからッ！ 辛いときには泣いてくださいですっ！ 受け止めるように強くなりますですからっ！」

「優希……ッ！」

香菜ちゃんが、優希ちゃんに寄りかかって鳴き始めた。それを優希ちゃんが慰めている。

「うつ……うつ……」「メンね、」「メンね優希……」

「お姉ちゃんは悪くないのです。悪いのは優希なのです。分かりましたから、もう強くなんていいんです」

その後も香菜ちゃんは泣き続けた。空では闇を綺麗な光が照らしている。その一つが流れたのはきっと、夢が叶つたからだよね。

数日後、俺たちはカラオケへとやつて来た。俺と拓夢、光輝に悠斗。桜花に優希ちゃん……そして香菜ちゃんも。優希ちゃんの隣に座っている。

「夢、叶つたんだよな」

俺がそう呟くと、拓夢の入れた曲が流れ出した。……ん？

「」の曲は……？

もう俺が言つ事を予想していたんだろう。拓夢が笑みを浮かべて

マイクを差し出してくる。

「リクエスト上位」一百以内に入つて曲がついに入つたんだよ」

「マジか」

「ああ、最初はお前にくれてやる。歌えよ」

「ああ、そうだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188v/>

Tales of Life

2011年12月31日18時07分発行